平成９年度　日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

No.Ⅷ　中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と組織化に関する社会学的研究

―第２報―

財団法人　日本体育協会
スポーツ科学専門委員会

平成９年度　日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

No.Ⅷ　中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と組織化に関する社会学的研究

― 第２報 ―

報　告　者　(財)日本体育協会・中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と組織化に関する社会学的研究班

班　　長　嘉戸　脩[1)]

班　　員　加藤　爽子[2)]　菊　　幸一[3)]　宮内　孝知[4)]　山口　泰雄[5)]

担当研究員　伊藤　静夫[6)]

目　　次

第１章　研究の目的，方法，調査の実施状況……2

第２章　結果・考察……4

１．調査対象者の特性……4

２．日常のスポーツ参加……6

３．大会参加について……14

４．過去のスポーツ活動の状況……26

５．スポーツ活動に対する「のめり込み」意識……42

６．QOL・余暇観・余暇活動の状況……50

７．スポーツ実施上の問題や悩み……59

第３章　まとめと提言……61

〔資料〕

中高年のスポーツ参加に関するアンケート調査用紙……65

１）東京学芸大学　２）東京学芸大学附属高校大泉校舎　３）奈良女子大学　４）早稲田大学

５）神戸大学　６）(財)日本体育協会スポーツ科学研究所

第１章　研究の目的，方法，調査の実施状況

１．研究の目的

１．１研究の目的（３ヶ年）

中高年者のスポーツ参加の類型を，①伝統的なスポーツ種目（テニス，水泳，陸上球技など）の全国大会や国際大会参加を目的とする高度化型競技スポーツ志向参加，および②ニュースポーツと呼ばれる新しい種目（ペタンク，グラウンドゴルフなど）を含む大衆化型スポーツ参加とに大別し，それにかかわる参加者の参加意識や参加形式等の実態調査から，中高年のスポーツ参加の多様化とスポーツの組織化の現状の分析をする．その結果により，今後の中高年のスポーツの発展の可能性と限界を明らかにし，中高年のスポーツの振興と指導に関わる基礎資料を得ることをこの研究の目的とする．

１．２研究経過・各年次の研究目的

・１年次…中高年のスポーツ参加をめぐる多様化の分析１＝高度化型（平成８年度）

伝統的なスポーツ種目における高度化を目指す中高年スポーツ競技者の大会参加状況や意識，スポーツキャリア，社会的背景等の実態調査から，高度化型の中高年スポーツ参加者の特徴と問題等について考察する．

・２年次…中高年スポーツ参加をめぐる多様化の分析２＝大衆化型（本年度）

大衆化型の中高年スポーツ参加者については既成スポーツ種目参加者，およびニュースポーツ種目参加者を対象とし，各々のスポーツ参加の日常化を目指す中高年参加者の意識，スポーツキャリア，社会的背景等の実態とスポーツ参加の要因を考察検討する．さらに，１年次に実施された調査結果との比較分析によりその異同を明らかにしながら，中高年のスポーツ参加をめぐる高度化と大衆化の問題点を探り，中高年スポーツの振興策を検討する．

・３年次…中高年のスポーツ参加をめぐる組織化の方向性と総括的分析

１年次，２年次で得られた基礎資料をもとに，中高年のスポーツ参加をめぐる高度化型競技志向スポーツ参加，大衆化型既成スポーツ種目参加者，および大衆化型ニュースポーツ参加者を含む大衆化型スポーツ参加の組織の実態，ならびに両者を結ぶ組織のあり方を検討する．高度化型競技志向スポーツ参加，大衆化型既成スポーツ参加者に加え，大衆化型ニュースポーツを含む大衆化型スポーツ参加という二つの参加のタイプに関わる典型的なスポーツ組織や団体，クラブ等への調査することにより，その理念や運営形態，参加者の意識等を分析し，これまでの調査結果と比較検討を通して今後のわが国における中高年スポーツ組織のあり方を総合的に考察する．

２．研究の方法等

２．１研究方法

主として，質問紙法によるデータの収集と分析．

２．２調査方法

１　調査スポーツ種目，調査対象競技会および対象者

１）高度化型競技志向スポーツ参加者（平成８年度実施）

①陸上競技（男女）…全日本マスターズ選手権の10種目の１・２位程度の選手約200名

②水泳（男女）…日本マスターズ選手権の10種目の１・２位程度の選手約200名

③テニス（男女）…全日本ローンコートベテラン大会３種目上位入賞者約200名

④ソフトボール（男性）…全日本壮年大会（40代），実年大会（50代），シニア大会（60代）の１・２位程度のチームから約200名

⑤バスケットボール（女性）…全国ママさん交歓大会上位チームから約200名

２）大衆化型既成スポーツ種目参加者（本年度

調査対象者）

①陸上競技（男女）…浦和市陸上競技各種大会および陸上愛好者団体会員約200名

②水泳（男女）…浦和市水泳連盟加盟会員約200名

③テニス（男女）…浦和市硬式テニス連盟会員約200名

④ソフトボール（男女）…浦和市ソフトボール連盟加盟団体より200名

⑤バレーボール（女性）…浦和市家庭婦人バレーボール連盟加盟団体より約200名

3）大衆化型ニュースポーツ参加者（本年度調査対象者）

①ペタンク（男女）…兵庫ふれあいの祭典ペタンク大会参加者約200名

②グラウンドゴルフ（男女）…兵庫ふれあいの祭典グラウンドゴルフ大会参加者約200名

③家庭バレーボール(女性)‥加古川市家庭バレーボール大会参加者（女性）200名

合計約2,600名

2　調査期日，調査票の配布，回収方法

①調査期日

1）高度化型競技スポーツ志向参加者；平成8年10月上旬～12月下旬

2）大衆化型既成スポーツ種目参加者；平成9年11月上旬～12月上旬

3）大衆化型ニュースポーツ参加者；平成9年9月

②調査票の配布・回収方法

高度化型競技スポーツ参加者および大衆化型既成スポーツ種目参加者については，あらかじめリストアップした調査対象者，ないしは所属チームへの郵送による配布回収方式とした．また，大衆化型ニュースポーツ参加者については，大会会場にて直接配布，記入後回収した．

2．3 調査票の回収状況

	男性	女性	計
高度化型競技スポーツ志向（763）			
①陸上競技……	102	70	172
②水泳……	78	78	156
③テニス……	64	37	101
④ソフトボール……	165	0	165
⑤バスケットボール…	0	169	169
大衆化型既成スポーツ種目（841）			
①陸上競技……	137	23	160
②水泳……	74	91	165
③テニス……	98	70	168
④ソフトボール……	141	28	169
⑤バレーボール……	0	179	179
大衆化型ニュースポーツ（515）			
①ペタンク……	84	145	229
②グラウンドゴルフ…	108	88	196
③家庭バレーボール…	0	90	90

なお，加古川市の家庭バレーボールは，加古川市の独自のルールで実施され，また使用しているボールの柔らかさなどの点で一般的に行われているバレーボールとは異なるのでニュースポーツ種目とした．

3．調査内容

①参加球技会のレベルおよび参加回数，入賞回数

②大会参加への目的，意義

③練習の程度

④所属スポーツクラブの規模や活動状況

⑤スポーツ参加の費用

⑥過去のスポーツ活動の状況（小・中・高校，大学，社会人）

⑦スポーツ観・余暇観・スポーツ以外のスポーツ活動等

⑧スポーツ実施上の問題点等．

4．分析の視点

1　高度化型競技志向スポーツ参加者(A)

2　大衆化型既成スポーツ種目参加者(B)

3　大衆化型ニュースポーツ種目参加者(C)

上記(A)(B)(C)別の調査結果を比較，分析し，(A)(B)(C)間の異同・差異を有無から，(A)(B)(C)それぞれのスポーツ参加の特徴，問題点について明らかにする．

（嘉戸　脩）

第2章　結果・考察

1．調査対象者の特性

報　告　者　　嘉戸　　脩[1)]

1．1　性・年齢（表1－1，図1－1）

①調査対象者は，高度化型競技スポーツ志向参加者A，大衆化型既成スポーツ種目参加者B，大衆型ニュースポーツ参加者Cの3つに分類し，男女別・年齢階層別に示した．

②各グループを年齢別に見ると，参加型によって中高年競技者（40歳以上）の年齢的な特徴がわかる．

・Aの男性参加者は，概ね各年代にわたっているが，Cは男女ともに，60歳以上の年齢の高い参加者が他のグループに比べると高い傾向を示していた．

・A，Bのスポーツ参加者は男女ともに，40～59歳代が80%近くを占めている．

・40～59歳代は既成のスポーツ種目参加が圧倒的に多く，60歳以上の高年者はニュースポーツへの参加が多いという二極分化がみられのは，スポーツ種目のもつ特性(運動量と体力)が大いに関与していると思われる．

1．2　学歴（表1－2，図1－2）

①調査対象者全体の学歴構成は，前回の調査同様に高卒程度が約5割，大学卒業程度が4割の構成比である．

②グループ別，男女別にみると大学卒程度が最も高いのは，Bの男性（62.2%）であり，女性では大学卒業程度の割合がA，B，Cの順に少なくなる傾向が見られた．義務教育程度の比率が高いのは，Cの男性（39.5%）である．

③Aについては前回の調査にみられたが，Bのスポーツ参加者の男女ともAと同様に，学歴が高い傾向を示した．これは，中高年スポーツ参加者の特徴の一つといえよう．

1．3　職業（表1－3，図1－3）

①調査対象者の70%は何らかの職業をもっていたが，前回の調査結果より高年層の有職率は低下していた．

②男女別にみると，男性（83%）の有職率は女性（52.4%）に比べて高い傾向を示した．

③年代別の有職率は，40～59歳では前回同様に男性では90%である．また，女性ではA・Bの有職率が60～70%であるのに対して，Cでは60%弱である．

④高年者の有職率は，男性では50%，女性では24%であり，女性の有職率は加齢とともに極端に減少傾向にある．

⑤前回の調査から，Aでは男性の自営業が25%占めていたが，B（14%），C（18.2%）ではいずれも20%以下であった．全国大会や国際大会といったような大会参加を目指すには物理的に時間的余裕が求められるが，既成種目でも出場する大会のレベルやニュースポーツ種目への参加の場合には，日常的にスポーツを楽しめることが第一義的になることから，自営業以外の職業でも可能である．

⑥以上のことから，調査対象者の有職率は前回と同様にどのグループも中年層は高く，また，女性に比べて男性の有職率は高い傾向を示した．都道府県レベル以上の大会参加などを目的にするようになれば，参加費や交通費をはじめ，練習場所やウエアなどの経費の面でも問題になる．スポーツの実施にあたっては有

1）東京学芸大学

職かどうかは，スポーツの継続に関与する要因の一つである．

1．4　まとめ

以上の結果から，次のような中高年者のスポーツ参加の一般的特性を指摘することができる．

(1)　前回の調査結果から高度化型競技志向スポーツ参加者Aは各年代にまたがっていたが，大衆化型既成スポーツ種目参加者Bでは40～59歳代が圧倒的に多く，大衆化型ニュースポーツ参加者Cでは60歳以上の参加者が多い傾向を示した．大会参加者の年代をみると，テニスのように競技生活の息が長いのものは年代層が広く，40～59歳代の中年層では既存のスポーツへの参加意欲が旺盛である．一方，加齢や体力的な衰えなどから，60歳以上の高年層になると無理なく楽しめるスポーツへと，B，Cグループの参加者の年代の参加傾向は変化していく．

(2)　中高年層のスポーツ参加者の学歴は比較的高い．高度化型競技志向スポーツ参加者Aや大衆化型既成スポーツ参加者Bでは学歴が高い．このことは，大会参加のためにプラスの要因として働いている．その背景に学校の教育内容の影響も見逃せない．

(3)　スポーツ参加者の有職率は一般に高い傾向を示したが，反面，大衆化型ニュースポーツCの女性の有職率は低い(23%)．AやBの参加者にとっては，経費的な面も含めて有職であることの方がスポーツの継続のためのプラスの要因の一つとなるであろう．

2．日常のスポーツ参加

報　告　者　　宮内　孝知[1)]

本節では，昨年度実施した「高度化型競技志向中高年スポーツ参加者(A)」調査と，本年度実施した基本的には同じ種目の「楽しみ志向」の「大衆化型既成スポーツ種目参加者(B)」調査および「大衆化型ニュースポーツ参加者(C)」の調査とを比較しながら，彼らの日常のスポーツ活動について，参加の程度，競技会に参加した種目以外のスポーツ活動，所属スポーツクラブの状況，年間に必要な費用等を中心にみていくことにする．

1．スポーツ参加の程度

表２－１は，スポーツ参加の程度を，３つの調査それぞれの全体と，各調査の種目ごとに示したものである．高度化型競技志向スポーツ参加者(A)では「週に１～２日（年51日～150日）」が38.0%で最も多く，「週に３日以上（年151日以上）」34.1%，「ほぼ毎日」21.6%とつづいている．大衆化型既成スポーツ種目参加者(B)では「週に１～２日」が57.8%と半数を大きく超え，「週に３日以上」22.6%，「月１～３日」が9.8%である．大衆化型ニュースポーツ参加者(C)では「週に１～２日」が49.1%と約半数，「週３日以上」が31.8%，「ほぼ毎日」10.9%とつづいている．今仮に，「ほぼ毎日」を週当たり６日，「週３日以上」を週４日，「週１～２日」を週1.5日，「月１～３日」を週0.5日として，週当たりの平均参加日数を計算すると，Aは3.3日，Bは2.3日，Cは2.7日となる．類型的に言えば，高度化型競技志向スポーツ参加者は年間150日程度スポーツ活動を実施しており，大衆化型既成スポーツ種目参加者は年間100日程度活動し，大衆化型ニュースポーツ参加者はその中間に位置していることになる．

Aにおいては，スポーツ参加の程度は，陸上・水泳・テニスの「個人種目」と，ソフトボール・バスケットボールの「集団スポーツ」に注目した場合，大きな差異がみられた．すなわち，個人種目では「週に３日以上」が，陸上71.6%，水泳85.9%，テニス80.2%に達しており，およそ８割の者がほぼ毎日か週に３日以上活動し，これに対して「集団スポーツ」では，約６割（ソフトボール67.3%，バスケットボール60.9%）が「週に１～２日」で，明らかにこの層が活動の中心であった．このことは，恐らく，個人でも活動できることと，チームとして活動しなければならないという制約が，活動の程度に大きな影響を及ぼすのであろうと，昨年度の報告書で指摘した．このことを上記の計算式で確かめてみると，個人種目参加者の週当たり平均参加日数は4.1日であり，集団種目では2.2日となる．本年度のBでも，陸上・水泳・テニスの「個人種目」とソフト・バレーの「個人種目」にも，やはり差異があり，週平均の参加日数は，2.6日と1.9日である．すなわち，「Aの参加者であろうと，Bの参加者であろうと，参加日数は個人種目参加者の方が多くなり，とりわけ，競技志向個人種目参加者の参加程度は極めて高い」と結論できる．C参加者の平均参加日数は上述のように2.7日であったが，グランドゴルフ（個人種目）では3.1日，ペタンクでは2.8日で，楽しみ志向参加者より両種目ともかなり参加の程度が高いことになる．他の要因との関連で検討する必要があろう．

2．大会に出場した種目（専門種目）以外のスポーツ活動

2．1　専門種目以外に行っているスポーツ種目数

表２－２は，大会（高度化型競技志向スポーツ参加者Aでは全国大会や国際大会に限定）に出場した種目を専門種目とし，それ以外に行っている

1）早稲田大学

表２－１　スポーツ参加の程度

実数（％）

		ほぼ毎日	週３日以上	週１～２日	月１～３日	年１～３日	D.K, N.A.	合　計
高度化型競技志向参加者		165(21.6)	260(34.1)	290(38.0)	43(5.6)	2(0.3)	3(0.4)	763(100.0)
大衆化型既成スポーツ種目参加者		60(7.1)	190(22.6)	486(57.8)	82(9.8)	9(1.1)	14(1.7)	841(100.0)
大衆化型ニュースポーツ参加者		56(10.9)	164(31.8)	253(49.1)	33(6.4)	9(1.7)	0(0.0)	515(100.0)
陸上	高度化型競技志向参加者	51(29.7)	72(41.9)	36(20.9)	11(6.4)	0(0.0)	2(1.2)	172(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	28(17.5)	47(29.4)	51(31.9)	23(14.4)	6(3.8)	5(3.1)	160(100.0)
水泳	高度化型競技志向参加者	55(35.3)	79(50.6)	21(13.8)	1(0.7)	0(0.0)	0(0.0)	156(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	11(6.7)	41(24.8)	91(55.2)	17(10.3)	1(0.6)	4(2.4)	165(100.0)
テニス	高度化型競技志向参加者	32(31.7)	49(48.5)	19(18.8)	1(1.0)	0(0.0)	0(0.0)	101(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	12(7.1)	53(31.5)	90(53.6)	13(7.7)	0(0.0)	0(0.0)	168(100.0)
ソフト	高度化型競技志向参加者	14(8.5)	35(21.2)	111(67.3)	5(3.0)	0(0.0)	0(0.0)	165(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	6(3.6)	11(6.5)	124(73.4)	24(14.2)	1(0.6)	3(1.8)	169(100.0)
バスケ	高度化型競技志向参加者	13(7.7)	25(14.8)	103(60.9)	25(14.8)	2(1.2)	1(0.6)	169(100.0)
バレー	大衆化型既成スポーツ種目参加者	3(1.7)	38(21.2)	130(72.6)	5(2.8)	1(0.6)	2(1.1)	179(100.0)
	大衆化型ニュースポーツ参加者	1(1.1)	9(10.0)	79(87.8)	1(1.1)	0(0.0)	0(0.0)	90(100.0)
ペタンク	大衆化型ニュースポーツ参加者	24(10.5)	73(31.9)	119(52.0)	7(3.1)	6(2.6)	0(0.0)	229(100.0)
G.ゴルフ	大衆化型ニュースポーツ参加者	31(15.8)	82(41.8)	55(28.1)	25(12.8)	3(1.5)	0(0.0)	196(100.0)

表２－２　大会に出場した種目以外に行っているスポーツ種目数
（A調査は全国大会や国際大会）

実数（％）

	出場した種目のみ	出場した他１種目	出場した他２種目以上	無回答	合　計
高度化型競技志向参加者	493(64.6)	184(24.1)	76(10.0)	10(1.3)	763(100.0)
大衆化型既成スポーツ種目参加者	392(46.6)	232(27.6)	100(11.9)	117(13.9)	841(100.0)
大衆化型ニュースポーツ参加者	322(62.5)	154(29.9)	39(7.6)	0(0.0)	515(100.0)

スポーツの種目数を尋ねた結果である．高度化型競技志向スポーツ参加者A，および大衆化型ニュースポーツ参加者Cでは，およそ３人に２人(64.6％，62.5％）が専門種目のみの活動者である．大衆化型既成スポーツ種目参加者Bではそれが他の調査より低いものの，無回答者を除くと半数以上（54.1％)になる．Aの結果から，「高い競技レベルを目指す調査対象者にとって，このことは専門性を維持するために当然のことであろう」と考察したが，B，Cから，わが国の中高年の定期的スポーツ参加者は，「単一種目型」であるとみなすことができよう．「スポーツ参加の多様化」は「参加の仕方」と同時に「参加の種目」も問題になるが，「スポーツ参加」をめぐる問題の１つとして「複合型スポーツクラブ」が議論されることも多く，重要な問題を提起しているといえる．

また，Cの結果は，「ニュースポーツ」の参加者が，Aと同様の傾向を示しており，前項の「参加の程度」と併せて，「楽しみ志向」よりむしろ「競技志向」に近いと考察できる．本来「ニュースポーツ」は「エコ・スポーツ」として受け入れたと考えられるが，このことは「ニュースポーツ」の

表２－３　大会に出場した種目以外に行っているスポーツ種目名
（A調査は全国大会や国際大会）

実数（%）

	ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	水　泳	テニス	スキー	ゴルフ	ﾗﾝﾆﾝｸﾞ	ｿﾌﾄﾎﾞｰﾙ	軟式野球	その他	合　計
高度化型競技志向参加者	31(16.9)	13(7.1)	17(9.3)	21(11.5)	57(31.1)	13(7.1)	4(2.2)	6(3.3)	21(11.5)	183(100.0)
大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者	9(2.1)	43(10.0)	41(9.5)	32(7.4)	98(22.8)	13(3.0)	18(4.2)	11(2.6)	165(38.4)	430(100.0)
大衆化型ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ参加者	6(2.6)	10(4.3)	13(5.6)	0(0.0)	29(12.6)	6(2.6)	20(8.7)	1(0.4)	146(63.2)	231(100.0)

表２－４　スポーツ実施の場所・施設（複数回答）

実数（%）

		近所の空き地や広場	校区の学校施設	公共のｽﾎﾟｰﾂ施設	商業ｽﾎﾟｰﾂ施設	企業所有のｽﾎﾟｰﾂ施設	その他	無回答	人数
高度化型競技志向参加者		107(14.0)	178(23.3)	476(62.4)	202(26.5)	147(19.3)	50(6.6)	2(0.3)	763
大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者		88(10.5)	375(44.6)	509(60.5)	146(17.4)	84(10.0)	23(2.7)	10(1.2)	841
大衆化型ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ参加者		198(38.4)	201(39.0)	287(55.7)	9(1.7)	29(5.6)	2(0.4)	11(2.1)	515
陸上	高度化型競技志向参加者	69(40.1)	51(29.7)	127(73.8)	19(11.0)	18(10.5)	21(12.2)	0(0.0)	172
	大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者	70(43.8)	49(30.6)	65(40.6)	20(12.5)	16(10.0)	9(5.6)	4(2.5)	160
水泳	高度化型競技志向参加者	3(1.9)	6(3.8)	57(36.5)	100(64.1)	38(24.4)	3(1.9)	0(0.0)	156
	大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者	4(2.4)	4(2.4)	140(84.8)	33(20.0)	19(11.5)	5(3.0)	3(1.8)	165
テニス	高度化型競技志向参加者	7(6.9)	4(4.0)	41(40.6)	67(66.3)	34(33.7)	14(13.9)	1(1.0)	101
	大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者	2(1.2)	6(3.6)	112(66.7)	81(48.2)	36(21.4)	7(4.2)	1(0.6)	168
ソフト	高度化型競技志向参加者	26(15.8)	52(31.5)	124(75.2)	3(1.8)	30(18.2)	7(4.2)	1(0.6)	165
	大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者	12(7.1)	151(89.3)	108(63.9)	8(4.7)	9(5.3)	1(0.6)	1(0.6)	169
バスケ	高度化型競技志向参加者	2(1.2)	65(38.5)	127(75.1)	13(7.7)	27(16.0)	5(3.0)	0(0.0)	169
バレー	大衆化型既成ｽﾎﾟｰﾂ種目参加者	0(0.0)	165(92.2)	84(46.9)	4(2.2)	11(6.1)	1(0.6)	1(0.6)	179
	大衆化型ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ参加者	0(0.0)	62(68.9)	63(70.0)	1(1.1)	4(4.4)	1(1.1)	1(1.1)	90
ﾍﾟﾀﾝｸ	大衆化型ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ参加者	98(42.8)	80(34.9)	117(51.1)	1(0.4)	6(2.6)	0(0.0)	8(3.5)	229
G.ｺﾞﾙﾌ	大衆化型ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ参加者	100(51.0)	59(30.1)	107(54.6)	7(3.6)	19(9.7)	2(1.0)	3(1.5)	196

※複数回答のため%の合計は100を越える

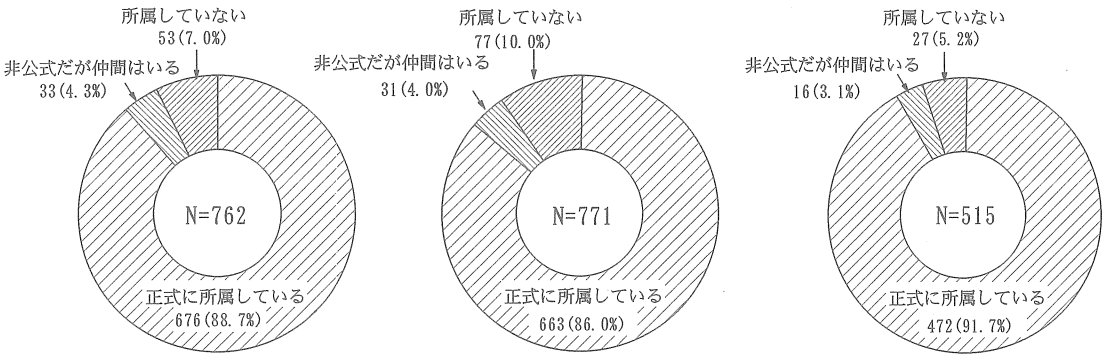
変化の現れであろうか．

２．２　専門種目以外に行っているスポーツ種目

表２－３は，専門種目以外に行っている種目を示したものである．これによれば，専門種目以外に行っているのは３調査とも「ゴルフ」が，「その他」を除けば最も多くなっている．しかし，各調査間には差異があり，A調査では３人に１人，B調査では４人に１人，C調査では７人に１人となる．一方，「その他」の種目が，B調査では38.4%，C調査では63.2%に達している．挙げられた種目は多岐にわたるが，主なものは，男性では「サッカー」「卓球」，女性では「エアロビクス」「卓球」「軽い体操」等となっている．表２－２および表２－３の結果は，競技志向のスポーツ参加者は「単一種目継続者」，楽しみ志向のスポーツ参加者は「併行的実施者」，ニュースポーツ参加者は「多種目経験者」が多い，と考察できようか．

３．スポーツ活動の場所や施設

表２－４は，スポーツを実施する場所や施設を複数回答で求めた結果である．３調査とも，「公共のスポーツ施設」が最も多く，A調査62.4%，B調査60.5%，C調査55.7%をそれぞれ占めている．



高度化型競技志向スポーツ参加者　　大衆化型既成スポーツ種目参加者　　大衆化型ニュースポーツ参加者

図２－１　スポーツクラブ所属の有無

「校区の学校施設」も「公共施設」と考えれば，A調査では約85%が，B調査では100%が，C調査でも約95%が「公共施設」でスポーツを実施していることになる．特に，「陸上」「ソフトボール」「バスケットボール」「バレー」では，競技志向であれ，楽しみ志向であれ，この傾向が強く，活動は「100%公共施設」であると断言しても過言ではない．このことは，これらの種目では，「商業スポーツ施設」や「企業が所有するスポーツ施設」は，補助的な役割を果たしているに過ぎないといえよう，とした昨年度の結論を補強するものである．また，昨年度は，「水泳」「テニス」は，活動の中心が「商業スポーツ施設」であり，共におよそ65%が回答していたことから，前者は「公共施設型スポーツ種目」，後者は「民間施設型スポーツ種目」とみなすことも可能であろう，とした．しかしながら，B調査では後者も「公共施設」が活動の中心である．したがって，昨年度の結論は，競技志向スポーツについてのみ妥当であることになる．

このことは，選択肢が「近所の空き地や広場」→「校区の学校施設」→「公共のスポーツ施設」→「商業スポーツ施設」→「企業所有のスポーツ施設」の順に，より公共性・組織性・専門性が高まると捉えることができ，この視点で同一種目のA調査とB調査を比較すると，明らかに，競技志向スポーツ参加者の活動の場所・施設は，右側の選択肢の数値が高くなっていることからも補強されよう．一方，同様な視点でC調査の結果をみると，明らかに，他の調査結果より左側の選択肢が高い数値を示す．このことは，「ニュースポーツ」の参加者はそのスポーツを専門的に実施している者が多いとしても，未だ既存のスポーツ程「市民権」を得ていないということになるのであろうか．

４．スポーツクラブ参加状況

４．１．　スポーツクラブ所属の有無

図２－１は，スポーツクラブの所属について尋ねた３調査の結果をそれぞれ円グラフで表したものである（「無回答」は除いている）．これによれば，３調査ともほぼ同様の結果を示しているが，「正式所属」はニュースポーツの参加者が最も高い割合（91.7%）であった．競技志向のスポーツ参加者は88.7%の者が「正式所属」である．前者では，スポーツの特性，とりわけ「仲間」の必要性からクラブに所属することが求められ，後者では，大会参加等に団体所属が条件となること，高い専門性を維持するためにはクラブ所属が求められるのであろう．その意味では，「楽しみ志向」の参加者には，「所属していない」割合が他よりも若干多くなっている．しかしながら，有意な差ではない．

４．２　所属スポーツクラブの規模

表２－５は，前述のスポーツクラブ所属の有無で，「正式に所属している」及び「正式には所属していないが，仲間はいる」と回答した者に，その

表２－５　所属スポーツクラブの規模

実数（%）

	20人未満	21～50人	51～100人	101～150人	151～200人	201～250人	251～300人	301人以上	無回答	合　計
高度化型競技志向参加者	354(49.9)	217(30.6)	48(6.8)	19(2.7)	16(2.3)	5(0.7)	11(1.6)	32(4.5)	7(1.0)	709(100.0)
大衆化型既成スポーツ種目参加者	231(33.3)	291(41.9)	88(12.7)	12(1.7)	35(5.0)	16(2.3)	5(0.7)	10(1.4)	6(0.9)	694(100.0)
大衆化型ニュースポーツ参加者	238(48.8)	144(29.5)	69(14.1)	18(3.7)	9(1.8)	0(0.0)	2(0.4)	3(0.6)	5(1.0)	488(100.0)

表２－６　所属スポーツクラブの平均人数

（人）

種目／調査／費用	陸　上		水　泳		テニス		ソフト		ﾊﾞｽｹ	ﾊﾞﾚｰ	ﾍﾟﾀﾝｸ	G.ｺﾞﾙﾌ
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	C	C
全体平均	86.2	45.3	50.9	54.3	176.9	97.3	23.3	30.8	21.3	24.5	32.6	49.8
男性平均	69.6	49.6	38.8	64.0	209.7	96.1	23.3	30.8			34.6	50.0
女性平均	160.3	26.5	62.8	44.6	122.4	99.4			21.3	24.5	31.4	49.6

※　A；高度化型競技志向スポーツ参加者
　　B；大衆化型既成スポーツ種目参加者
　　C；大衆化型ニュースポーツ参加者。なお、Cのバレーおよび無回答を除いている

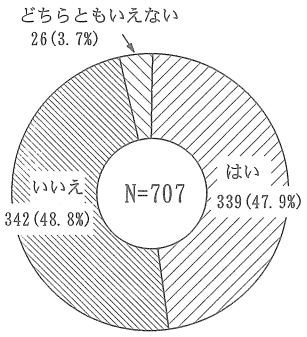
クラブや仲間の人数を尋ねた結果を示したものである．競技志向およびニュースポーツでは，約半数（49.9%，48.8%）が「20人未満」のクラブであると回答している．前者では，概していえば，「集団スポーツ」の方が「個人スポーツ」に比べ，小さな規模であり，とりわけ，バスケットボールは71.0%が「20人未満」となっている．一方，テニスは他種目に比して「大規模」であるといえよう．B調査では「21人～50人」が最も高く41.9%となっている．しかしながら，３調査とも約８割が50人までの規模のクラブや仲間と活動していることを示し，大きな差異ではない．

このクラブの規模を，性別，種目別，調査（志向）別に平均人数で示したものが表２－６である．これによれば，陸上と水泳は競技志向では女性の方が大規模クラブに所属し，楽しみ志向では，男性の方がより大きなクラブに所属している．テニスでは男女とも競技志向の方が大規模クラブである．集団スポーツでは，楽しみ志向が競技志向より大きな規模のクラブに所属する傾向がみられる．しかしながら，これを説明できる要因はみあたらず，サンプリングの方法を含めて，より詳細な検討が必要であろう．

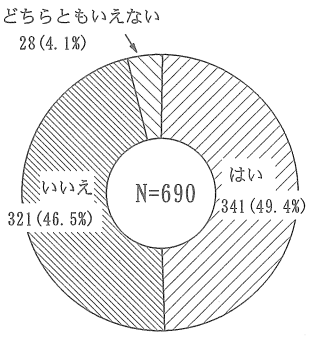
４．３　所属スポーツクラブの活動形態

図２は，所属スポーツクラブ（仲間）の活動が，男女一緒に行われているかどうかを尋ねた結果である（「無回答」は除いている）．これによれば，競技志向のスポーツ参加者および楽しみ志向のスポーツ参加者は同じような活動の形態を示し，「男女一緒の活動」「男女別の活動」がほぼ半数ずつである．すなわち，A調査，B調査に共通するものは「既存のスポーツ」ということであり，その活動は，競技志向であれ，楽しみ志向であれ，同様の活動の仕方をしているということであろう．他方，C調査の「ニュースポーツ」では，約７割（69.5%）が「男女一緒」に活動していることを示している．

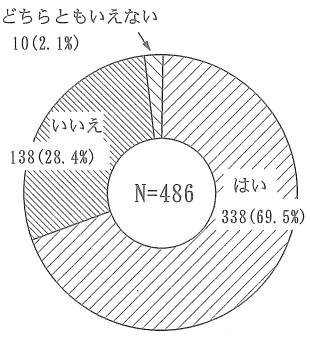
図表には示されていないが，これを種目別に検討すると，明らかに「個人種目」では「男女混合」，「集団種目」では「男女別」となっている．このことはある程度想定して調査対象種目を選定したのであるから，一般化することは昨年同様不可能であるが，集団種目の場合「チーム編成」が，大会参加規程上「混成」を義務づけていない限り，「男女別」に行われることが一般的であろうし，そのことは当然のことながら，日常の活動形態を規定することになろう．この点でも，被調査対象となったニュースポーツは，性差がスポーツ享受に大きな影響を与えないことからも，活動の形態を特異なものとしていよう．



高度化型競技志向スポーツ参加者



大衆化型既成スポーツ種目参加者



大衆化型ニュースポーツ参加者

図２－２　男女一緒の活動か

表２－７　所属スポーツクラブの活動形態
～活動する目的や能力が一致しているか～

実数（%）

	は　い	い　い　え	どちらともいえない	無回答	合　計
高度化型競技志向参加者	422（59.5）	166（23.4）	120（16.9）	1（ 0.1）	709（100.0）
大衆化型既成スポーツ種目参加者	342（49.3）	100（14.3）	99（14.3）	12（ 1.7）	694（100.0）
大衆化型ニュースポーツ参加者	407（83.4）	30（ 6.1）	48（ 9.8）	3（ 0.6）	488（100.0）

４．４　所属スポーツクラブの活動目的や能力の一致度

表２－７は，所属するスポーツクラブの活動目的やメンバーの能力がほぼ一致しているかどうかを尋ねた結果である（「無回答」は除いている）．ここでも「ニュースポーツ」参加者は「既存スポーツ」参加者に比して異質な傾向を示している．すなわち，活動目的や能力がほぼ一致しているするものは83.4%に達し，「競技志向」の59.5%，「楽しみ志向」の40.3%を，大きく上回るのである．A調査では，「集団種目」の方が「個人種目」より，「一致度」が高くなることを指摘し，それは種目特性というより，むしろ，クラブ（仲間）の規模と大きく関係しているのであろうと考察したが，このことは，その妥当性を裏付けるとともに，「ニュースポーツ」の種目特性も検討の必要が大きいことを示唆している．

５．スポーツにかかる年間費用

表２－８は，運動やスポーツを行うために必要な交通費，大会参加費，宿泊費，用具費，クラブ会費等を含む年間の費用を尋ねた結果である．回答は，昨年のA調査と同様，費用を万円の単位で記入してもらう方式とした．集計は，種目によるばらつきが極めて大きく，カテゴリーをどのように採るかで，結果の読みとりに影響することが考えられたが，比較を容易にするため，昨年のカテゴリーをそのまま使用することにした．

全体の比較では，３調査に大きな差異がみられる．とりわけ，「６万円未満（月平均５千円未満）」の割合に大きな差がある．「競技志向」では，僅か9.3%であったこのカテゴリーは，「楽しみ志向」では55.3%，「ニュースポーツ」では実に82.2%を占めるのである．「12万円未満（月平均１万円未満）」を加えると，「競技志向」では約３割（28.8%）で

表２－８　スポーツ活動にかかる年間費用

実数（%）

調査＼金額		6万円未満	6万円以上12万円未満	12万円以上18万円未満	18万円以上24万円未満	24万円以上30万円未満	30万円以上36万円未満	36万円以上48万円未満	48万円以上60万円未満	60万円以上	合計
高度化型競技志向参加者		70(9.3)	147(19.5)	130(17.3)	104(13.8)	37(4.9)	88(11.7)	37(4.9)	50(6.6)	12(12.0)	753(100.0)
大衆化型既成スポーツ種目参加者		450(55.3)	127(15.6)	71(8.7)	66(8.1)	17(2.1)	26(3.2)	14(1.7)	27(3.3)	16(2.0)	814(100.0)
大衆化型ニュースポーツ参加者		332(82.2)	42(10.4)	7(1.7)	9(2.2)	0(0.0)	4(1.0)	2(0.5)	3(0.7)	5(1.2)	404(100.0)
陸上	高度化型競技志向参加者	9(5.3)	49(28.7)	18(10.5)	33(19.3)	9(5.3)	20(11.7)	4(2.3)	14(8.2)	15(8.8)	171(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	87(54.4)	39(24.4)	9(5.6)	6(3.8)	1(0.6)	5(3.1)	1(0.6)	8(5.0)	4(2.5)	160(100.0)
水泳	高度化型競技志向参加者	10(6.5)	20(12.9)	18(11.6)	21(13.5)	13(8.4)	18(11.6)	14(9.0)	17(11.0)	24(15.5)	155(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	81(53.3)	22(14.5)	19(12.5)	13(8.6)	3(2.0)	4(2.6)	2(1.3)	5(3.3)	3(2.0)	152(100.0)
テニス	高度化型競技志向参加者	0(0.0)	2(2.0)	4(4.0)	11(11.0)	4(4.0)	12(12.0)	10(10.0)	12(12.0)	45(45.0)	100(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	28(17.3)	37(22.8)	16(9.9)	35(21.6)	12(7.4)	10(6.2)	6(3.7)	13(8.0)	5(3.1)	162(100.0)
ソフト	高度化型競技志向参加者	10(6.3)	36(22.8)	54(34.2)	19(12.0)	6(3.8)	26(16.5)	4(2.5)	1(0.6)	2(1.3)	158(100.0)
	大衆化型既成スポーツ種目参加者	102(61.1)	20(12.0)	17(10.2)	12(7.2)	1(0.6)	6(3.6)	5(3.0)	1(0.6	3(1.8)	167(100.0)
バスケ	高度化型競技志向参加者	41(24.3)	40(23.7)	36(21.3)	20(11.8)	5(3.0)	12(7.1)	5(3.0)	6(3.6)	4(2.4)	169(100.0)
バレー	大衆化型既成スポーツ種目参加者	152(87.9)	9(5.2)	10(5.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.6	173(100.0)
ペタンク	大衆化型ニュースポーツ参加者	187(82.4)	19(8.4)	7(3.1)	6(2.6)	0(0.0)	2(0.9)	1(0.4)	3(1.3)	2(0.9)	227(100.0)
G.ゴルフ	大衆化型ニュースポーツ参加者	145(81.9)	23(13.0)	0(0.0)	3(1.7)	0(0.0)	2(1.1)	1(0.6)	0(0.0)	3(1.7)	177(100.0)

※Cのバレーおよび無回答を除いている

表２－９　スポーツ活動にかかる年間費用の平均

（万円）

種目＼調査＼費用	陸上		水泳		テニス		ソフト		バスケ	バレー	ペタンク	G.ゴルフ
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	C	C
全体平均	26.2	11.5	35.6	12.7	62.8	20.0	19.6	9.8	16.0	3.5	5.5	5.9
男性平均	25.3	10.9	34.7	15.8	66.2	18.0	19.6	9.8			8.5	6.9
女性平均	27.5	15.0	36.5	7.8	57.1	23.1			16.0	3.5	3.7	4.5

※　A；高度化型競技志向スポーツ参加者
　　B；大衆化型既成スポーツ種目参加者
　　C；大衆化型ニュースポーツ参加者。なお、Cのバレーおよび無回答を除いている

あるのに対し，「楽しみ志向」では７割（70.9%），「ニュースポーツ」では９割を超える（92.6%）ことになる．

表２－９は，性別，種目別，調査別に年間費用の平均を示したものである．これによれば，「競技志向」の中高年スポーツ参加者のスポーツにかける総費用は，「集団スポーツ」では年間18万円（月平均１万５千円），「個人スポーツ」では種目による差異が認められ，「陸上」は年間26万円（月平均２万円強），「水泳」は年間36万円（月平均３万円），「テニス」は年間60万円（月平均５万円強）となり，各種目の「楽しみ志向」の参加者に比して，陸上とソフトでは約２倍，水泳とテニスでは約３倍にも達する．やはりこれらは，昨年指摘したように「活動の場所や施設」での，「公共施設」と「商業施設」の相違の影響をさらに強く示すものと考えられる．

また，「ニュースポーツ」は年間費用が最も少ないが，これは，前述したことの他に自治体による奨励とそれに伴う補助等が影響しているのであろうか．また，このスポーツは他に比して男女差が大きい．活動の形態として，目的や能力の一致度，男女一緒の活動とは相反することであろうが，どのように解釈すればよいのであろうか．A調査では，競技志向中高年スポーツ活動は性別による活動の違いはないことを示していたが，「楽しみ志向」でも男女差がみられ，より詳しい検討が求められる事項であろう．

6．ま と め

昨年度実施した高度化型競技志向スポーツ参加者(A)と，本年度実施した基本的には昨年度と同種目で，「楽しみ志向」の強い大衆化型既成スポーツ種目参加者(B)および大衆化型ニュースポーツ参加者(C)との比較から，彼らの日常のスポーツ活動状況では以下の諸点が明らかになった。

(1) スポーツ参加程度を活動日数からみるために，「ほぼ毎日」を週当たり6日，「週3日以上」を週4日，「週1～2日」を週1.5日，「月1～3日」を週0.5日として，週当たりの平均参加日数を計算すると，高度化型競技志向スポーツ参加者Aは3.3日，大衆化型既成スポーツ参加者Bは2.3日，大衆化型ニュースポーツ参加者Cは2.7日となる．これを種目とクロスすると，Aの個人種目4.1日であり，集団種目では2.2日となる．Bの参加者では，個人種目2.6日，集団種目1.9日である．すなわち，Aであろうと，Bであろうと，参加日数は個人種目参加者の方が多くなり，とりわけ，Aの参加程度は極めて高い．Cの平均参加日数は，グランドゴルフ（個人種目）では3.1日，ペタンクでは2.8日で，Bより両種目ともかなり参加の程度が高い．

(2) 活動種目は，3調査とも専門性が高く，本年度の調査結果から，わが国の中高年の定期的スポーツ参加者は，「単一種目型」が多いが，高度化型競技志向スポーツ参加者Aは「単一種目継続者」，大衆化型既成スポーツ種目参加者Bは「併行的実施者」，大衆化型ニュースポーツ参加者Cは「多種目経験者」が多いといえる．

さらに，Cは，Bよりむしろ A に近いといえる．

(3) スポーツ活動の場所や施設では，昨年度の「陸上」「ソフトボール」「バスケットボール」が「公共施設型スポーツ」，「水泳」「テニス」は「民間施設型スポーツ」であるという指摘は，高度化型競技志向スポーツにおいてのみ妥当でる．この観点からみると「ニュースポーツ」は未だ，既存のスポーツ程「市民権」を得ていない．

(4) スポーツクラブへの「正式所属」は3調査共同様の傾向を示すが，大衆化型ニュースポーツの参加者が最も高い割合であった．

(5) 競技志向の中高年スポーツ参加者のスポーツに必要な総費用は，「集団スポーツ」では年間18万円（月平均1万5千円），「個人スポーツ」では種目による差異が認められ，「陸上」は年間26万円（月平均2万円強），「水泳」は年間36万円（月平均3万円），「テニス」は年間60万円（月平均5万円強）となり，Bの各種目の参加者に比較して，陸上とソフトでは約2倍，水泳とテニスでは約3倍にも達する．

(6) 大衆化型ニュースポーツ参加者Cは年間費用が最も少ない．しかしスポーツは他に比して男女差が大きい．活動の形態として，目的や能力の一致度，男女一緒の活動とは相反することである．高度化型競技志向スポーツ参加者Aのスポーツツ活動は性別による費用に違いはみられなかったが，大衆化型既成スポーツ種目参加者Bにも男女差がみられ，より詳しい検討が求められる．

3．大会参加について

報　告　者　　加藤　爽子[1)]

本節では，高度化型競技志向スポーツ参加者A，大衆化型既成スポーツ種目参加者B，大衆化型ニュースポーツ参加者Cの3つのグループについて，各大会参加の状況からそれぞれのグループのもつ特徴を明らかにし，大会参加が契機となって中高年のスポーツ参加を促す要因の一つとなりうることについての妥当性を検討するものである．

1．各レベルの大会における参加の程度

前回の調査対象である高度化型競技志向スポーツ参加者Aの，全国大会への参加率は94.7%を示していた．また，Aは，都道府県レベル，市町村レベルの大会についても高い参加率を示していた．これは，対象者としてトップアスリートを選んだことから当然の結果といえる．今回は，大衆化型既成スポーツ種目参加者B，および大衆化型ニュースポーツ参加者Cを対照群として，トップアスリートと一般のスポーツ愛好者との比較を行い，各グループの特徴を明らかにする．なお，前回の5つの大会，①国際大会，②全国大会，③都道府県大会，④ブロック大会，⑤市町村大会に，BおよびCを対象としたことから，クラブ・地区レベルの大会を加え，6つ大会について比較検討を試みた．

1．1　国際大会への参加状況（表3－1）

国際大会への参加状況は，大衆化型既成スポーツ種目参加者B，および大衆化型ニュースポーツ参加者Cが男女ともに1%の参加率程度であったのに対して，高度化型競技志向スポーツ参加者Aでは，国際レベルの大会へは17%（男性17.3%，女性17.5%）の参加があり，他のグループとの間には有意な差がみられた（$P<0.01$）．これは，他のグループに比べ，Aはよりハイレベルな大会への参加志向があるといえる．

Bでは，40～59才の中年層の参加が1%前後みられただけであり，反対にAの女性の高年層の個人種目（陸上62.5%，水泳48.7%）参加率が高かった（$p<0.01$）．Aの高年層の参加率が他に比べて高いのは，①経費的な面，②時間的なゆとり，③個人種目であるから試合をするのにメンバーを必要としないことなどが考えられる．

中年層の参加率が低いのは，現役として会社や家庭等では生活の中心として時間的・金銭的な余裕がないのに対して，高年層は現役からのリタイアによって時間的な余裕が生み出され，その結果，参加しやすくなると思われる．

1．2　全国大会への参加状況（表3－2）

全国大会への参加状況も国際大会への参加状況と同様に，男女とも高度化型競技志向スポーツ参加者Aの参加率だけが高く（男性96.3%，女性63.9%），大衆化型既成スポーツ種目参加者B（男性11.6%，女性8.3%），大衆化型ニュースポーツ参加者C（男性26.5%，女性14.5%）との間には有意な差がみられた（$P<0.01$）．Aの対象となったのは全国大会出場以上の選手，すなわちトップレベルの選手であったことから，全国大会参加率が高いのは当然のことである．

また，Aの高年層では男女とも98.6%の参加率を示し，中年層では男性95.1%，女性90.5%で男性の方が若干多い．中年層より高年層が多いのには，中年層にくらべ高年層の方が社会的には現役からリタイアした人が多く，時間的なゆとりがあることに加え，スポーツの継続，技能レベルの維持のための練習，日常の生活様式など女性に比べると男性の方がより活動しやすいことが考えられる．

1）東京学芸大学附属高校大泉校舎

表３－１　国際大会への参加状況

		1　回	2　回	3回以上	な　し	NA	計
男性	高度化型　40～59歳	26(9.7)	3(1.1)	4(1.5)	168(62.5)	68(25.3)	269(65.8)
	60歳以上	24(17.1)	8(5.7)	6(4.3)	91(65.0)	11(7.9)	140(34.2)
	計	50(12.2)	11(2.7)	10(2.4)	259(63.3)	79(19.2)	409(38.9)
	大衆化型　40～59歳	1(0.3)	1(0.3)	1(0.3)	293(78.1)	79(21.1)	375(83.3)
	60歳以上	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	33(44.0)	42(56.0)	75(16.7)
	計	1(0.2)	1(0.2)	1(0.2)	326(72.4)	121(26.9)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型　40～59歳	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	36(100.0)	0(0.0)	36(18.8)
	60歳以上	3(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	153(98.1)	0(0.0)	156(81.2)
	計	3(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	189(98.4)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計　40～59歳	27(4.0)	4(0.6)	5(0.7)	497(73.1)	147(21.6)	680(64.7)
	60歳以上	27(7.3)	8(2.2)	6(1.6)	277(74.7)	53(14.3)	371(35.3)
	計	54(5.1)	12(1.1)	11(1.0)	774(73.6)	200(19.0)	1051(49.6)
女性	高度化型　40～59歳	17(6.0)	4(1.4)	8(2.8)	251(88.1)	5(1.8)	285(80.5)
	60歳以上	23(33.3)	5(7.2)	5(7.2)	30(43.5)	6(8.7)	69(19.5)
	計	40(11.3)	9(2.5)	13(3.7)	281(79.4)	11(3.1)	354(33.1)
	大衆化型　40～59歳	3(0.9)	0(0.0)	0(0.0)	273(80.1)	65(19.1)	341(87.2)
	60歳以上	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	43(86.0)	7(14.0)	50(12.8)
	計	3(0.8)	0(0.0)	0(0.0)	316(80.8)	72(18.4)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型　40～59歳	0(0.0)	0(0.0)	2(1.1)	178(98.9)	0(0.0)	180(55.7)
	60歳以上	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)	142(99.3)	0(0.0)	143(44.3)
	計	0(0.0)	0(0.0)	3(0.9)	320(99.1)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計　40～59歳	20(2.5)	4(0.5)	10(1.2)	702(87.1)	70(8.7)	806(75.5)
	60歳以上	23(8.8)	5(1.9)	6(2.3)	215(82.1)	13(5.0)	262(24.5)
	計	43(4.0)	9(0.8)	16(1.5)	917(85.9)	83(7.8)	1068(50.4)
全体	40～59歳	47(3.2)	8(0.5)	15(1.0)	1199(80.7)	217(14.6)	1486(70.1)
	60歳以上	50(7.9)	13(2.1)	12(1.9)	492(79.6)	66(10.4)	633(29.9)
	総　計	97(4.6)	21(1.0)	27(1.3)	1687(79.6)	283(13.3)	2119

表３－２　全国大会への参加状況

		1　回	2　回	3回以上	な　し	NA	計
男性	高度化型　40～59歳	155(57.6)	41(15.2)	60(22.3)	9(3.3)	4(1.5)	269(65.8)
	60歳以上	56(40.0)	41(29.3)	41(29.3)	1(0.7)	1(0.7)	140(34.2)
	計	211(51.6)	82(20.0)	101(24.7)	10(2.4)	5(1.2)	409(38.9)
	大衆化型　40～59歳	17(4.5)	7(1.9)	7(1.9)	274(73.1)	70(18.7)	375(83.3)
	60歳以上	11(14.7)	10(13.3)	0(0.0)	27(36.0)	27(36.0)	75(16.7)
	計	28(6.2)	17(3.8)	7(1.6)	301(66.9)	97(21.6)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型　40～59歳	5(13.9)	1(2.8)	2(5.6)	28(77.8)	0(0.0)	36(18.8)
	60歳以上	29(18.6)	6(3.8)	8(5.1)	113(72.4)	0(0.0)	156(81.2)
	計	34(17.7)	7(3.6)	10(5.2)	141(73.4)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計　40～59歳	177(26.0)	49(7.2)	69(10.1)	311(45.7)	74(10.9)	680(64.7)
	60歳以上	96(25.9)	57(15.4)	49(13.2)	141(38.0)	28(7.5)	371(35.3)
	計	273(26.0)	106(10.1)	118(11.2)	452(43.0)	102(9.7)	1051(49.6)
女性	高度化型　40～59歳	171(60.0)	36(12.6)	51(17.9)	27(9.5)	0(0.0)	285(80.5)
	60歳以上	17(24.6)	14(20.3)	37(53.6)	1(1.4)	0(0.0)	69(19.5)
	計	188(24.9)	50(14.1)	88(24.9)	28(7.9)	0(0.0)	354(33.1)
	大衆化型　40～59歳	20(5.9)	3(0.9)	1(0.3)	259(76.0)	58(17.0)	341(87.2)
	60歳以上	8(16.0)	0(0.0)	0(0.0)	39(78.0)	3(6.0)	50(12.8)
	計	28(7.2)	3(0.8)	1(0.3)	298(76.2)	61(15.6)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型　40～59歳	7(3.9)	2(1.1)	3(1.7)	168(93.3)	0(0.0)	180(55.7)
	60歳以上	19(13.3)	5(3.5)	11(7.7)	108(75.5)	0(0.0)	143(44.3)
	計	26(8.0)	7(2.2)	14(4.3)	276(85.4)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計　40～59歳	198(24.6)	41(5.1)	55(6.8)	454(56.3)	58(7.2)	806(75.5)
	60歳以上	44(16.8)	19(7.3)	48(26.2)	148(56.5)	3(1.1)	262(24.5)
	計	242(22.7)	60(5.6)	103(9.6)	602(56.4)	61(5.7)	1068(50.4)
全体	40～59歳	375(25.5)	90(6.1)	124(8.4)	765(52.1)	132(9.0)	1486(70.1)
	60歳以上	140(22.1)	76(12.0)	97(15.3)	289(45.7)	31(4.9)	633(29.9)
	総　計	515(24.3)	166(7.8)	221(10.4)	1054(49.7)	163(7.7)	2119

表３－３　ブロック大会参加状況

			１　回	２　回	３回以上	な　し	ＮＡ	計
男性	高度化型	40～59歳	72(26.8)	58(21.6)	54(20.1)	58(21.6)	27(10.0)	269(65.8)
		60歳以上	27(19.3)	28(20.0)	62(44.3)	18(12.9)	5(3.6)	140(34.2)
		計	99(24.2)	86(21.0)	116(28.4)	76(18.6)	32(7.8)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	11(2.9)	8(2.1)	17(4.5)	264(70.4)	75(20.0)	375(83.3)
		60歳以上	1(1.3)	5(6.7)	9(12.0)	29(38.7)	31(41.3)	75(16.7)
		計	12(2.7)	13(2.9)	26(5.8)	293(65.1)	106(23.6)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	5(13.9)	2(5.6)	3(8.3)	28(72.2)	0(0.0)	36(18.8)
		60歳以上	13(8.3)	10(6.4)	27(17.3)	106(67.9)	0(0.0)	156(81.2)
		計	18(9.4)	12(6.3)	30(15.6)	132(68.8)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	88(12.9)	68(10.0)	74(10.9)	348(51.2)	102(15.0)	680(64.7)
		60歳以上	41(11.1)	43(11.6)	98(26.4)	153(41.2)	36(9.7)	371(35.3)
		計	129(12.3)	111(0.6)	172(16.4)	501(47.7)	138(13.1)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	39(13.7)	27(9.5)	41(14.4)	175(61.4)	0(0.0)	285(80.5)
		60歳以上	10(14.5)	14(20.3)	27(39.1)	13(18.8)	0(0.0)	69(19.5)
		計	49(13.8)	41(11.6)	68(19.2)	188(53.1)	0(0.0)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	23(6.7)	3(0.9)	4(1.2)	248(72.7)	63(18.5)	341(87.2)
		60歳以上	2(4.0)	1(2.0)	1(2.0)	41(82.0)	5(10.0)	50(12.8)
		計	25(6.4)	4(1.0)	5(1.3)	289(73.9)	68(17.4)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	4(2.2)	0(0.0)	11(6.1)	165(91.7)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	18(12.6)	6(4.2)	27(18.9)	92(64.3)	0(0.0)	143(44.3)
		計	22(6.8)	6(1.9)	38(11.8)	257(79.6)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	66(8.2)	30(3.7)	56(6.9)	588(73.0)	63(7.8)	806(75.5)
		60歳以上	30(11.5)	21(8.0)	55(21.0)	146(55.7)	5(1.9)	262(24.5)
		計	96(9.0)	51(4.8)	111(10.4)	734(68.7)	68(6.4)	1068(50.4)
全　体		40～59歳	154(10.4)	98(6.6)	130(8.7)	936(63.0)	165(11.1)	1486(70.1)
		60歳以上	71(11.2)	64(10.1)	153(24.1)	299(47.2)	41(6.5)	633(29.9)
		総　計	225(10.6)	162(7.6)	283(13.4)	1235(58.3)	206(9.7)	2119

さらに，Ｂについては，無回答が男性21.6%，女性の15.6%にみられることから，全国大会への参加が目的とされていないのかもしれない．

１．３　ブロック大会への参加状況（表３－３）

男女とも高度化型競技志向スポーツ参加者Ａのブロック大会への参加がほかのグループに比べて非常に高く（男性73.6%，女性46.9%）有意な差がみられた（$p<0.01$）．また，大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃ（男性31.3%，女性20.5%）が続いており，大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂ（男性11.4%，女性8.7%）との間には有意な差がみられた（$p<0.01$）．Ｃの中年層では，女性より男性の参加率が多少高い．これは，Ｃの居住している兵庫県で大会が開催されたことも大きく影響していよう．また，Ｃでは60才の以上の高年層の参加が中年層よりも高い参加率を（男性32.1%，女性35.7%）示した．

ブロック大会の参加率の大小があることについては，①競技種目によってブロック大会の開催の有無が関係すること，②ブロック大会は，都道府県大会よりも技能的には上のレベルの大会であり，それに伴う技能が必要とされるためにレベルが到達していないこと，③ＣがＢより多いのは，既存のスポーツに比べてその目的・方法等が参加層の体力・運動能力にマッチしていること．④高年層の方が中年層よりも時間的なゆとりがあることなどがその理由として考えられよう．

Ｂの参加率が全国大会参加の結果と同様に低いことについては，無回答が男性23.6%（中年層9.5%，高年層20%），女性17.4%（中年層18.5%，高年層8.0%）であることからも，Ｂの２割は大会参加を目的としていないと思われる．

１．４　都道府県大会への参加（表３－４）

高度化型競技志向スポーツ参加者Ａの男女とも他のグループに比べて都道府県大会への参加率が高く（男性87.7%，女性73.8%）（$p<0.01$），次いで大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃ，大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂの順であった．Ａの場合，全国大会等への出場のためには，①予選の通過が必要となるが，都道府県大会がその予選に該当す

表３－４　都道府県大会参加状況

			1　回	2　回	3回以上	な　し	NA	計
男性	高度化型	40～59歳	56(20.8)	56(20.8)	124(46.1)	23(8.6)	10(3.7)	269(65.8)
		60歳以上	16(11.4)	38(29.1)	65(46.4)	20(14.3)	1(0.7)	140(34.2)
		計	72(17.6)	94(23.0)	189(46.2)	43(10.5)	11(2.7)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	33(8.8)	19(5.1)	34(9.1)	230(61.3)	59(15.9)	375(83.3)
		60歳以上	3(4.0)	6(8.0)	12(16.0)	25(33.3)	29(38.7)	75(16.7)
		計	36(8.0)	25(5.6)	46(10.2)	255(56.7)	88(19.6)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	8(22.2)	4(11.1)	13(36.1)	11(30.6)	0(0.0)	36(18.8)
		60歳以上	25(16.0)	18(11.5)	64(41.0)	49(31.4)	0(0.0)	156(81.2)
		計	33(17.2)	22(11.5)	77(40.1)	60(31.3)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	97(14.3)	79(11.6)	171(25.1)	264(38.8)	69(10.1)	680(64.7)
		60歳以上	44(11.9)	62(16.9)	141(38.0)	94(25.3)	30(8.1)	371(35.3)
		計	141(13.4)	111(13.4)	312(29.7)	358(34.1)	99(9.4)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	56(19.6)	43(15.1)	111(38.9)	71(24.9)	4(1.4)	285(80.5)
		60歳以上	14(20.3)	14(20.3)	23(33.3)	14(20.3)	4(5.8)	69(19.5)
		計	70(19.8)	57(16.1)	134(37.9)	85(24.0)	8(2.3)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	30(8.8)	29(8.5)	15(4.4)	209(61.3)	58(17.0)	341(87.2)
		60歳以上	2(4.0)	1(2.0)	3(6.0)	39(78.0)	5(10.0)	50(12.8)
		計	32(8.2)	30(7.7)	18(4.6)	243(63.4)	63(16.7)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	15(8.3)	3(1.7)	15(8.3)	147(81.7)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	18(12.6)	18(12.6)	39(27.3)	68(47.6)	0(0.0)	143(44.3)
		計	33(10.2)	21(6.5)	54(16.7)	215(66.6)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	101(12.5)	75(9.3)	141(17.5)	427(53.0)	62(7.7)	806(75.5)
		60歳以上	34(13.0)	33(12.6)	65(24.8)	121(46.2)	9(3.4)	262(24.5)
		計	135(12.6)	108(10.1)	206(19.3)	543(51.3)	71(6.6)	1068(50.4)
全　体		40～59歳	198(13.3)	154(10.4)	312(21.0)	691(46.5)	131(8.8)	1486(70.1)
		60歳以上	78(12.3)	95(15.0)	206(32.5)	215(34.0)	39(6.2)	633(29.9)
		総　計	276(13.0)	249(11.8)	518(24.4)	906(42.8)	170(80.2)	2119

ること．②また，シニア大会はその多くが都道県大会以上から始まることが参加率が高い理由と考えられる．さらに，Aの中年層の大会参加率が高かったのは，テニス，バスケットボール等のスピードを要求される種目であった．

また，中年層よりは高年層，女性よりは男性の参加率が高い（$p<0.01$）．中年層より高年層の参加率が高く，Cの中年層では，女性より男性の参加率の方が高かった．なお，Bについては，全般的に参加率は20%程度であり，特に女性の高年層の参加率は12%と一段と低かった．Bの無回答が男性19.6%，女性16.7%があることから，Bの20%程度はこのレベルまでの大会参加を考えていないといえる．

１．５　市町村大会への参加状況（表３－５）

市町村大会大会への参加状況は，大衆化型ニュースポーツ参加者C（男性91.2%，女性85.2%），大衆化型既成スポーツ種目参加者B（男性72.2%，女性62.9%），高度化型競技志向スポーツ参加者A（男性67%，女性57%）の順であり，Cの参加率が他のグループに比べ高い傾向を示した（$p<0.01$）．また，中年層に比べて高年層の参加率が高い傾向をも示していた．逆に，Bの女性高年層の本大会参加率は低い（22%）．これは，Bの女性高年層を対象としたような市町村レベルの大会の開催がない，あるいは都道府県大会のへ参加率が低い（12.%）ことも併せて，Bの女性高年層は大会参加志向よりも健康・体力の維持・増進や仲間との邂逅，プレイを楽しむためにスポーツと関わっている考えられる．また，Bの無回答については前記の大会の無回答率よりは少ない（男性5.6%，女性7.2%）．

１．６　クラブ・地区大会への参加状況（表３－６）

大衆化型既成スポーツ種目参加者Bの男性ではクラブ・地区大会への参加率は59%であるのに対して，女性高年層の参加率は18%と少ない．また，大衆化型ニュースポーツ参加者Cでは，男性では86%の参加が見られたのに対して女性では68.9%であり，ここでも中年層よりも高年層の参加率が

表３－５　市町村大会参加状況

			１　回	２　回	３回以上	な　し	ＮＡ	計
男性	高度化型	40～59歳	30(11.2)	34(12.6)	124(46.1)	67(24.9)	14(5.2)	269(65.8)
		60歳以上	23(16.4)	21(15.0)	42(30.0)	47(33.6)	7(5.0)	140(34.2)
		計	53(13.0)	55(13.4)	166(40.5)	114(27.9)	21(5.1)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	71(18.9)	39(10.4)	167(44.5)	84(22.4)	14(3.7)	375(83.3)
		60歳以上	7(9.3)	6(8.0)	35(46.7)	16(21.3)	11(14.7)	75(16.7)
		計	78(17.3)	45(10.0)	202(44.9)	100(22.2)	25(5.6)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	3(8.3)	6(16.7)	26(72.2)	1(2.7)	0(0.0)	36(18.8)
		60歳以上	10(6.4)	12(7.7)	120(76.9)	14(8.9)	0(0.0)	156(81.2)
		計	13(6.8)	18(9.4)	146(76.0)	15(7.8)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	104(15.3)	79(11.6)	317(46.6)	152(22.4)	28(4.1)	680(64.7)
		60歳以上	40(10.8)	39(10.5)	197(53.1)	77(20.8)	18(4.9)	371(35.3)
		計	144(13.7)	118(11.2)	514(48.9)	229(21.8)	46(4.4)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	43(15.1)	32(11.2)	100(35.1)	104(36.5)	6(2.1)	285(80.5)
		60歳以上	7(10.1)	6(8.7)	14(20.3)	34(49.3)	8(11.6)	69(19.5)
		計	50(14.1)	38(10.7)	114(32.2)	138(39.0)	14(4.0)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	27(7.9)	28(8.2)	180(52.8)	81(23.8)	25(7.3)	341(87.2)
		60歳以上	2(4.0)	1(2.0)	8(16.0)	36(72.0)	3(6.0)	50(12.8)
		計	29(7.4)	29(7.4)	188(48.1)	117(29.9)	28(7.2)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	5(2.8)	8(4.4)	138(76.7)	29(16.1)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	14(9.8)	8(5.6)	102(71.3)	19(13.3)	0(0.0)	143(44.3)
		計	19(5.9)	16(5.0)	240(74.3)	48(14.9)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	75(9.3)	68(8.4)	418(51.8)	214(26.6)	31(3.8)	806(75.5)
		60歳以上	23(8.8)	15(5.7)	124(47.3)	89(34.0)	11(4.2)	262(24.5)
		計	98(9.2)	83(7.8)	542(50.7)	303(28.4)	42(3.9)	1068(50.4)
全体		40～59歳	179(12.0)	147(9.9)	735(49.5)	366(24.6)	59(4.0)	1486(70.1)
		60歳以上	63(10.0)	54(8.5)	321(50.1)	166(26.2)	29(4.6)	633(29.9)
		総　計	242(11.4)	201(9.5)	1056(49.8)	532(25.1)	88(4.2)	2119

表３－６　クラブ・地区大会参加状況

			１　回	２　回	３回以上	な　し	ＮＡ	計
男性	大衆化型	40～59歳	70(18.7)	32(8.5)	126(33.6)	121(32.3)	26(6.9)	375(83.3)
		60歳以上	1(1.3)	3(4.0)	34(45.3)	19(25.3)	18(24.0)	75(16.7)
		計	71(15.8)	35(7.8)	160(35.6)	140(31.1)	44(9.8)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	2(5.6)	0(0.0)	28(77.8)	6(16.7)	0(0.0)	36(18.8)
		60歳以上	6(3.8)	8(5.1)	121(77.6)	21(13.5)	0(0.0)	156(81.2)
		計	8(4.2)	8(4.2)	149(77.6)	27(14.1)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	72(17.5)	32(7.8)	154(37.5)	127(30.9)	26(6.3)	411(64.0)
		60歳以上	7(3.0)	11(4.8)	155(67.1)	40(17.3)	18(7.8)	231(36.0)
		計	79(12.3)	43(6.7)	309(48.1)	167(26.0)	44(6.9)	642(47.3)
女性	大衆化型	40～59歳	17(5.9)	58(17.0)	117(34.3)	113(33.1)	36(10.6)	341(87.2)
		60歳以上	3(6.0)	3(6.0)	6(12.0)	33(66.0)	5(10.0)	50(12.8)
		計	20(5.1)	61(15.6)	123(31.5)	146(37.3)	41(10.5)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	22(12.2)	17(9.4)	74(41.1)	67(37.2)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	8(5.6)	5(3.5)	96(67.1)	34(23.8)	0(0.0)	143(44.3)
		計	30(9.3)	22(6.8)	170(52.6)	101(31.3)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	39(7.5)	75(14.4)	191(36.7)	180(34.5)	36(6.9)	521(73.0)
		60歳以上	11(5.7)	8(4.1)	102(52.8)	67(34.7)	5(2.6)	193(27.0)
		計	50(5.7)	83(11.6)	293(41.0)	247(34.6)	41(5.7)	714(52.7)
全体		40～59歳	111(11.9)	107(11.5)	345(37.0)	307(32.9)	62(6.7)	932(68.7)
		60歳以上	18(4.2)	19(4.5)	257(60.6)	107(25.2)	23(5.4)	424(31.3)
		総　計	129(9.5)	126(9.3)	602(44.4)	414(30.5)	85(6.3)	1356

表３－７　優勝回数

			1～10回	11回以上	な　し	ＮＡ	計
男性	高度化型	40～59歳	143(53.2)	10(3.7)	116(43.1)	0(0.0)	269(65.8)
		60歳以上	83(59.3)	12(8.6)	45(32.1)	0(0.0)	140(34.2)
		計	226(55.3)	22(5.4)	161(39.4)	0(0.0)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	106(28.3)	3(0.8)	220(58.7)	46(12.3)	375(83.3)
		60歳以上	32(42.7)	1(1.3)	20(26.7)	22(29.3)	75(16.7)
		計	138(30.7)	4(0.9)	240(53.3)	68(15.1)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	19(52.8)	0(0.0)	17(47.2)	0(0.0)	36(18.8)
		60歳以上	74(47.4)	0(0.0)	74(47.4)	0(0.0)	156(81.2)
		計	93(48.4)	0(0.0)	91(47.4)	0(0.0)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	268(39.4)	13(4.6)	353(51.9)	46(6.8)	680(64.7)
		60歳以上	189(50.9)	13(3.5)	139(37.5)	22(5.9)	371(35.3)
		計	457(43.5)	26(2.5)	492(46.8)	68(6.5)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	121(42.4)	13(4.6)	151(53.0)	0(0.0)	285(80.5)
		60歳以上	31(44.9)	21(30.4)	17(24.6)	0(0.0)	69(19.5)
		計	152(42.9)	34(9.6)	168(47.5)	0(0.0)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	141(41.3)	3(0.9)	125(36.7)	72(21.1)	341(87.2)
		60歳以上	9(18.0)	0(0.0)	17(34.0)	24(48.0)	50(12.8)
		計	150(38.4)	3(0.8)	142(36.3)	96(24.6)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	54(30.0)	3(1.7)	123(68.3)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	40(28.0)	0(0.0)	103(72.0)	0(0.0)	143(44.3)
		計	94(29.1)	3(0.9)	226(70.0)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	316(39.2)	19(2.4)	399(49.5)	72(8.9)	806(75.5)
		60歳以上	80(30.5)	21(8.0)	137(52.3)	24(9.2)	262(24.5)
		計	396(37.1)	40(3.7)	536(50.2)	96(9.0)	1068(50.4)
全　体		40～59歳	584(39.3)	32(2.2)	752(50.6)	118(7.9)	1486(70.1)
		60歳以上	269(42.5)	34(5.4)	276(43.6)	46(7.3)	633(29.9)
		総　計	853(40.3)	66(3.1)	1028(48.5)	164(7.7)	2119

高いという結果が見られた．Cのクラブ・地区大会への参加率が高いのは，ニュースポーツがゲートボールのように地域を中心として発展し，クラブ内の大会や地区大会が盛んに行われていること，高年齢層に応じた運動量や運動の質も関係しているであろう．また，Bの女性高年層の参加率が低いことは，前記の大会の参加率が低いことと同様に，スポーツとの関わり方－自己の健康・体力の維持・増進，仲間との邂逅にプレイを楽しむことなどーによる違いと思われる．

２．参加競技会での成績

２．１　過去３カ年の全国大会や国際大会の優勝経験の有無（表３－７，図３－１）

対象者の40%は優勝経験をもっており，そのうちの高年層では47.9%を示していた．また，参加タイプ別では，高度化競技志向スポーツ参加者A（男性60.4%，女性52.5%），大衆化型ニュースポーツ参加者C（男性52.6%，女性30.0%），大衆化型既成スポーツ種目参加者B（男性31.6%，女性39.1%）の順であった．

Aの女性の優勝経験を有する率は，BやCに比べて高率を示し，11回以上の優勝回数・経験を有する率が30.4%見られた．前回の調査から，特に水泳のシニア大会の出場者の場合，シニア大会のシステム（５才きざみで実施され，多種目へのエントリー可能といったシステム）をとっていることが大会参加率を高め，併せて優勝回数を増加させるだけでなく，Aの調査対象者がシニア大会のトップ選手であったこともあり，当然このような結果がでたといえよう．Cでは，Bの男性よりも優勝経験を有する率が52%と高く，ここでも有意な差があった（$P<0.01$）．女性の場合，各グループの間には有意な差は認められなかったが，高年層の優勝経験を有する率は高い．

優勝回数では，一回の優勝経験を有する率は，A（男性20%，女性16%），C（男性18.8%，女性18.3%），B（男性9.1%，女性12.3%）の順であった．二回以上の優勝経験を有する率が高いのはもちろんA（55.3%，42.9%）であり，同様にC

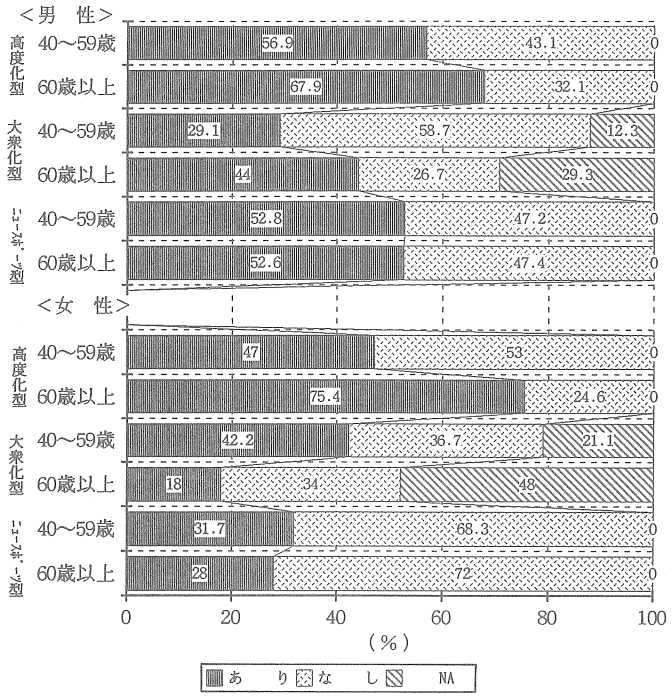


図３－１　優勝経験の有無

（48.4%，29.1%），B（30.7%，38.4%）の順であった．

Bの優勝経験が他のグループより低いのは，①種目のもつ特性－個人種目か集団種目か，②技能レベル－初心者レベルか，トップレベルか，③経験年数－ベテランか，初心者か，④スポーツをする目的－勝利志向か，プレイを楽しむのか，健康のためか，仲間作りなのかなどといった要因に加えて，前節の大会参加率からみても，どのレベルの大会においても参加率が低いことによると思われる．

なお，優勝回数が多い種目は順に，Aでは陸上（男性20回･女性37回），水泳（男性82回，女性62回），テニス（男性７回，女性20回），ソフトボール（男性４回），バスケットボール（女性６回）であり，Bでは陸上(男性３回，女性１回)，水泳(男性15回，女性10回)，テニス(男性10回，女性10回)，ソフトボール(男性50回，女性５回)，バレーボール（女性20回），Cではペタンク（男性10回，女性15回），グラウンドゴルフ(男性10回，女性５回)，家庭バレーボール（女性15回）であり，この結果をみてもAグループが断然多いことがわかる．

２．２　過去３ヶ年のスポーツ大会上位入賞経験の有無と入賞回数（表３－８，図３－２）

入賞経験を有する率は，男性68.4%，女性61%であり，高度化型競技志向スポーツ参加者Aが依然として多い(男性90.2%，女性73.7%)．Aが多いのは，他のグループに比べて全国大会の参加率が90%を越える（男性96%，女性92.1%）状況があること，技能レベルが高いことが考えられる．

中・高年層を比較すると，男性ではAが圧倒的に高く，大衆化型既成スポーツ種目参加者Bの女性，大衆化型ニュースポーツ参加者Cの男女では中年層の方が高い傾向を示した．
Aの高年層の女性ではその43.5%が，入賞回数が11回以上と回答していた．

入賞回数の最大はAでは男女とも水泳(100回)，大衆化型の男性ではソフトボール(30回)，女性ではバレーボール(20回)，ニュースポーツの男性ではグランドゴルフ(50回)，女性では家庭バレーボール（15回）であった．

表３－８　入賞回数

			1～10回	11回以上	な　し	ＮＡ	計
男性	高度化型	40～59歳	211(78.4)	23(8.6)	35(11.9)	0(0.0)	269(65.8)
		60歳以上	110(78.6)	25(17.9)	5(3.6)	0(0.0)	140(34.2)
		計	321(78.5)	48(11.7)	40(9.8)	0(0.0)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	169(45.1)	8(2.1)	172(45.9)	26(6.9)	375(83.3)
		60歳以上	36(48.0)	2(2.7)	15(20.0)	22(29.3)	75(16.7)
		計	205(45.6)	10(2.2)	187(41.6)	48(10.7)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	27(75.0)	0(0.0)	9(25.0)	0(0.0)	36(18.8)
		60歳以上	100(64.1)	8(5.1)	47(30.1)	1(0.6)	156(81.2)
		計	127(66.1)	8(4.2)	56(29.2)	1(0.5)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	407(59.9)	31(4.6)	216(31.8)	26(3.8)	680(64.7)
		60歳以上	246(66.3)	35(9.4)	67(18.1)	23(6.2)	371(35.3)
		計	653(62.1)	66(6.3)	283(26.9)	49(4.7)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	164(57.5)	31(10.9)	90(31.6)	0(0.0)	285(80.5)
		60歳以上	36(52.2)	30(43.5)	3(4.3)	0(0.0)	69(19.5)
		計	200(56.5)	61(17.2)	93(26.3)	0(0.0)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	171(50.1)	30(8.8)	71(20.8)	69(20.2)	341(87.2)
		60歳以上	11(22.0)	1(2.0)	14(28.0)	24(48.0)	50(12.8)
		計	182(46.5)	31(7.9)	85(21.7)	93(23.8)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	104(57.8)	10(5.6)	66(36.7)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	63(44.1)	0(0.0)	79(55.2)	1(0.7)	143(44.3)
		計	167(51.7)	10(3.1)	145(44.9)	1(0.3)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	439(54.5)	71(8.8)	227(28.2)	69(8.6)	806(75.5)
		60歳以上	110(42.0)	31(11.8)	96(36.6)	25(9.5)	262(24.5)
		計	549(51.4)	102(9.6)	323(30.2)	94(8.8)	1068(50.4)
全　体		40～59歳	846(56.9)	102(6.9)	443(29.8)	95(6.4)	1486(70.1)
		60歳以上	356(56.2)	66(10.4)	163(25.8)	48(7.6)	633(29.9)
		総　計	1202(56.7)	168(7.9)	606(28.6)	143(6.7)	2119

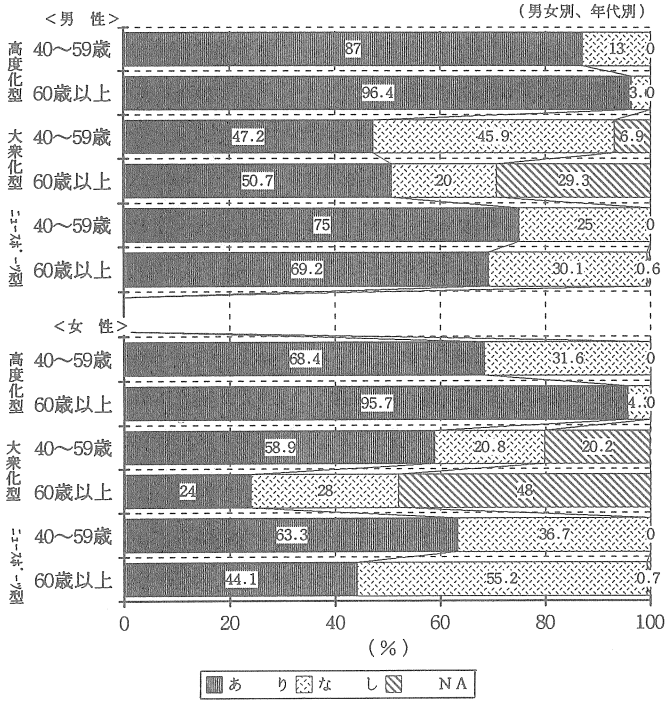


図３－２　入賞経験者の有無

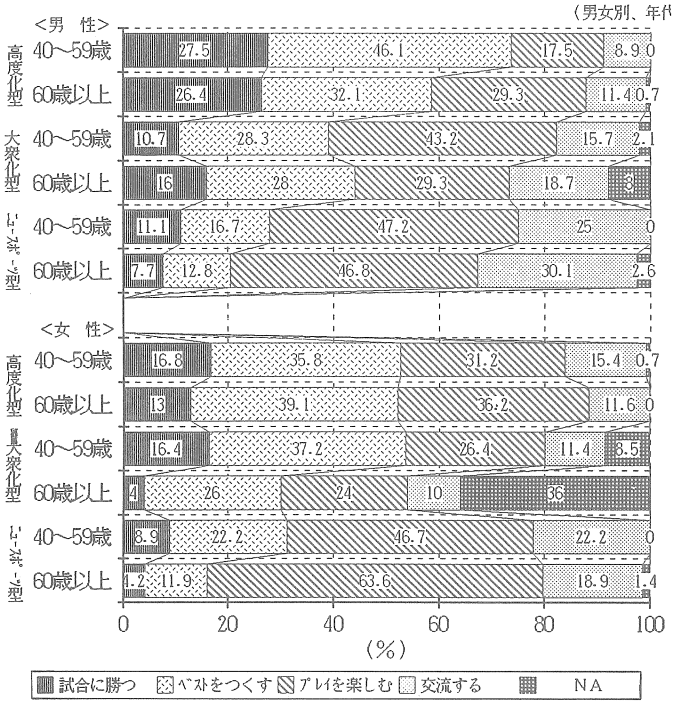


図３－３　スポーツ大会の参加目的・意義

３．大会参加の意義・目的（図３－３）

種目，年齢階層，技能レベルによっても参加目的や意義は異なるが，大会へ参加することを目的とすることは，スポーツ欲求を充足し継続する要因となる．大会への参加目的や意義ついては前回の調査と同様に次の４つの項目について，３つのグループを比較した．

前回の高度化型競技スポーツ種目参加者Ａは，スポーツ大会参加の目的や意義を，「ベストをつくし，試合に勝ち，プレイを楽しみ，交流する」という順で上っていた．参加の目的や意義は，建前として「プレイを楽しむ」としながらも，技能レベルが上ると本音の部分では日本人本来の生真面目さが影響し，「ベストをつくして闘う」ことへと変容していく．

今回の調査では，大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂの男性，大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃ型では，先ず大会参加の目的は「プレイを楽しむ」ことであった．それに対して，高度化型競技志向参加者Ａと同様に「ベストをつくす」としたのはＢであった．Ｃでは「プレイを楽しむ」という楽しみ追求・充足に加え，ＡＢとは異なり「交流する」ことが第二位に上げられていた．勝敗より，好きなスポーツを楽しみ，日頃の練習仲間に加えてそこに集う人たちとの交流することは新たな人間関係を拡げ，豊かにする．さらに，次の大会で再会することを楽しみにし，お互いの元気な様子，活躍している様子が励みになり，スポーツを継続され，QOL がそれに伴い高められていくことになる．鈴木によれば，「高齢者の指向は健康と社交としている」[1]ことからも裏付けられる．

スポーツの楽しみ方は，個々に応じて異なる．どのような楽しみ方でも，それが契機となりスポーツ欲求が充足され，スポーツの継続に繋がる．しかし，大会に参加することになるとそのためには，予選を通過が必要なシステムをとっている種目が多く，そうなるとどうしても勝利志向にならざるをえない．したがってそれに応じた練習内容・方法がとられるようになる．中高年にとってQOLを高める一助ともなるスポーツが，強い，技能レベルの高い一部の人たち（スポーツエリート）だ

表３－９　週あたりの練習日数（男女別，年代別）

			1　日	2　日	3　日	4　日	5　日	6　日	7　日	NA	計
男性	高度化型	40～59歳	67(24.9)	66(24.5)	46(17.1)	26(9.7)	32(11.9)	18(6.7)	8(3.0)	6(2.2)	269(65.8)
		60歳以上	10(7.1)	46(32.9)	25(17.9)	14(10.0)	23(16.4)	16(11.4)	6(4.3)	0(0.0)	140(34.2)
		計	77(18.8)	112(27.4)	99(24.2)	38(9.3)	55(13.4)	34(8.3)	14(3.4)	6(1.5)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	187(49.9)	87(23.2)	38(10.1)	13(3.5)	12(3.2)	14(3.7)	4(1.1)	20(5.3)	375(83.3)
		60歳以上	31(41.3)	17(22.7)	10(13.3)	2(2.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	15(20.0)	75(16.7)
		計	218(48.4)	104(23.1)	48(10.7)	15(3.3)	12(2.7)	14(3.1)	4(0.9)	35(7.8)	450(42.8)
	ニュースポーツ型	40～59歳	13(36.1)	19(52.8)	2(5.6)	1(2.8)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.8)	36(18.8)
		60歳以上	19(12.2)	50(32.1)	36(23.1)	15(9.6)	22(14.1)	9(5.8)	2(1.3)	3(1.9)	156(81.2)
		計	32(16.7)	69(35.9)	38(19.8)	16(8.3)	22(11.5)	9(4.7)	2(1.0)	4(2.1)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	367(39.3)	172(25.3)	89(12.6)	40(5.9)	44(6.5)	32(4.7)	12(1.8)	11(1.6)	680(64.7)
		60歳以上	60(16.2)	113(30.5)	71(19.1)	31(8.4)	45(12.1)	25(6.7)	8(2.2)	3(0.8)	371(35.3)
		計	327(31.1)	285(27.1)	157(14.9)	71(6.8)	89(8.5)	57(5.4)	20(1.9)	14(1.3)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	130(45.6)	61(21.4)	35(12.3)	21(7.4)	18(6.3)	13(4.6)	2(0.7)	5(1.8)	285(80.5)
		60歳以上	11(15.9)	10(14.5)	20(29.0)	13(18.8)	7(10.1)	6(8.7)	2(2.9)	0(0.0)	69(19.5)
		計	141(39.8)	71(20.1)	55(15.5)	34(9.6)	25(7.1)	19(5.4)	4(1.1)	5(1.4)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	104(30.5)	126(37.0)	43(12.6)	17(5.0)	11(3.2)	2(0.6)	0(0.0)	38(11.1)	341(87.2)
		60歳以上	17(34.0)	4(8.0)	2(4.0)	4(8.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	23(16.0)	50(12.8)
		計	121(30.9)	130(33.2)	45(11.5)	21(5.4)	11(2.8)	2(0.5)	0(0.0)	61(15.6)	391(36.6)
	ニュースポーツ型	40～59歳	78(43.3)	73(40.6)	20(11.1)	6(3.3)	2(1.1)	1(0.6)	0(0.0)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	28(19.6)	50(35.0)	35(24.5)	14(9.8)	11(7.7)	3(2.1)	2(1.4)	0(0.0)	143(44.3)
		計	106(32.8)	123(38.1)	55(17.0)	20(6.2)	13(4.0)	4(1.2)	2(0.6)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	312(38.8)	260(32.3)	98(12.2)	44(5.5)	31(3.8)	16(2.0)	2(0.2)	43(5.3)	806(75.5)
		60歳以上	56(21.4)	64(24.4)	57(21.8)	31(11.8)	18(6.9)	9(3.4)	4(1.5)	23(8.8)	262(24.5)
		計	368(34.5)	324(30.3)	155(14.5)	75(7.0)	49(4.6)	25(2.3)	6(0.6)	66(6.2)	1068(50.4)
全　体		40～59歳	579(39.0)	432(29.1)	184(12.4)	84(5.7)	75(5.0)	48(3.2)	14(0.9)	54(3.6)	1486(70.1)
		60歳以上	116(18.3)	177(28.0)	128(20.2)	62(9.8)	63(10.0)	34(5.4)	12(1.9)	26(4.1)	633(29.9)
		総　計	695(4.5)	609(28.7)	312(14.7)	146(6.9)	138(6.5)	82(3.9)	26(1.2)	80(3.8)	2119

けのものとなってしまう危険性を孕む．これからの中高年のスポーツ参加を増加させるためには，大会のあり方等を再検討する必要がある．

４．スポーツ大会種目の練習の程度

専門種目のスポーツ大会への参加が目的になると，技能レベルの向上を図り，大会に必要な体力のために，練習日程や練習時間の量と質が問題になる．中高年にとっては，体力的な衰えは如何ともしがたく，故障を引き起こすことになり，スポーツをすることがマイナスの要因と化してしまうことになる．ライフタイムスポーツとして，QOLを計るにも練習のあり方について検討することが必要である．ここでは，３つのグループの練習の程度から，至適練習日数や時間についてみるものである．

４．１　一週間の練習日数（表３－９）

スポーツ大会参加種目の一週間の練習の程度は，高度化型競技志向スポーツ参加者Ａでは，週２日（27.4%），大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂでは週あたり１日（48.4%），大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃでは週あたり２日（35.9%）であり，おおよそ週あたり２日程度の練習を行っていた．さらに，男女別，年代層別にみると，Ａの男性およびＣでは週あたり２日以上の練習を行っていた．Ｃの男性中年層ではその52.8%，女性の40.6%が週あたり１～２日の練習を行っていた．

前回の調査から，Ａではほぼ毎日練習している男性29.3%，女性32.4%，週３日以上練習しているのは，男性51.2%，女性50.7%であり，Ａの練習日数は他のグループに比べると多い．すなわち，全国大会のレベルへ出場するには，週３日以上の専門種目の練習が必要であるといえよう．

スポーツを楽しく継続させていくには，無理のない練習日程を組むことが不可欠である．それには，現役の中年層ではその社会的な状況から週あたり１～２日の練習日程にせざるをえないだろうし，反対に時間的余裕のある高年層では，健康・体力の面からせいぜい２～３日程度の練習に止めておくことがよりよいと思われる．

４．２　一回あたりの練習時間（表３－10）

一回あたりの練習時間の最大は高度化型競技志向スポーツ参加者Ａの男性では８時間（ソフトボール），女性では10時間（テニス）であったが，一般に一回あたりの練習時間は２時間程度であった．週あたり２時間の練習と回答したのは，Ａ（男性48.1%，女性53.5%），Ｂ（男女とも60%），Ｃ（男性60%弱，女性80%）の通りである．

表３－10　一日あたりの練習時間（男女別，年代別）

			１時間	２時間	３時間	４時間	５時間	６時間	７時間	ＮＡ	計
男性	高度化型	40～59歳	51(19.0)	113(42.0)	64(23.8)	25(9.3)	4(1.5)	2(0.7)	1(0.4)	9(3.3)	269(65.8)
		60歳以上	31(22.1)	58(41.4)	35(25.0)	13(9.3)	1(0.7)	0(0.0)	1(0.7)	1(0.7)	140(34.2)
		計	82(20.0)	171(41.8)	99(24.2)	38(9.3)	5(1.2)	2(0.5)	2(0.5)	10(2.4)	409(38.9)
	大衆化型	40～59歳	111(29.6)	121(32.3)	73(19.5)	34(9.1)	11(2.9)	8(2.1)	0(0.0)	17(4.5)	375(83.3)
		60歳以上	8(10.7)	19(25.3)	17(22.7)	13(17.4)	2(2.7)	0(0.0)	0(0.0)	16(21.3)	75(16.7)
		計	119(26.4)	140(31.1)	90(20.0)	47(10.4)	13(2.9)	8(1.8)	0(0.0)	33(7.3)	450(42.8)
	ﾆｭｰｽｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	3(8.3)	18(50.0)	11(30.6)	3(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.8)	36(18.8)
		60歳以上	4(2.6)	91(58.3)	41(26.3)	10(6.4)	4(2.6)	3(1.9)	3(1.9)	3(1.9)	156(81.2)
		計	7(3.6)	109(56.8)	52(27.1)	13(6.8)	4(2.1)	3(1.6)	3(1.6)	4(2.1)	192(18.3)
	小　計	40～59歳	165(24.3)	252(37.1)	148(21.8)	62(9.1)	15(2.2)	10(1.5)	1(0.1)	27(4.0)	680(64.7)
		60歳以上	43(11.6)	168(45.3)	93(25.1)	36(9.7)	7(1.9)	3(0.8)	3(0.8)	20(5.4)	371(35.3)
		計	208(19.8)	420(40.0)	241(22.9)	98(9.3)	22(2.1)	13(1.2)	4(8.5)	47(4.5)	1051(49.6)
女性	高度化型	40～59歳	55(19.3)	189(66.3)	33(11.6)	2(0.7)	1(0.4)	0(0.0)	2(0.7)	3(1.1)	285(80.5)
		60歳以上	29(42.0)	30(43.5)	8(11.6)	1(1.4)	1(1.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	69(19.5)
		計	84(23.7)	219(61.9)	41(11.6)	3(0.8)	2(0.6)	0(0.0)	2(0.6)	3(0.8)	354(33.1)
	大衆化型	40～59歳	28(8.2)	173(50.7)	80(23.5)	21(6.2)	4(1.2)	0(0.0)	0(0.0)	35(10.3)	341(87.2)
		60歳以上	7(14.0)	16(32.0)	5(10.0)	1(2.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	21(42.0)	50(12.8)
		計	35(9.0)	189(48.3)	85(21.7)	22(5.6)	4(1.0)	0(0.0)	0(0.0)	56(14.3)	391(36.6)
	ﾆｭｰｽｽﾎﾟｰﾂ型	40～59歳	7(3.9)	146(81.1)	17(9.4)	6(3.3)	0(0.0)	2(1.1)	2(1.1)	0(0.0)	180(55.7)
		60歳以上	16(11.1)	92(64.3)	29(20.3)	4(2.8)	1(0.7)	0(0.0)	1(0.7)	0(0.0)	143(44.3)
		計	23(7.1)	238(73.7)	46(14.2)	10(3.1)	1(0.3)	2(0.6)	3(0.9)	0(0.0)	323(30.2)
	小　計	40～59歳	90(11.2)	508(63.0)	130(16.1)	29(3.6)	5(0.6)	2(0.2)	4(0.5)	38(4.7)	806(75.5)
		60歳以上	52(19.8)	138(52.7)	42(16.0)	6(2.3)	2(0.8)	0(0.0)	1(0.4)	21(8.0)	262(24.5)
		計	142(13.3)	646(60.5)	172(16.1)	35(3.3)	7(0.7)	2(0.2)	5(0.5)	59(5.5)	1068(50.4)
全体		40～59歳	255(17.2)	760(51.1)	278(18.7)	91(6.1)	20(1.3)	12(0.8)	5(0.3)	65(4.4)	1486(70.1)
		60歳以上	95(15.0)	306(48.3)	135(21.3)	42(6.6)	9(1.4)	3(0.5)	4(0.6)	41(6.5)	633(29.9)
		総　計	350(16.5)	1066(50.3)	413(19.5)	133(6.3)	29(1.4)	15(0.7)	9(0.4)	106(5.0)	2119

年齢的なことを加味しても，スポーツを無理なく，故障なく継続させていくには一日最大２時間程度の練習を行うほうがよいであろう．より高いレベルの大会出場を目標設定すると，練習時間は必然的に長時間になりがちである．中高年にとって時間時間が延長されれば，疲労の蓄積は若い頃に比べて大きく，その回復にも時間がかかるのはいうまでもないであろう．

５．ま　と　め

１）各大会の参加状況は，高度化型競技志向スポーツ参加者Ａは全国レベルへの参加が多く，大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂ，および大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃについては，市町村レベルの大会参加が中心となっていた．なお，Ｂグループでは，都道府県レベル以上の大会の参加に対して，20％の無回答率があった．このグループにおける無回答率については，大会参加には関係なく，プレイを楽しんだり，健康・体力の増進や交流のためにスポーツを実施していいるように思われる．

２）調査対象者の割り合いは男性65％，女性76％が中年層であるにも関わらず，大会参加の年代層は，中年層より高年層の方が大会への参加が多い．

３）高年層の男性では，全国大会，都道府県大会，市町村大会，クラブ・地区大会の参加率が高かったが，ブロック大会は女性の参加が高いという結果がみられた（$P<0.01$）．

４）参加競技会の成績については，数多くの優勝経験・入賞経験を有するのは，高度化型競技志向スポーツ参加者の女性・高年層であった．

５）優勝回数，入賞回数の多いのは，高度化型競技志向スポーツ参加者Ａの次に，大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃ，大衆化型既成スポーツ種目Ｂの順であった．

６）スポーツをする目的や意義については，高度化型競技志向スポーツ参加者は男女とも第一位に「ベストをつくす」と回答していたが，大衆化型既成スポーツ種目Ｂの女性も同様であった．Ｂの男性およびＣでは「プレイを楽しむ」ことである．

７）第二位にあげられたのは，Ａの男性では「試合に勝つ」という勝利志向が現れていたが，Ａの女性では「プレイを楽しむ」，Ｂでは「ベストをつくす」，Ｃでは「交流する」といったように多様である．

８）スポーツ大会参加種目の週あたりの練習日数は，ＡおよびＣでは２日，Ｂでは１日であり，男女別，年代別ではＡの男性およびＣでは週あ

たり２日以上の練習を行っていた．特に，Ｃの男性中年層の52.8％，女性の40.6％は週あたり１～２日の練習を行っていた．

9）前回の調査から，Ａではほぼ毎日練習している男性29.3％，女性32.4％，週３日以上練習しているのは，男性51.2％，女性50.7％であり，Ａの練習日数は他のグループに比べると多い．すなわち，全国大会のレベルへ出場するには，週３日以上の専門種目の練習が必要であるようである．

10）スポーツ大会参加種目の練習時間の最大はＡでは男性のソフトボールで８時間，女性のテニスで10時間とい回答があった．しかし，回答者の約半数が一回あたり１～２時間の練習であった．

11）スポーツを楽しく，故障（ケガなく）継続させていくには，無理のない練習日程を組むことが必要不可欠である．それには，現役の中年層ではその社会的な状況から週あたり１～２日の練習日程にならざるえないのは致し方がないが，反対に時間的余裕のある高年層には，健康・体力の面から，練習はせいぜい２～３日以内，一回あたり１～２時間程度が望ましいであろう．

参考文献

1）鈴木　守；「地域における高齢者のスポーツ参加について」指導者のためのスポーツジャーナル Vol.206，㈶日本体育協会，1997年２月

4．過去のスポーツ活動の状況

報　告　者　　山口　泰雄[1)]

中高年のスポーツ愛好者の支援体制を考えるとき，中高年の愛好者が過去のライフステージにおいて，どのようなスポーツライフを過ごしてきたかを分析し，理解する必要がある．

本節では，まず，1）大衆化型既成スポーツ種目参加者－地域レベルの一般愛好者（陸上競技，水泳，テニス，ソフトボール，バレーボール）Bと，大衆化型ニュースポーツ参加者C（ペタンク，グラウンド・ゴルフ，家庭バレーボール）の過去のライフステージにおけるスポーツ実施の状況を分析する．次に，ライフステージにおけるスポーツ実施に関して，2）高度化型競技志向スポーツ参加者－トップアスリートAと大衆化型既成スポーツ種目参加者Bとの比較，3）高度化型競技志向スポーツ参加者－トップアスリートAと大衆化型ニュースポーツ参加者C，4）CとBグループの比較を行う．そして，5）学校期の定期的スポーツ活動（部活動など）の状況を高度化型競技志向スポーツ参加者Aと大衆化型既成スポーツ参加者Bのグループの比較により行う．最後に，6）大衆化型既成スポーツ参加者Bと大衆化型ニュースポーツ参加者Cの学校期における部活動などの定期的活動種目を検討する．

1．ライフステージにおけるスポーツ実施

1．1　陸上競技男性

図4－1は，陸上競技男性のスポーツ実施頻度の推移を示している．「よくした」（週3回以上）と答えたのは，20歳頃は60%，30歳頃で減少し34%，40歳頃は32%，50歳頃になると57%と再び伸びがみられる．

30歳頃と40歳頃においては，週3日型と週1日型が共存している．しかし，50歳頃になると活動頻度が増加し，週3日型が中心になっている．

1．2　陸上競技女性

図4－2は．陸上競技女性のスポーツ実施頻度の推移を表している．他の種目と比較して，20歳頃と30歳頃はあまり活動的ではない．しかし，40歳頃になると週3日型が52%，週1日型が38%と急激に伸び，40歳頃が転機となっていることが顕著である．すなわち，40歳頃に陸上競技に再社会化していったことが明らかである．

1．3　水泳男性

水泳男性においても，20歳頃と30歳頃の週1日以上の実施群（「よくした」と「ときどきした」の合計）は，5割程度である（図4－3）．しかし，40歳頃から実施群は69%と急激な増加がみられ，50歳頃にになるとさらに74%と増えている．このように，40歳頃から増加傾向がみられる．

1．4　水泳女性

図4－4は，水泳女性のスポーツ実施頻度の推移を示している．水泳女性においては，40歳頃の増加傾向が顕著に現れており，実施群がそれまでの4割強から64%に伸びている．

もうひとつの特徴は，週3日型の活動頻度が多いことである．これは，40歳頃からプールに通いはじめ，水泳の楽しさが実感できるようになり，水泳が日常的な活動になっていったことがうかがえる．

1．5　テニス男性

テニス男性の実施頻度は，他種目と異なったパターンを示している．それは，実施頻度において，週3日型より，週1日型が中心であることだ．週1日以上の実施群は，30歳頃に62%とやや減少す

1）神戸大学

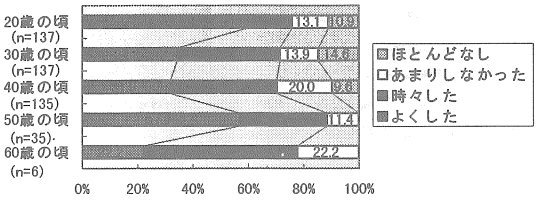


図４－１　陸上男性の過去のスポーツ実施

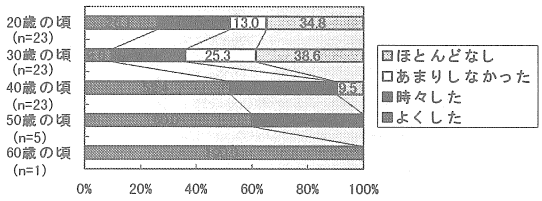


図４－２　陸上女性の過去のスポーツ実施

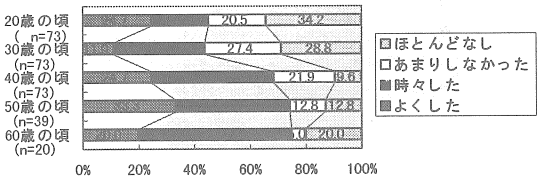


図４－３　水泳男性の過去のスポーツ実施

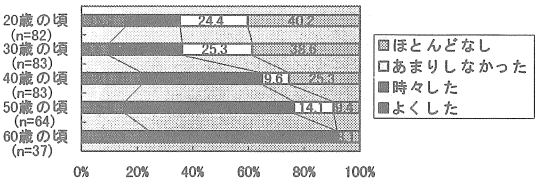


図４－４　水泳女性の過去のスポーツ実施

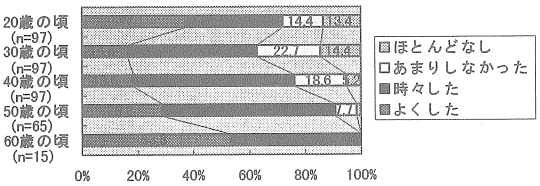


図４－５　テニス男性の過去のスポーツ実施

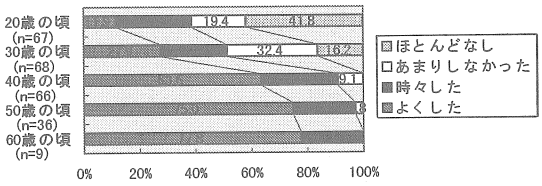


図４－６　テニス女性の過去のスポーツ実施

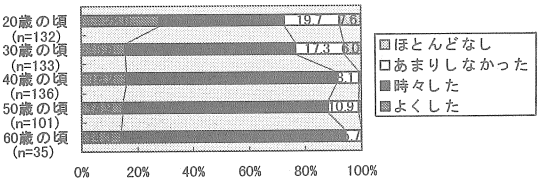


図４－７　ソフトボール男性の過去のスポーツ実施

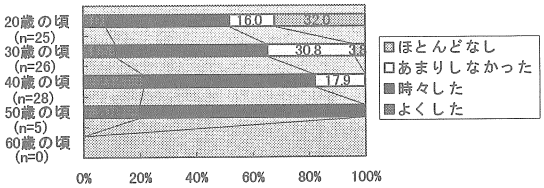


図４－８　ソフトボール女性の過去のスポーツ実施

るが，40歳頃には76％と増加し，その後，加齢とともに上昇していることが特徴である．

このように，テニス男性は週末プレイヤーが中心で，さらに，加齢と共に実施者が増え，テニスが生活の一部になっているといえるだろう．

１．６　テニス女性

テニス女性においては，30歳頃までの実施群は約５割であるが，40歳頃になると９割と急上昇している(図４－６)．さらに，実施頻度は週３日型が中心であることに特徴がある．40歳以降は，テニスの楽しさに目覚め，テニス活動中心の生活になっていることがうかがえる．

１．７　ソフトボール男性

図４－７は，ソフトボール男性のスポーツ活動の推移を表している．その特徴は２点あげられる．ひとつは，すべてのライフステージにおいて，実施群が多いことである．週１日以上の実施群は20歳頃が78％，30歳頃は76％，40歳頃は91％，50歳頃は85％，60歳頃は94％と，非常に多く，「継続型」であるといえよう．

もう１点は，30歳頃以降のライフステージにおいて，週１日型が中心であることだ．これは，週末に仲間と集まり，試合を楽しんだりしている姿がうかがえる．

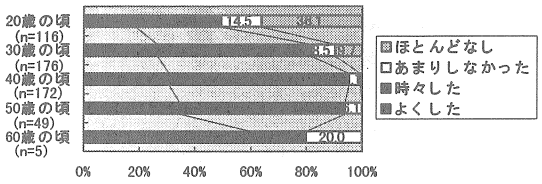


図４－９　バレーボールの過去のスポーツ実施

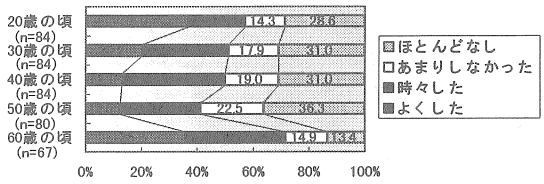


図４－10　ペタンク男性の過去のスポーツ実施

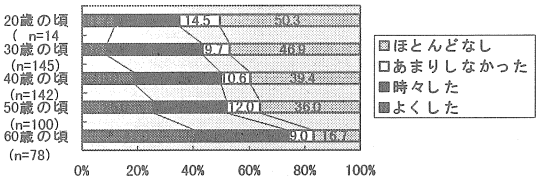


図４－11　ペタンク女性の過去のスポーツ実施

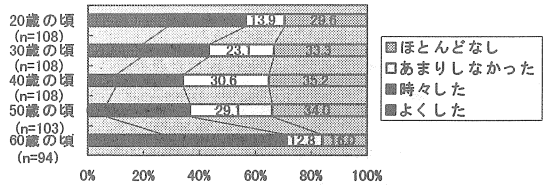


図４－12　グランド・ゴルフ男性の過去のスポーツ実施

１．８　ソフトボール女性

ソフトボール女性では，ソフトボール男性とはやや異なった傾向がみられる(図４－８)．それは，週１日以上の実施群が，20頃では52%，30歳頃は65%，40歳頃は72%と，加齢と共に増加していることだ．これは，家事や育児による時間が中年期になり減少したことにより，逆にスポーツ活動の時間が増加しているといえよう．

さらに，実施頻度は男性が週１日型であるのに対して，女性では週３日型が中心である．このように，活動頻度においては性差が顕著になっている．

１．９　バレーボール女性

次に，バレーボール愛好者の実施頻度の推移をみてみよう（図４－９)．週１日以上の実施群は，20歳頃が49%と最も少ない．しかし，30歳頃になると実施群は82%と，大きな伸びをみせている．さらに30歳頃の実施群は96%と最高になっている．

実施頻度は，テニスや水泳，ソフトボールの女性と同様に，週３日型が中心である．このように，バレーボール女性では，30歳頃が転機になり，活動的になっていることがわかる．おそらく，結婚というライフイベントにより，地域における「ママさんバレー」の活動へと関わるようになったものと推察される．

１．10　ペタンク男性

次に，ニュースポーツであるペタンク愛好者のスポーツ実施頻度の推移を検証してみよう(図４－10)．ペタンク男性のスポーツとの関わりは，これまでの陸上競技やテニス，ソフトボールなどの一般愛好者とは，かなり異なった様相を示している．

それは，週１日以上の実施群の割合が，20歳頃は56%，30歳頃は51%，40歳頃は48%，50歳頃は41%とかなり低いことである．しかし，60歳頃になると，72%と大きな増加がみられる．これは，ペタンクというニュースポーツに定年退職後に出会い，活動的な生活スタイルへと変化してきたことがうかがえる．

１．11　ペタンク女性

ペタンク女性においては，上記の傾向が男性より顕著になっている(図－11)．それは，20歳頃の実施群が35%と少なく，３人に２人は，スポーツ無縁層であったことがわかる．実施群の推移をみると，30歳頃は44%，40歳頃は50%，60歳頃は52%であるが，60歳頃になると74%と一気に上昇している．

このように，ペタンク女性の半数は中年期まではスポーツ無縁層だったが，高齢期になってペタンクというニュースポーツへ再社会化されたことがわかる．

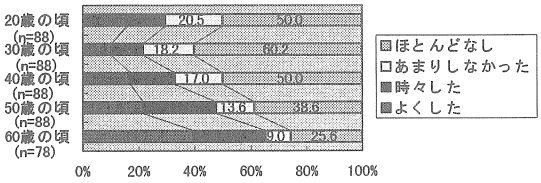


図４－13　グランボ・ゴルフ女性の過去のスポーツ実施

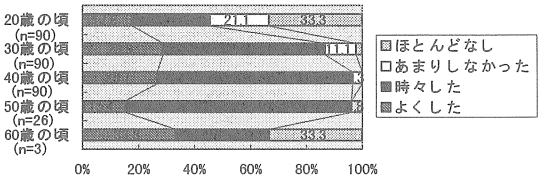


図４－14　家庭バレーボールの過去のスポーツ実施

表４－１　20歳頃のスポーツ実施：トップアスリート VS 一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
トップアスリート	52.7% (392)	19.4% (144)	8.9% (66)	19.1% (142)	100.0% (744)
一般愛好者	29.1% (233)	28.9% (232)	17.1% (137)	24.9% (200)	100.0% (802)
計	40.4% (625)	24.3% (376)	13.1% (203)	22.1% (342)	100.0% (1546)

$\chi 2 = 93.67$　　d.f.= 3　　$p<.05$

１．12　グラウンド・ゴルフ男性

図－12は，グラウンド・ゴルフ男性のスポーツ実施の推移を示している．週１日以上の実施群は，20歳頃は57%，30歳頃は34%，40歳頃は31%と減少傾向であり，50歳頃は39%と横這い状態である．しかし，60歳頃になると，実施群は71%と急速な伸びをみせている．

これは，成人期から中年期にかけて仕事中心の生活で，自分にあったスポーツ活動を見つけることができなかったが，定年退職後，グラウンド・ゴルフという新しいスポーツに出会い，急速に活動的になっていったことを示している．

１．13　グラウンド・ゴルフ女性

グラウンド・ゴルフ女性のスポーツライフは，ペタンクの女性とよく似た傾向をみせている．それは，20歳頃の実施群は29%とさらに低く，７割はスポーツと縁がなかった．しかし，加齢とともに，実施率は徐々に増えていき，60歳頃になると65%３人に２人が規則的なペタンクの愛好者へとなっている．このように，中高年期になってからスポーツへと徐々に関心が高まり，高齢期になってニュースポーツへと再社会化されたことがわかる．

１．14　家庭バレーボール

図－14は，家庭バレーボール愛好者のスポーツ実施の推移を表している．家庭バレーボール愛好者は，前述したバレーボール愛好者（図４－９）と似たパターンを示してる．すなわち，20歳頃の実施群は約半数しかみられないが，30歳頃が転機になり，89%と大きな伸びがみられる．以後，40歳頃の実施群は97%とピークを示し，50歳頃まで続いている．

しかし，60歳頃にはサンプル数が減少し，実施頻度も低下している．これは，バレーボールというジャンプを伴う活動が，高齢者にとってはやや激しく，離脱者が多いことを反映しているだろう．家庭バレーボールはルールを柔軟にし，ゴム製ののやわらかいボールに変え，愛好者を増やしていった．しかし，ジャンプを伴うという，競技の特性により，高齢期になると離脱者が多いことは避けられなかったといえよう．

２．ライフステージにおけるスポーツ実施：高度化型競技志向スポーツ参加者と大衆化型既成スポーツ参加者の比較

ここでは，各年代におけるスポーツ実施頻度を高度化型競技志向スポーツ参加者Ａ（平成８年度調査）と大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂとで比較してみよう．Ｂとは，ここでは陸上競技，水泳，テニス，ソフトボール，バレーボールの地域レベルの愛好者を指している．

表４－１は，20歳頃の実施頻度を示している．週３日以上の「よくした」と答えた者は，Ａが52.7%，Ｂ（29.1%）より顕著に高い割合を示している．全体の比較でも，ＡがＢより活動的であったことが明らかである($p < .05$)．

同様な傾向は，30歳頃，40歳頃，50歳頃，60歳

表４－２　30歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ﾄｯﾌﾟｱｽﾘｰﾄ	32.0% (241)	39.5% (297)	12.1% (91)	16.4% (123)	100.0% (752)
一般愛好者	21.1% (172)	44.1% (360)	19.0% (155)	15.8% (129)	100.0% (816)
計	26.3% (413)	41.9% (657)	15.7% (246)	16.1% (252)	100.0% (1568)

$\chi 2 = 31.80$　d.f.= 3　p<.05

表４－３　40歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ﾄｯﾌﾟｱｽﾘｰﾄ	42.9% (318)	38.9% (288)	9.4% (70)	8.8% (65)	100.0% (741)
一般愛好者	28.4% (231)	53.1% (432)	12.1% (98)	6.4% (52)	100.0% (813)
計	35.3% (549)	46.3% (720)	10.8% (168)	7.5% (117)	100.0% (1554)

$\chi 2 = 45.46$　d.f.= 3　p<.05

表４－４　50歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ﾄｯﾌﾟｱｽﾘｰﾄ	56.0% (243)	31.1% (135)	6.2% (27)	6.7% (29)	100.0% (434)
一般愛好者	31.3% (125)	56.4% (225)	9.5% (38)	3.3% (13)	100.0% (399)
計	44.2% (368)	43.2% (360)	7.8% (65)	5.0% (42)	100.0% (833)

$\chi 2 = 66.07$　d.f.= 3　p<.05

表４－５　60歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ﾄｯﾌﾟｱｽﾘｰﾄ	69.8% (143)	26.3% (54)	2.4% (5)	1.5% (3)	100.0% (205)
一般愛好者	30.5% (39)	59.4% (76)	4.7% (6)	5.5% (7)	100.0% (128)
計	54.7% (182)	39.0% (130)	3.3% (11)	3.0% (10)	100.0% (333)

$\chi 2 = 49.69$　d.f.= 3　p<.05

頃とすべての年代においてみられる．それゆえ活動頻度は，すべての年代において，ＢよりＡの方が高いといえるだろう（表４－２から表４－５）．

次にライフステージの変化に注目してみよう．Ａは，30歳頃の活動頻度がやや低下するものの，それ以外の年代では，週３日型が中心で，加齢とともに，その傾向が顕著になっている．Ｂは，30歳代以降，「ときどきした」という週１日型の割合が最も多い．週３日型は，３人に１人ほどである．

このように，過去のライフステージにおけるスポーツ実施は，ＢよりもＡの方が活動的である．さらに，Ａは週３日型が多く，Ｂでは週１日型が中心であることが明らかになった．また，Ｂは20歳代で仕事中心の生活から，４割ほどはスポーツから遠ざかるが，30歳代以降は，継続して実施する「継続型」の参加者といえよう．

３．ライフステージにおけるスポーツ実施：高度化型競技志向スポーツ参加者Ａと大衆化型ニュースポーツ参加者Ｃの比較

ここでは，ＡとＣの過去のスポーツ実施を比較してみよう．ここでいうＣとは，ペタンク，グラウンド・ゴルフ，家庭バレーボールの愛好者を指している．

表４－６から表４－10は，各年代におけるＡとＣのスポーツ実施頻度を比較したものである．Ａのデータは前述したので，主にＣのデータを検討してみよう．

Ｃでは，「よくした」「ときどきした」という活動群は，20歳代で44％，30歳代で49％，40歳代で52％，50歳代で48％である．逆に，「あまりしなかった」「ほとんどしなかった」という不活発群は，６割から５割を占めている．これは，中高年のＣは，成人期から中年期においては，半数は運動・スポーツから阻害されていたことを示している．

しかし，60歳代になると急変する．それは，週３日型が36％，週１日型が35％にも上り，高齢期に入ってから，急速に活動的な生活スタイルに変容したことがわかる．すなわち，高齢期に入ってから，スポーツへの再社会化が起こったことを示している．

スポーツへの再社会化（resocialization into

表４－６　20歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVSニュースポーツ

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
トップアスリート	52.7% (392)	19.4% (144)	8.9% (66)	19.1% (142)	100.0% (744)
ニュースポーツ	21.2% (109)	22.5% (116)	16.5% (85)	39.4% (203)	100.0% (515)
計	39.8% (501)	20.7% (260)	12.0% (151)	27.4% (345)	100.0% (1259)

$\chi 2 = 138.55$　d.f.= 3　$p<.05$

表４－７　30歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVSニュースポーツ

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
トップアスリート	32.0% (241)	39.5% (297)	12.1% (91)	16.4% (123)	100.0% (752)
ニュースポーツ	16.7% (86)	31.8% (164)	15.5% (80)	35.9% (185)	100.0% (515)
計	25.8% (327)	36.4% (461)	13.5% (171)	24.3% (308)	100.0% (1267)

$\chi 2 = 83.62$　d.f.= 3　$p<.05$

表４－８　40歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVSニュースポーツ

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
トップアスリート	42.9% (318)	38.9% (288)	9.4% (70)	8.8% (65)	100.0% (741)
ニュースポーツ	17.2% (88)	34.8% (178)	16.0% (82)	32.0% (164)	100.0% (512)
計	32.4% (406)	37.2% (466)	12.1% (152)	18.3% (229)	100.0% (1253)

$\chi 2 = 163.62$　d.f.= 3　$p<.05$

表４－９　50歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVSニュースポーツ

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
トップアスリート	56.0% (243)	31.1% (135)	6.2% (27)	6.7% (29)	100.0% (434)
ニュースポーツ	16.6% (66)	31.2% (124)	18.1% (72)	34.0% (135)	100.0% (397)
計	37.2% (309)	31.2% (259)	11.9% (99)	19.7% (164)	100.0% (831)

$\chi 2 = 189.55$　d.f.= 3　$p<.05$

表４－10　60歳頃のスポーツ実施：トップアスリートVSニュースポーツ

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
トップアスリート	69.8% (143)	26.3% (54)	2.4% (5)	1.5% (3)	100.0% (205)
ニュースポーツ	35.6% (114)	35.0% (112)	11.3% (36)	18.1% (58)	100.0% (320)
計	49.0% (257)	31.6% (166)	7.8% (41)	11.6% (61)	100.0% (525)

$\chi 2 = 74.97$　d.f.= 3　$p<.05$

sport)とは,「すでに過去のライフステージにおいて社会化された個人が，新しい社会的役割をもったときに，スポーツに関する価値，行動，役割を再学習する過程」(山口，1988)として説明される．定年退職後，これまで運動・スポーツから阻害されてきた高齢者が，これまであまり経験したことのない新しいスポーツの機会に恵まれ，急速に活動的に変化してきた姿がうかがえる．

しかし，AとCを比較してみると，すべてのライフステージにおいて，Aの方が実施頻度が高いことがわかる．実施頻度の差は，50歳代と20歳代において最も顕著である．すなわち，Aは，青年期だけでなく，中年期においても，非常にアクティブで，専門種目への「のめり込み現象」が顕著であるといえよう．

４．ライフステージにおけるスポーツ実施：大衆化型既成スポーツ種目参加者Bと大衆化型ニュースポーツ参加者Cの比較

ここでは，本年度調査を実施した大衆化型既成スポーツ種目参加型B(陸上競技，水泳，テニス，ソフトボール，バレーボール）と大衆化型ニュースポーツ参加者C（ペタンク，グラウンド・ゴルフ，家庭バレーボール）の過去のライフステージにおけるスポーツ実施を比較する．

表４－11は，20歳頃の実施頻度を比べたものである．「よくした」「ときどきした」「あまりしなかった」に関しては，ほとんど差がみられないが，「ほとんどしなかった」と答えた者が，39.4%とCの愛好者にかなり多いことがわかる．すなわち，約４割は，スポーツ無縁層であったといえよう．

表４－11　20歳頃のスポーツ実施：ニュースポーツVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ニュースポーツ	21.2% (109)	22.9% (118)	16.5% (85)	39.4% (203)	100.0% (515)
一般愛好者	29.1% (233)	28.9% (232)	17.1% (137)	24.9% (200)	100.0% (802)
計	26.0% (342)	26.6% (350)	16.9% (222)	30.6% (403)	100.0% (1317)

$\chi 2 = 33.39$　d.f.= 3　p<.05

表４－12　30歳頃のスポーツ実施：ニュースポーツVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ニュースポーツ	16.7% (86)	31.8% (164)	15.5% (80)	35.9% (185)	100.0% (515)
一般愛好者	21.1% (172)	44.1% (360)	19.0% (155)	15.8% (129)	100.0% (816)
計	19.4% (258)	39.4% (524)	17.7% (235)	23.6% (314)	100.0% (1331)

$\chi 2 = 71.49$　d.f.= 3　p<.05

表４－13　40歳頃のスポーツ実施：ニュースポーツVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ニュースポーツ	17.2% (88)	34.8% (178)	16.0% (82)	32.0% (164)	100.0% (512)
一般愛好者	28.4% (231)	53.1% (432)	12.1% (98)	6.4% (52)	100.0% (813)
計	24.1% (319)	46.0% (610)	13.6% (180)	16.3% (216)	100.0% (1325)

$\chi 2 = 169.75$　d.f.= 3　p<.05

表４－14　50歳頃のスポーツ実施：ニュースポーツVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ニュースポーツ	16.9% (66)	31.7% (124)	18.4% (72)	34.5% (135)	100.0% (391)
一般愛好者	31.3% (125)	55.9% (223)	9.5% (38)	3.3% (13)	100.0% (399)
計	24.2% (191)	43.9% (347)	13.9% (110)	18.7% (148)	100.0% (790)

$\chi 2 = 157.54$　d.f.= 3　p<.05

表４－15　60歳頃のスポーツ実施：ニュースポーツVS一般愛好者

	よくした	時々した	あまりしなかった	ほとんどしなかった	計
ニュースポーツ	35.6% (114)	35.0% (112)	11.3% (36)	18.1% (58)	100.0% (320)
一般愛好者	30.5% (39)	59.4% (76)	4.7% (6)	5.5% (7)	100.0% (128)
計	34.2% (153)	42.0% (188)	9.4% (42)	14.5% (65)	100.0% (448)

$\chi 2 = 27.95$　d.f.= 3　p<.05

また，Cにおいては，３分の１から４割は，中年期のライフステージにおいて，スポーツ無縁層であることが明らかである．

このように，BはCに比べて，過去のすべてライフステージにおいて，活動的であり，統計的にも有意な差がみられる．さらに，Cは，60歳以降の高齢期においては，急速に活発群に変容しており，スポーツへの再社会化が起こったことを示している．

５．学校期の定期的スポーツ活動（部活動など）の状況：高度化型競技志向スポーツ参加者Aと大衆化型既成スポーツ参加者B，大衆化型ニュースポーツ参加者の比較

中高年のスポーツ活動の振興を考える上で，現在の活動の基盤を築いたといえる部活動を中心とした学校期の定期的なスポーツ活動は，重要な意味をもっている．小学校期においては，部活動だけでなく，スポーツ少年団やスイミングスクールの活動も含まれている．中高年の大衆化型既成スポーツ参加者Bや大衆化型ニュースポーツ参加者Cは，どの学校期から定期的活動を始めたのかを検証してみよう．

表４－16は，高度化型競技志向スポーツ参加者Aの学校期における部活動などの定期的活動の実施者を示している．本年度調査したBのデータ（表４－17）と比較してみよう．陸上競技男性では，小学校期ではどちらも３割程度で差異はみられない．中学校期ではBがAより約１割ほど上回っている．高校期では，どちらも７割強と差がなく，大学期においては，BがAより１割強上回っている．このように，陸上競技男性においては定期的

表4－16　学校期における部活動や定期的な活動をしていた割合

	小学	中学	高校	大学
陸上　男	30.7	66.7	84.3 (73.5)	71.2 (36.3)
陸上　女	15.7	64.2	72.6 (64.3)	76.9 (28.6)
水泳　男	27.6	66.2	80.3 (67.9)	59.5 (32.1)
水泳　女	29.9	57.3	53.0 (44.9)	28.6 (10.3)
テニス　男	49.2	82.3	79.3 (71.9)	90.0 (70.3)
テニス　女	22.9	64.9	69.4 (67.6)	65.0 (35.1)
ソフト　男	55.9	82.6	83.2 (63.0)	53.8 (8.5)
バスケ　女	17.3	89.9	97.6 (97.6)	86.3 (40.8)

＊　不明・無回答を除く。（　）内の数字は全体に占めるパーセント

表4－17　学校期における部活動などの定期的活動の実施者（一般愛好者）

		小学	中学	高校	大学
陸上	男	34.3% (47)	77.4% (106)	74.5% (102)	48.2% (66)
	女	5.5% (5)	16.5% (15)	12.1% (11)	5.5% (5)
水泳	男	23.3% (17)	58.9% (43)	49.3% (36)	27.4% (20)
	女	6.6% (6)	36.3% (33)	29.7% (27)	7.7% (7)
テニス	男	17.3% (17)	57.1% (56)	60.2% (59)	40.8% (40)
	女	20.0% (14)	42.9% (30)	41.4% (29)	15.7% (11)
ｿﾌﾄﾎﾞｰﾙ	男	44.7% (63)	75.9% (107)	51.1% (72)	9.9% (14)
	女	35.7% (10)	75.0% (21)	60.7% (17)	3.6% (1)
ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	女	21.2% (38)	82.7% (148)	65.4% (117)	13.4% (24)

表4－18　学校期における部活動などの定期的活動の実施者（ニュースポーツ）

		小学	中学	高校	大学
ペタンク	男	25.0% (21)	38.1% (32)	23.8% (20)	6.0% (5)
	女	15.2% (22)	40.7% (59)	33.8% (49)	2.1% (3)
ｸﾞﾗﾝﾄﾞｺﾞﾙﾌ	男	22.2% (24)	34.3% (37)	20.4% (22)	4.6% (5)
	女	6.8% (6)	19.3% (17)	15.9% (14)	1.1% (1)
家庭ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ	女	15.6% (14)	62.2% (56)	52.2% (47)	4.4% (4)

活動者の差はほとんどなく，中学校期と大学期において，Bの所属率が上回っているという意外な結果が示された．

以下，特徴的な傾向をまとめてみよう．Bの小中学校期において，所属率が高い種目はソフトボールである．野球系では，児童期から組織スポーツが整備されていたことがうかがえる．バレーボール女子では，中学校期に83%という高い所属率を示している．テニス男性では，高校・大学期の所属率が多種目より高い．しかし，Aであるテニス男性の所属率は，Bよりさらに高いことがわかる．Bの中で，所属率が低いのは陸上女性と水泳女性である．小学・中学・高校・大学期のすべてにおいて，所属率は低い．すなわち，陸上女性と水泳女性は，中高年期になってから陸上や水泳の活動を始めたことがわかる．

次に，Cの学校期における部活動などの定期的活動の所属率をみてみよう(表4－18)．ペタンクとグラウンド・ゴルフのどちらの種目においても，学校期の所属率は低い．Bよりも低く，Aよりもさらに低いことがわかる．例外は，家庭バレーボールである．中学校期では6割強，高校期では5割強が部活経験者である．このように，Cの学校期の部活所属率は低く，スポーツを熱心に実施していなかった層であることが興味深い．

6．学校期における部活動などの定期的活動種目：大衆化型既成スポーツ参加者B，大衆化型ニュースポーツ参加者C

ここでは，中高年スポーツ愛好者のスポーツキャリアを検証する．各学校期において，どのようなスポーツ種目を経験してきたかを種目別にみて

表４－19　学校期における部活動などの定期的活動：陸上男子（N＝137）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	22	軟式野球
2位	8	陸上競技
3位	7	サッカー
4位	6	ソフトボール
5位	2	水泳競技
＜中学期＞		
1位	45	陸上競技
2位	22	軟式野球
3位	8	サッカー
4位	6	バスケットボール，バレーボール
6位	5	軟式テニス
7位	4	柔道
8位	2	水泳競技，バトミントン，卓球，相撲
12位	1	空手
＜高校期＞		
1位	51	陸上競技
2位	7	柔道，サッカー
4位	6	軟式野球
5位	4	バスケットボール
6位	3	軟式テニス，水泳競技，体操競技
9位	2	剣道，空手，卓球，ラグビー，バレーボール
14位	1	スキー，ハンドボール，バドミントン，硬式テニス，ボート·ヨット，その他の競技スポーツ
＜大学期＞		
1位	42	陸上競技
2位	4	スキー
3位	3	バドミントン
4位	2	バスケットボール，硬式テニス，軟式テニス，剣道，ラグビー，サッカー
10位	1	空手，水泳競技，軟式野球，その他の競技スポーツ

表４－20　学校期における部活動などの定期的活動：陸上女子（N＝23）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	2	陸上競技
2位	1	バドミントン，体操競技，ソフトボール
＜中学期＞		
1位	5	軟式テニス，バレーボール
3位	2	陸上競技，ソフトボール
5位	1	バスケットボール
＜高校期＞		
1位	3	バレーボール，硬式テニス
3位	1	バドミントン，水泳競技，バスケットボール，陸上競技
＜大学期＞		
1位	2	バレーボール
2位	1	軟式テニス，登山，バスケットボール

みよう．これまでの研究（山口，1994）により，性差が顕著なことから性別に分析する．

６．１　陸上競技男性

表４－19は，中高年の陸上競技男性のスポーツキャリアを示している．サンプル数は，137名である．

小学校期では，22名が軟式野球をしており，陸上競技はわずかに8名である．中学校期になると名が陸上競技を始めており，３人に１人が専門化が始まっている．高校期では51名，大学期では42名が陸上競技への専門化の継続がみられる．

その他では，多様な種目を経験してから，中高年期になって陸上競技へと「トランスファー」（移行）している．このように，中学校から高校にかけて，３人に１人が専門化されているが，残りは，

表４－21　学校期における部活動などの定期的活動：水泳男子（N＝73）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	6	軟式野球
2位	2	水泳競技，柔道
4位	1	ソフトボール，ランニング，サッカー，バレーボール，相撲 剣道，卓球
＜中学期＞		
1位	6	柔道，硬式テニス
3位	5	バスケットボール，水泳競技，陸上競技
6位	4	サッカー，軟式野球
8位	2	剣道，卓球，バレーボール
11位	1	軟式テニス，体操競技
＜高校期＞		
1位	6	硬式テニス，水泳競技，柔道
4位	5	陸上競技
5位	3	バスケットボール，バレーボール
7位	2	弓道・アーチェリー
8位	1	卓球，ボート・ヨット，ハイキング，ランニング，ボウリング
＜大学期＞		
1位	3	硬式テニス，空手，水泳競技
4位	2	バレーボール
5位	1	スキー，軟式野球，ゴルフ，弓道・アーチェリー，レスリング バスケットボール，登山，サッカー，その他の競技スポーツ

表４－22　学校期における部活動などの定期的活動：水泳女子（N＝91）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	1	陸上競技，ソフトボール，バスケットボール，軽い球技 エアロビクス
＜中学期＞		
1位	12	バレーボール
2位	4	卓球
3位	3	ソフトボール，硬式テニス，バスケットボール
6位	2	水泳競技，陸上競技
8位	1	体操競技，バドミントン，軟式野球，体操
＜高校期＞		
1位	6	バレーボール
2位	3	卓球，バスケットボール，ソフトボール，水泳競技
6位	2	弓道・アーチェリー
7位	2	弓道・アーチェリー，バドミントン，硬式テニス
10位	1	体操競技，軟式野球，ハンドボール
＜大学期＞		
1位	3	硬式テニス
2位	1	軟式野球，バドミントン，陸上競技，ゴルフ

中高年期になってから陸上競技を始めていることがわかる．

６．２　陸上競技女性

表４－20は，陸上競技女性のスポーツキャリア（N＝23）を示している．小学校期と中学校期に陸上競技を経験していたのは，わずか２名しかいない．中学校期の１位は，軟式テニスとバレーボール（各５名）であり，専門化が始まったのは中年期以降であると考えられる．おそらく，ジョギングなどから，競技へと専門化したものと推察される．

６．３　水泳男性

表４－21は，水泳男性のスポーツキャリア（N＝73）を示している．小学校期では１位が軟式野球（N＝６），中学校期の１位も柔道（N＝６）と硬式テニス（N＝６）である．中学期の２位に水泳が入っており，高校期では，６名が専門化されている．

小学校期での専門化が少ないのは，中高年愛好者が子どもの頃には，スイミングスクールが確立されていなかったことが影響しているかもしれない．水泳のAに関する調査（1997）の結果と同様に，水泳愛好者は，中年期以降に水泳を始めた「再社

表４－23　学校期における部活動などの定期的活動：テニス男子（N＝98）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	18	式野球
2位	4	卓球
3位	2	ソフトボール，剣道，硬式テニス
6位	1	サッカー，陸上競技
＜中学期＞		
1位	16	硬式テニス
2位	10	軟式テニス
3位	8	式野球
4位	7	卓球
5位	4	バスケットボール
6位	3	サッカー，陸上競技
8位	1	剣道，柔道，バレーボール，バドミントン，体操競技
＜高校期＞		
1位	20	硬式テニス
2位	6	バドミントン，軟式テニス
4位	5	硬式野球
5位	4	サッカー，卓球
7位	3	バスケットボール
8位	2	陸上競技，ラグビー
10位	1	ソフトボール，剣道，水泳競技，ハンドボール,バレーボール柔道，ハイキング
＜大学期＞		
1位	21	硬式テニス
2位	4	サッカー，バドミントン
4位	3	卓球
5位	2	柔道，スキー
7位	1	バスケットボール，ボート·ヨット，硬式野球，陸上競技

表４－24　学校期における部活動などの定期的活動：テニス女子（N＝70）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	7	陸上競技
2位	3	軽い球技
3位	2	ソフトボール
4位	1	バスケットボール
＜中学期＞		
1位	13	バレーボール
2位	7	硬式テニス
3位	4	陸上競技
4位	2	ソフトボール
5位	1	バドミントン，軟式テニス，バスケットボール
＜高校期＞		
1位	9	硬式テニス
2位	5	バレーボール
3位	3	ソフトボール，卓球
5位	1	エアロビクス，バドミントン，陸上競技，登山，ダンス，スキー
＜大学期＞		
1位	3	硬式テニス
2位	2	バドミントン
3位	1	ソフトボール，登山，バレーボール，エアロビクス，スキー

会化型」が多いことが明らかになった．

６．４　水泳女性

表４－22は，水泳女性のスポーツキャリア(N＝91)を示している．水泳へと専門化がみられるのは，中学校で２名，高校で３名しかいない．中学校や高校では，水泳以外の種目を経験しており，水泳男性と同様な結果がみられる．

６．５　テニス男性

表４－23は，テニス男性のスポーツキャリア(N＝98)を示している．小学校で，１位が軟式野球であ

表４－25　学校期における部活動などの定期的活動：ソフトボール男子（N＝141）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	35	軟式野球
2位	11	ソフトボール
3位	3	陸上競技，サッカー
5位	2	水泳競技，バスケットボール，体操競技
8位	1	スキー，卓球，剣道
＜中学期＞		
1位	58	軟式野球
2位	8	バスケットボール，バレーボール
4位	6	サッカー
5位	4	水泳競技，体操競技，陸上競技
8位	3	卓球，柔道
10位	2	スキー，軟式テニス
12位	1	硬式野球，硬式テニス，空手
＜高校期＞		
1位	26	軟式野球
2位	7	バレーボール
3位	6	柔道
4位	5	バスケットボール，陸上競技
6位	4	卓球
7位	3	水泳競技
8位	2	サッカー，剣道,硬式テニス，硬式野球
10位	1	バドミントン，空手，登山，スキー，ラグビー，ハンドボール 軟式テニス
＜大学期＞		
1位	6	軟式野球
2位	2	空手
3位	1	サッカー，硬式テニス，卓球，登山，硬式野球，バスケットボール

表４－26　学校期における部活動などの定期的活動：ソフトボール女子（N＝28）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	7	ソフトボール
2位	1	陸上競技，卓球，軽い球技
＜中学期＞		
1位	11	ソフトボール
2位	3	バレーボール，バスケットボール
4位	2	硬式テニス
5位	1	水泳競技，陸上競技
＜高校期＞		
1位	10	ソフトボール
2位	2	バスケットボール，硬式テニス
4位	1	体操競技，バレーボール，ハンドボール
＜大学期＞		
1位	1	バレーボール

り，専門化がみられるのはわずか２名である．

中学校では16名，高校で20名，大学で21名が専門化されており，約２割が学校時代にテニスへと専門化されている．Ａに関する調査(1997)では４割強が学校期に専門化されており，一般愛好者は学校卒業後にテニスを始めた者が多いことがわかる．

６．６　テニス女性

表４－24は，テニス女性のスポーツキャリア(N=70)を示している．中学校でテニスを始めた者は７名で，１割しかいない．高校で９名，大学で３名が部活動を経験している．

このように，学校期のテニス部経験は少なく，ほとんどが学校卒業後に，テニスへと専門化されたことがわかる．

６．７　ソフトボール男性

表４－25は，ソフトボール男性のスポーツキャリア(N=141)を示している．小学校の１位は，軟式野球で35名が経験している．中学校では，58名が

表４－27　学校期における部活動などの定期的活動：バレーボール（N＝179）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	11	ソフトボール
2位	10	陸上競技
3位	5	バレーボール
4位	3	水泳競技，軽い球技
6位	1	ダンス，硬式テニス，エアロビクス，サッカー ランニング，その他の競技スポーツ
＜中学期＞		
1位	102	バレーボール
2位	12	陸上競技
3位	10	バスケットボール
4位	7	硬式テニス
5位	5	ソフトボール
6位	4	体操競技，卓球
8位	1	スケート，スキー，水泳競技
＜高校期＞		
1位	88	バレーボール
2位	6	バスケットボール
3位	5	体操競技
4位	4	陸上競技，ソフトボール
6位	2	弓道･アーチェリー
8位	1	硬式テニス，スキー
＜大学期＞		
1位	8	バレーボール
2位	6	硬式テニス
3位	2	スキー
4位	1	ダンス，卓球，ハイキング，弓道・アーチェリー， バドミントン，水泳競技，登山，ボウリング

軟式野球の部活に所属している．

このように，軟式野球の経験者が職場や地域においてソフトボールへと移行した「トランスファー組」が４割である．もうひとつの特徴は，ソフトボール以外の様々な種目の経験者が多いことである．学校期にスポーツ好きであった者が，共通に楽しめる活動であるソフトボールを，仲間とともに楽しんでいる姿がうかがえる．

６．８　ソフトボール女性

表４－26は，ソフトボール女性のスポーツキャリア（N＝28）を示している．小学校では７名，中学校では11名，高校でも10名が部活経験者である．このように約４割が部活動というバックグラウンドをもっていることが特徴である．

６．９　バレーボール女性

表４－27は，バレーボール女性のスポーツキャリア（N＝179）を示している．中学校時代にバレーボール部活を経験した者が，102名に上っている．高校ではやや少なくなるが，88名が部活経験者である．

このように６割弱が，学校時代にバレーボール部活の経験者であり，他種目にない高い所属率である．バレーボール以外にも，バスケットボールや陸上競技など，さまざまな愛好者が中年期において，仲間と楽しめるバレーボールを行っている．

６．10　ペタンク男性

表４－28は，ペタンク男性のスポーツキャリア(N＝84)を示している．学校期にペタンクへ専門化された者は，皆無である．中学校において，他種目の部活経験者が約３割であり，残りのスポーツ経験は少ない．

これまでみたように，ペタンクというニュースポーツ経験者は，過去のスポーツ経験が少なく，スポーツにあまり縁がなかった層が，高齢期になってから専門化されたことを裏づけている．

６．11　ペタンク女性

表４－29は，ペタンク女性のスポーツキャリア（N＝84）を示している．男性と同様に，学校時

表４－28　学校期における部活動などの定期的活動：ペタンク男子（N＝84）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	8	軟式野球
2位	7	陸上競技
3位	1	バレーボール，軟式テニス，バスケットボール，剣道，卓球
＜中学期＞		
1位	9	軟式野球
2位	6	陸上競技
3位	4	バスケットボール
4位	3	剣道
5位	2	バレーボール，軟式テニス
7位	1	硬式テニス，サッカー，インディアカ，ボート・ヨット，水泳競技
＜高校期＞		
1位	4	陸上競技
2位	3	硬式野球，硬式テニス，軟式野球
5位	1	サッカー，卓球，バスケットボール，バドミントン，スケート，柔道
＜大学期＞		
1位	1	バスケットボール，バドミントン，バレーボール，ラグビー，陸上競技

表４－29　学校期における部活動などの定期的活動：ペタンク女子（N＝84）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	10	陸上競技
2位	4	バレーボール
3位	2	スキー，ソフトボール
5位	1	水泳競技，体操競技，硬式テニス
＜中学期＞		
1位	23	バレーボール
2位	10	ソフトボール
3位	6	バスケットボール，陸上競技
5位	5	硬式テニス
6位	4	卓球
7位	3	軟式テニス
8位	2	体操競技
＜高校期＞		
1位	14	バレーボール
2位	8	硬式テニス
3位	7	バスケットボール，陸上競技
5位	5	ソフトボール
6位	4	卓球
9位	2	水泳競技
10位	1	サッカー，ハンドボール
＜大学期＞		
1位	2	バレーボール
2位	1	登山

代にペタンクを経験した者はいない．

しかし，中学校時代には，バレーボールやソフトボール，バスケットボールなど，さまざまなスポーツを経験した者がみられる．３人に２人が中学時代に部活動を経験しており，かつてスポーツ好きであった女性が，高齢期に入ってからペタンクを始めたことがわかる．

６．12　グラウンド・ゴルフ男性

表４－30は，グラウンド・ゴルフ男性のスポーツキャリア(N =108)を示している．ペタンク愛好者と同様に，学校時代にグラウンド・ゴルフを経験していた者はいない．

さらに，中学校で他の種目の部活経験者は３割に充たない．このように，学校時代にはスポーツとあまり縁がなかった層が，高齢期になってからグラウンド・ゴルフという誰にでもできるニュースポーツの規則的実施者へと変容したことがうかがえる．

表4－30　学校期における部活動などの定期的活動：グランド・ゴルフ（N＝108）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	10	軟式野球
2位	7	陸上競技
3位	2	剣道
4位	1	バレーボール，体操競技，卓球，ソフトボール
＜中学期＞		
1位	9	陸上競技
2位	8	軟式野球
3位	5	剣道
4位	3	体操競技，柔道
6位	2	サッカー，硬式テニス，卓球
9位	1	バスケットボール，水泳競技，バレーボール
＜高校期＞		
1位	3	硬式テニス，陸上競技，硬式野球
4位	2	柔道，サッカー，水泳競技，軟式野球，ハンドボール
9位	1	バスケットボール，卓球，体操競技
＜大学期＞		
1位	1	サッカー，バスケットボール，卓球，陸上競技，硬式野球

表4－31　学校期における部活動などの定期的活動：グランド・ゴルフ女子（N＝88）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	3	陸上競技
2位	2	バレーボール
3位	1	体操競技
＜中学期＞		
1位	9	バレーボール
2位	3	陸上競技
3位	1	バスケットボール
＜高校期＞		
1位	8	バレーボール
2位	3	硬式テニス
9位	1	卓球，ハンドボール，陸上競技
＜大学期＞		
1位	1	バレーボール

表4－32　学校期における部活動などの定期的活動：家庭バレーボール（N＝90）

順位	N	種目
＜小学期＞		
1位	6	陸上競技
2位	3	ソフトボール
3位	2	バレーボール
4位	1	ハンドボール，体操競技，卓球
＜中学期＞		
1位	19	バレーボール
2位	12	ソフトボール
3位	6	陸上競技
4位	5	バスケットボール
5位	4	卓球，軟式テニス
7位	3	体操競技
8位	2	硬式テニス
9位	1	バドミントン
＜高校期＞		
1位	12	バレーボール
2位	9	硬式テニス
3位	6	ソフトボール
4位	5	バスケットボール
5位	4	卓球
6位	3	バドミントン，陸上競技
8位	2	体操競技
9位	1	軟式テニス，空手，ハンドボール
＜大学期＞		
1位	1	卓球，スキー，バスケットボール，バドミントン

6．13　グラウンド・ゴルフ女性

表4－31は，グラウンド・ゴルフ女性のスポーツキャリア(N =88)を示している．中学時代の部活経験者は，わずか15%であり，残りは定期的なスポーツ活動をしていない．グラウンド・ゴルフの学校時代の経験も皆無であり，男性結果と同様に，高齢期になってから規則的なスポーツ活動として，手軽な種目を始めたといえよう．

6．14　家庭バレーボール女性

表4－32は，家庭バレーボール女性のスポーツキャリア(N =90)を示している．バレーボール経験者は，中学校期に19名で約2割しかいない．

前述したバレーボール愛好者では，6割が部活経験者であったことを考えると，過去のバレーボール部活経験者は顕著に少ないことがわかる．

中学校では，バレーボール以外の部活経験者が多く，中年期において，さまざまなスポーツ経験をもつものが，手軽な家庭バレーボールを地域で楽しんでいることがわかる．

7．ま　と　め

中高年のスポーツ愛好者の過去のスポーツライフを検証してきた結果は，下記のようにまとめることができる．

1）陸上競技女性や水泳，およびテニスの中高年愛好者では，40歳頃が転機になり，活動頻度が高くなっている．

2）ソフトボール愛好者は，すべてのライフステージにおいて活動頻度が高く，一貫して週末に活動を行っている．

3）水泳やテニスを愛好している女性は，「週3日型」が中心である．

4）ペタンクやグラウンド・ゴルフ愛好者は，定年退職というライフイベントをきっかけに，高齢期になってから規則的活動を始めている．また，ペタンクやグラウンド・ゴルフというニュースポーツへと再社会化されている．

5）バレーボールや家庭バレーボール愛好者は，30歳代から50歳代までが中心で，中年期の愛好者が多い．高齢期には参加者が激減し，活動から離脱したことがわかる．

6）一般愛好者は，高度化型競技志向スポーツ参加者Aに比べて，日常的な活動頻度は少ない．Aは週3日型が中心であるが，大衆化型既成スポーツ参加者Bでは週1日型が多い．しかし，女性のBでは，水泳やテニス，バレーボールのように週3日型の方が多い．

7）大衆化型ニュースポーツ参加者Cは，他の種目やトップアスリートと比較して，高齢期になってから，専門化されたことがわかる．

8）BはCに比べて，中年期の活動頻度が高い．Aは，さらに活動頻度が高く，中年期における「のめり込み」減少がうかがえる．

9）スポーツキャリアにおいては，学校時代からの部活経験者は，Aより一般愛好者は少ない．

10）陸上競技や水泳，テニスの一般愛好者は，学校卒業後に，それぞれの種目へと専門化された者が多い．

11）ソフトボールやバレーボール愛好者は，学校時代には野球や他の部活経験者であった者が，共通してプレイできるソフトボールやバレーボールを中年期において楽しんでいる．

12）ペタンクやグラウンド・ゴルフというニュースポーツ愛好者は，学校時代にそれぞれの種目の部活動を経験していない．グラウンド・ゴルフでは，一般的な部活経験者も少なく，スポーツとは縁のなかった者が高齢期に専門化されたことがわかる．

参考文献

1）山口泰雄，中高年者のスポーツへの再社会化に関する研究．平成5年度文部省科学研究費（一般　研究C）研究成果報告書，1994．

2）山口泰雄，中高年者の運動実施：現状と課題．体育の科学47(9)：674-680，1997

5．スポーツ活動に対する「のめり込み」意識

報告者　菊　幸一[1)]

本節の目的は，昨年の調査対象である中高年の全国大会上位入賞者（高度化型競技志向のスポーツ参加者）Aと，今年度の調査対象である同じ中高年の大衆化型既成スポーツ種目参加者B，および大衆化型ニュースポーツ参加者Cの各スポーツ活動に対する意識や態度を総合して，当該スポーツ活動に対する全般的な「のめり込み」[1)]の度合いとして分析し，三者の「のめり込み」意識の比較を行い，その特徴を明らかにすることである．

三者のスポーツ意識は，一般的には没頭度の差異を有意に示すと予測されるが，その内容はさまざまな角度からとらえられるであろうし，各種目によっても異なる様相を示すものと思われる．われわれは，ややもすると既存種目のチャンピオン志向の強いスポーツ参加者の意識の特徴として，のめり込み度が他の二者に比べて高く，ニュースポーツ種目参加者のそれは低いであろうと予測するが果たしてそうであろうか．また，各のめり込み度の内容によって，三者の関係は相対的にどのように変化するのであろうか．

そこで，本研究では，すでに多々納，松尾ら[2)]が社会体育領域におけるボランティア指導者の指導に対する没頭度，あるいはのめり込み度として用いた内容を参考にして，以下の8つの「のめり込み」項目を設定した．

1）生きがい
「スポーツ活動は最高の生きがいである」
2）出費許容
「スポーツ活動に対する多少の出費はやむをえない」
3）練習優先
「仕事や家のことと練習が重なったとき，練習を優先する」
4）周囲からの期待
「周囲は自分が勝つことを期待している」
5）試合集中
「試合が近づくと試合のことで頭がいっぱいになる」
6）練習継続
「決められた練習は絶対に休むべきでない」
7）同一技能志向
「技能レベルの違う人とは練習したくない」
8）身内意識
「クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある」

以上の質問項目に対して，「非常にそう思う」「まあそう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4段階尺度により回答を求めた（「無回答」については，図の中で「全く思わない」の右端に表示した）．なお，三者が示す割合には，χ^2による検定が施された．

1．各形態別にみた「のめり込み」意識

1．1　スポーツ活動への生きがい（図5－1）

図5－1より，各形態とも「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるといずれも9割前後の割合を示している．しかし，「非常にそう思う」のみを比較すると，明らかにC(35.3%)がB(26.9%)を上回っており，ニュースポーツ参加者の生きがい度が比較的高いことがわかる．それに対して，既存種目の大衆化型参加者は，他のA，Cと比べて，比較的生きがい度が低い傾向にある．

1．2　スポーツ活動に対する出費の許容度（図5－2）

図5－2より，各形態とも「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとほぼ95%前後の割合で出費はやむをえないと思っている．しかし「非

1）奈良女子大学

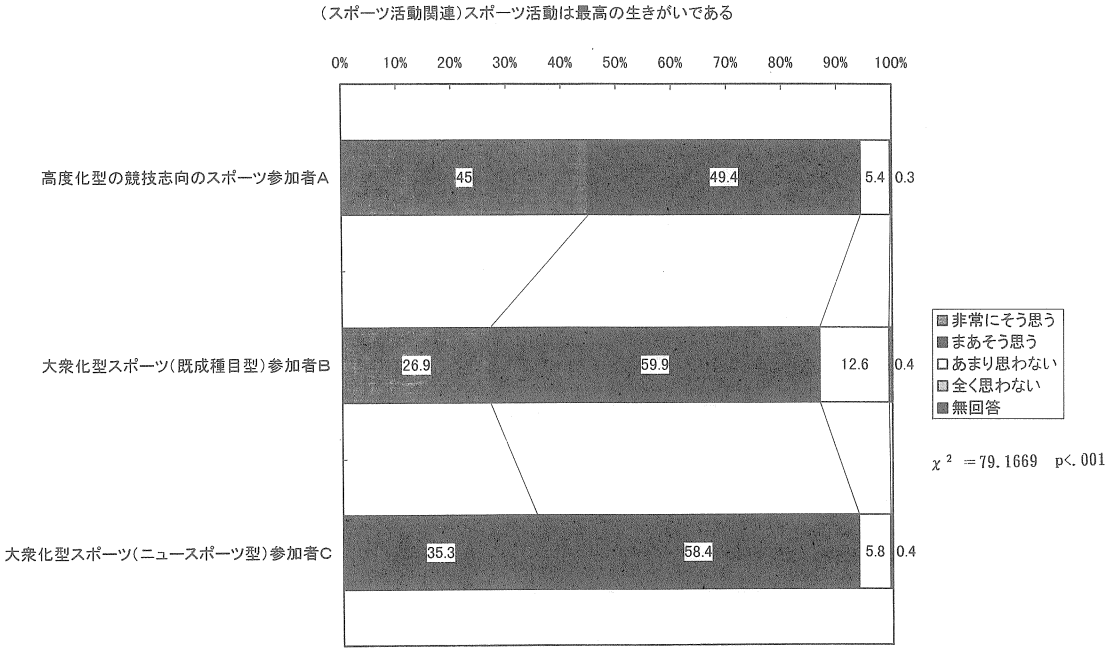


図５－１　スポーツ活動への生きがい

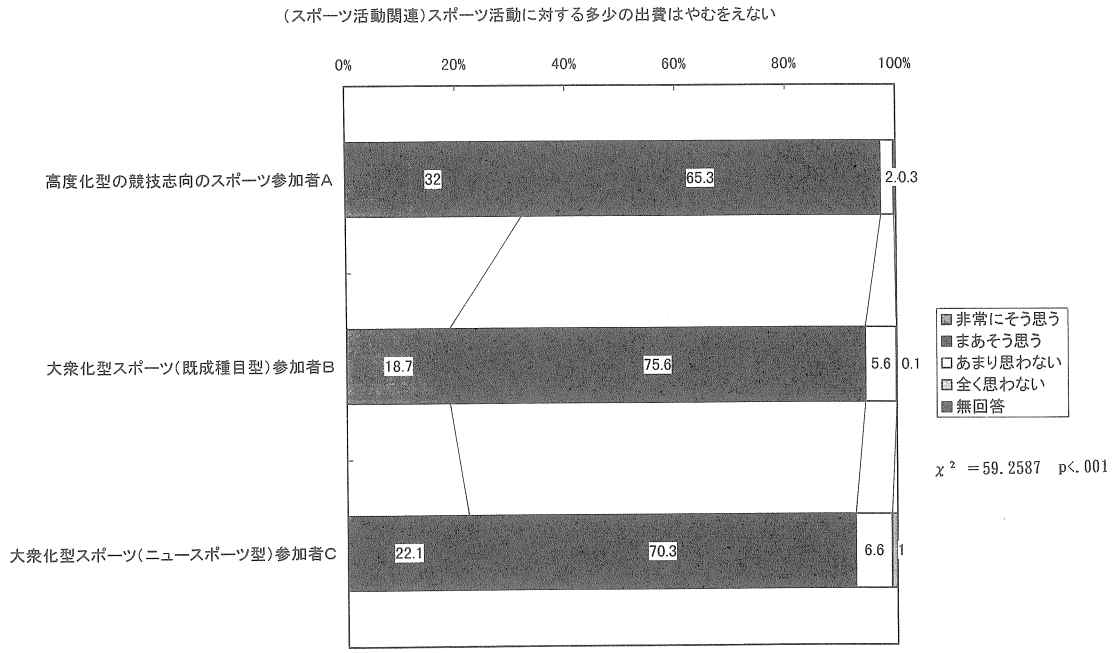


図５－２　スポーツ活動に対する出費の許容度

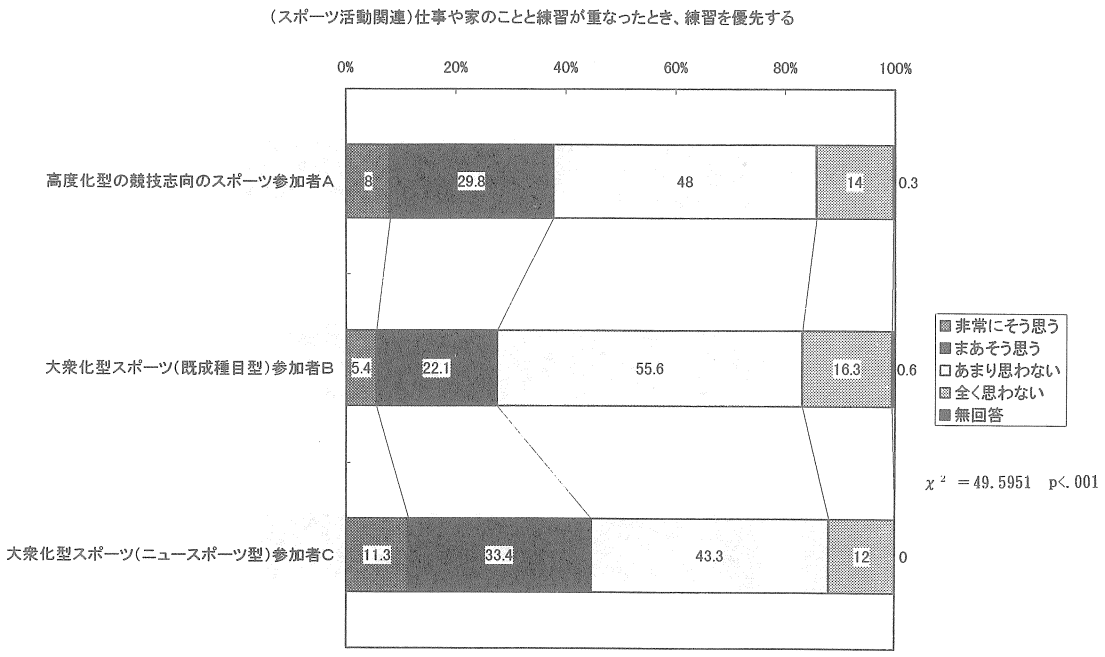


図５－３　練習への優先意識

常にそう思う」だけを比べるとAが32%と最も高く，次にC（22.1%），B（18.7%）の順になっている．「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせ全般的な傾向としてはわずかながらAの出費許容度は高いが，むしろどの形態においても共通にスポーツにはお金がかかるものだという認識がみられることが理解される．また，ここでもニュースポーツ参加者が既成種目の大衆型スポーツ参加者に比べ，スポーツへの出費を許容する傾向がみられることから，意外とのめり込み度が高い傾向がうかがえる．

１．３　練習への優先意識（図５－３）

図５－３より，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると，練習への優先意識が最も高いのはC（44.7%）であり，次にA（37.8%），B（27.5%）の順になっている．「非常にそう思う」だけを取り上げてみても同じ順位であり，ニュースポーツ参加者の練習への優先意識が非常に高いことが理解される．

ただし，この意識は仕事や家の事柄がどの程度参加者の役割意識や役割期待に反映される年代であるかによっても異なってくると考えられ，それを明らかにするためには参加者の職業や年代とのクロス分析が必要になってくる．しかし，それにしても大衆型と一般に考えられているニュースポーツ参加者Cの練習への優先意識が，最も高いであろうと予測されていた高度化型競技志向の参加者Aより全般的に高い傾向にあるのは意外であり，Cレベルの参加者のスポーツに対するのめり込み度が非常に高い傾向を示しているといえるであろう．

１．４　周囲からの勝利への期待（図５－４）

図５－４より，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると，予想通りAが58.8%と６割近くを占め，周囲からの勝利への期待を強く意識し，プレッシャーになっていることが理解される．同じく，C（38.1%），B（32.5%）の順であるが，ここでもニュースポーツ参加者Cの意識が高い傾向がうかがえる．同じ大衆型でも大会の規模やレベルによってもその意識の度合いが異なってくることが予測されるが，今回のB，Cの参加者はいずれのほとんどが県レベルの大会参加者であり，

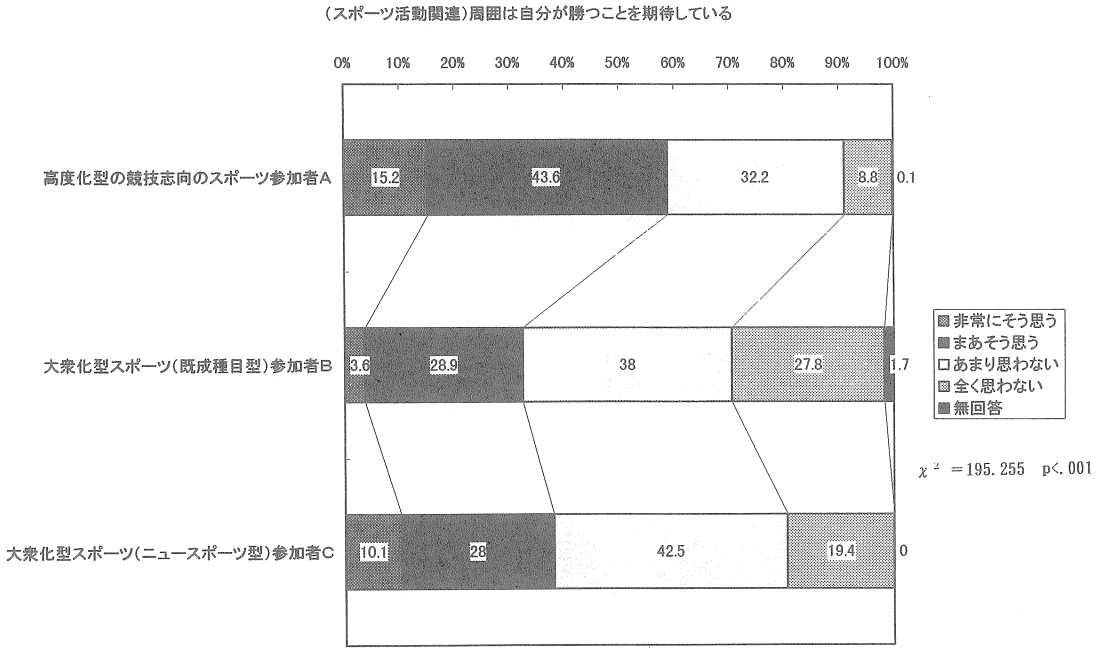


図５－４　周囲からの勝利への期待

そこでの差異は考えにくい．したがって，ニュースポーツ参加者が高度化型スポーツへの志向を徐々に高め，その結果として周囲からの勝利への期待を感じている様相がうかがえる．

１．５　試合への意識の集中（図５－５）

図５－５より，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとＡは５割の参加者が試合への意識の集中が高まることを示している．次にＣ（34.8％），Ａ（31.5％）の順で続き，ここでもＡよりＣの参加者の意識が高い傾向が示されているが，その差はさほど大きくはない．試合に対する緊張度や集中度といった点からは，参加種目それ自体への日常的な参加意識の質的レベルや練習レベルの認知度よりは，大会レベルの高さ（市・県・全国大会各レベル）がより関係していることが予測される．

１．６　練習継続への信念（図５－６）

図５－６より，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると，いずれのレベルの参加者においても５割を越える参加者が「決められた練習は絶対に休むべきではない」と思っているが，その順位はＣ（62.9％），Ｂ（55.1％），Ａ（50.8％）の順となっており，予測とは全く逆の結果が出ている．

高度化型Ａが他の大衆化型Ｂ，Ｃに比べ練習継続への信念がさほど高くない理由として，練習方法への習熟度や練習に対する自律的，自主的な態度の醸成が考えられるのかもしれない．つまり，他者からの練習の取り決めや統一的な練習に対する拘束がなされなくても練習はできるという意識の程度が高いということである．また，外的な要因としては，職業や年代を規定要因とする練習時間の設定に対する自由度の程度が考えられよう．

いずれにしても，ここで注目すべきなのはやはりニュースポーツ参加者Ｃの練習継続への信念の高さであり，決められた練習に対する勤勉なまでの態度である．これをもう少し深読みすれば，スポーツ参加それ自体が，ある種の絶対性を持った「仕事」と類似した内容として受けとめられているとも考えられ，このレベルの参加者の意識やのめり込み度をもう少し多様な角度から分析する必要があることを示していると言えよう．

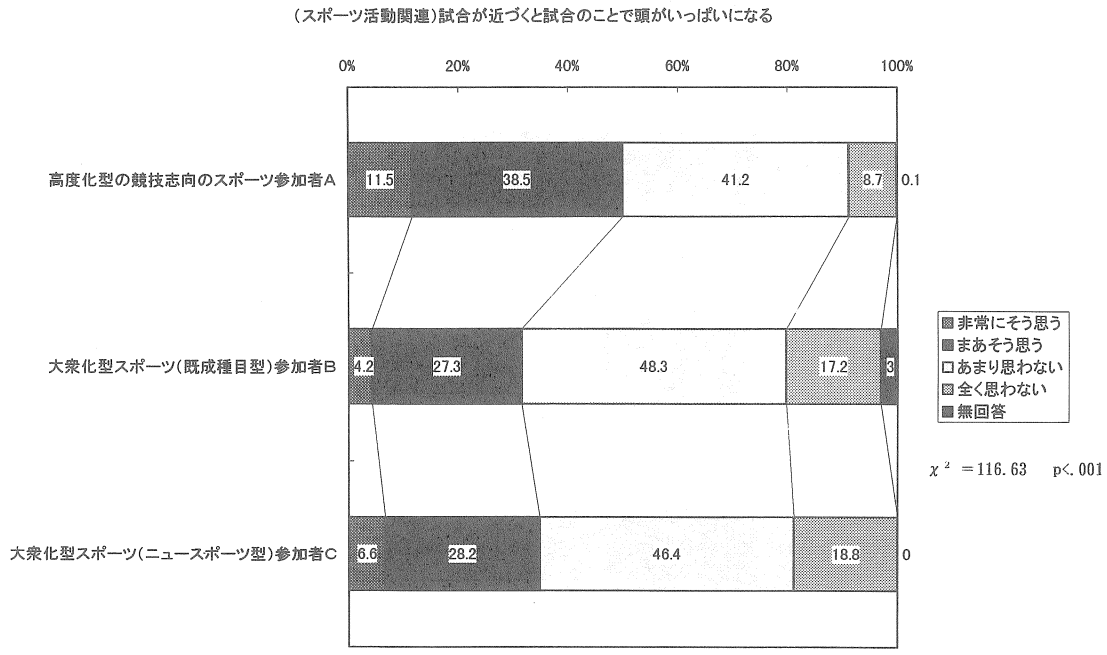


図５－５　試合への意識の集中

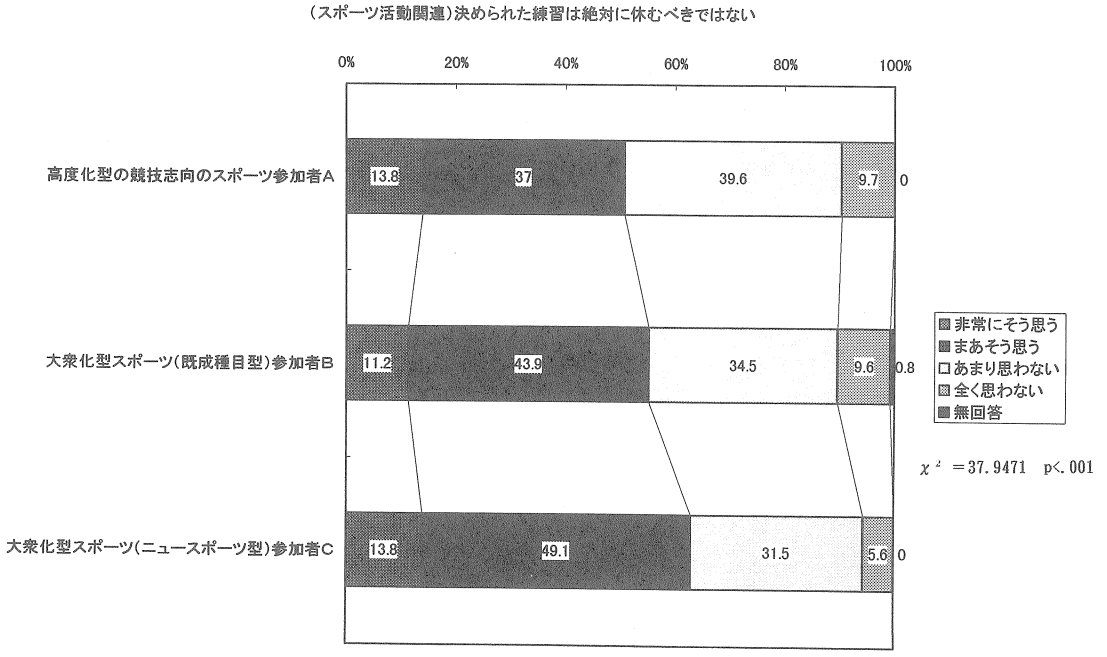


図５－６　練習継続への信念

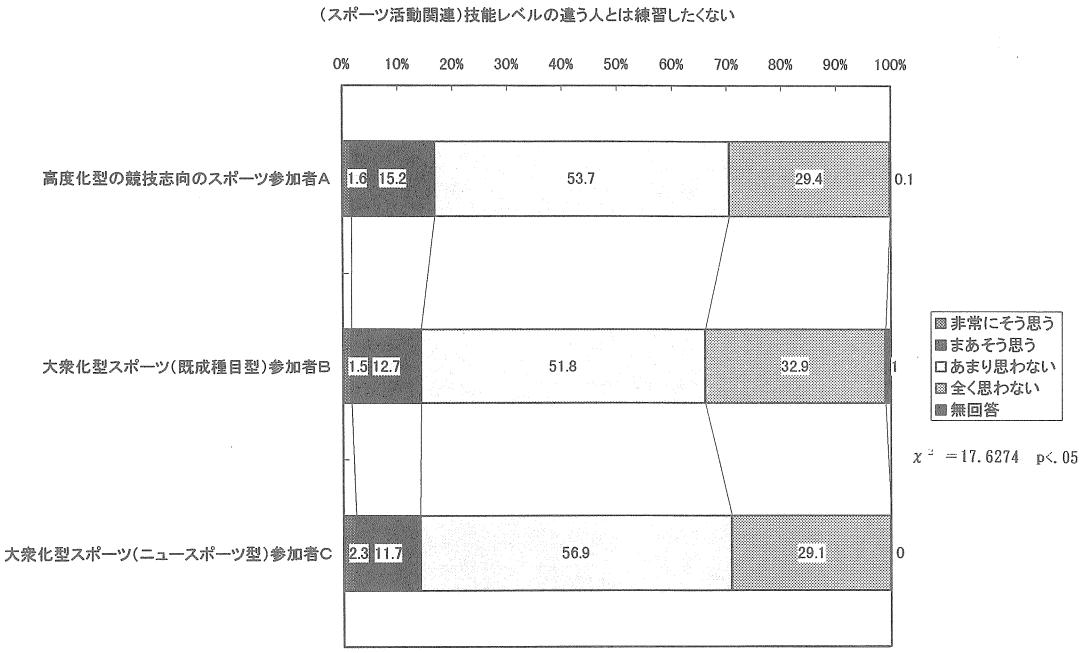


図５－７　同一技能レベルへの志向

１．７　同一技能レベルへの志向（図５－７）

図５－７より，練習相手として技能レベルの違う人を嫌う傾向は，A，B，Cいずれの形態においてもさほど差異はみられない．確かに，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせるとAは16.8％，Bは14.2％，Cは14.0％であり，AとB，Cとの間には若干の差異は認められるものの($p<.05$)，中高年のスポーツ参加者の全般的傾向としては対人関係における技能レベルの差異が強く意識されていないことがうかがわれる．

しかし，この結果はあくまで質問紙法によるものであるので，一般的に妥当な価値判断として働く信念の影響を受けやすい質問内容については，それがどの程度普段の意識を反映する回答になるのかについて，その限界も考慮しておく必要はあるだろう．また，日本のスポーツクラブの現状として小規模人数型の単一種目型クラブが増加している現状が指摘されているが[3]，本調査のクラブ所属対象者は実際の大会への参加者であるため，各形態ごとにすでに技能レベルの差異をさほど意識しない程度に結果として均一化，同質化されているクラブ参加者であるとも考えられる．いずれにしても，質問紙法の限界を越える事例研究やフィールド・ワークを実施したり，あるいは各レベルの参加者別クラブの生成，発展過程を詳細に分析していく必要があるように思われる．

１．８　仲間への身内意識（図５－８）

図５－８より，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると各レベルとも６割から７割程度身内意識を感じており，集団への帰属意識が高いことが示されている．とくにCでは，「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせると63.9％と３つの形態の中ではもっとも低い割合であるが，「非常にそう思う」が12.2％と高度化型Aの13.5％に近い割合を示しており，明らかに既存種目の大衆化型Bの 6.4％とは有意な差を示している．ここでもニュースポーツ参加者の意識の中に高度化型のそれに近い意識が偏在していることが確認される．より詳細なCレベルにおける各種目間の意識の差異や年代，スポーツ歴等の要因を考慮に入れる必要はあるが，大衆化型と思われるニュースポーツ参加者の中に帰属集団に対する多様な仲間意識が混在していると考えられるのではなかろうか．

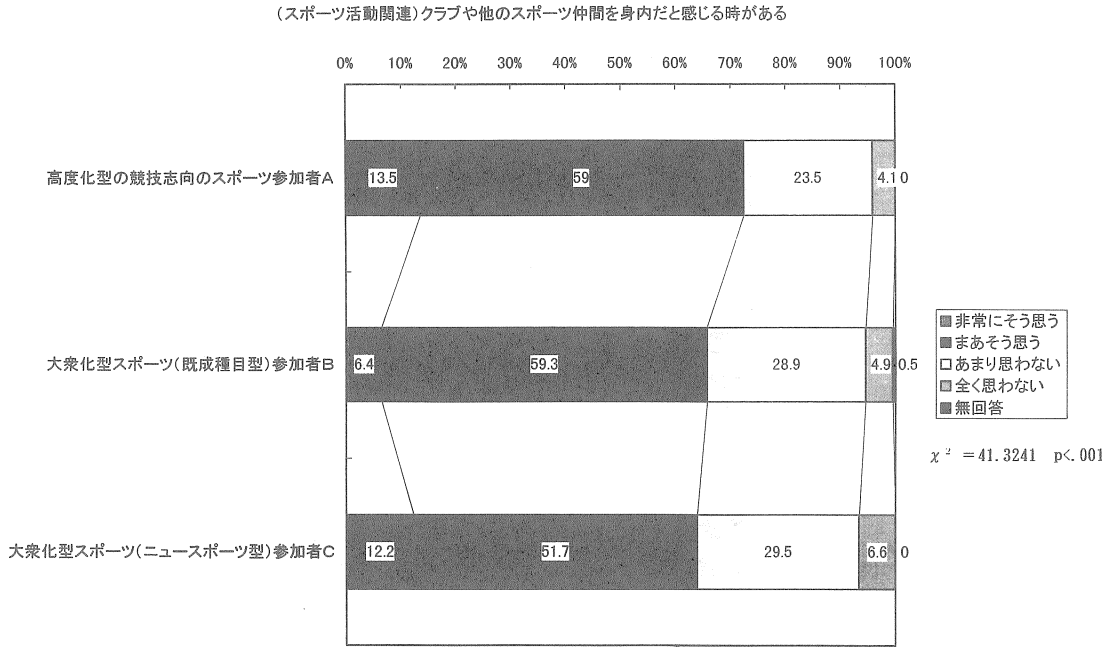


図５－８　仲間への身内意識

また，仲間や他者に対する意識を規定するのは結果的にはクラブやチームの凝集性の程度であろうが，それが種目や勝利志向のレベルとどの程度関連し，あるいは関連しない程度ではそれぞれの集団の雰囲気や志向性がどのように形成されてきたのか，さらにはいつ頃からそのスポーツに社会化されていったのかなどの経年的な状況について，フィールドワークをもとにした事例研究が必要であろう．

２．ま　と　め

１）本研究の対象となった高度化型競技志向の参加者Ａ，同じく既存種目の大衆型参加者Ｂ，大衆型ニュースポーツ参加者Ｃのどの形態における参加者も，スポーツ活動に対して強い生きがいを感じている．

２）全体的には三者とも，スポーツ活動に対する出費の許容，身内意識などに高い「のめり込み」意識が共通にみられる．

３）全体的に三者を比較すると，Ａ→Ｃ→Ｂの順でのめり込み意識が高くなっている様相がうかがえる．しかし，練習優先や練習継続への意識はＣが最も高い傾向にあり，ニュースポーツ参加者が既存種目の高度化型競技志向の参加者を上回る練習に対するのめり込み意識を持っていることが理解される．

４）全体的に三者とも，スポーツ活動仲間に対する同一技能志向は少ない．しかし，このことは仲間に対するさまざまな技能レベルを許容するといった技能に対するのめり込み意識の低さを示しているというよりも，すでに所属するクラブが技能的に均質化されており，あまり技能の差異を心配する状況にはない結果としても受けとめることができる．この点については，質問紙法の限界を補う所属集団に対するフィールド・ワークや歴史的検討が必要であろう．

５）いずれにしても，個々の内容の違いは若干はみられるものの，のめり込み意識の比較からニュースポーツ参加者を単なる大衆型参加者と単純にとらえることはできない．そこでは全般的に高度化志向と大衆化志向が混在し，その多様化が顕著にみられることは確かであるが，どちらかと言えば高度化型参加者の意識に近い「準競技者」的なのめり込み意識を持つ方向にある

と言えよう．このような傾向は，われわれが平成３年度の全国スポーツ・レクリエーション祭の参加者に対する調査[4]で明らかにしたのと同様な意識が，地方の大会のニュースポーツ参加者にもみられることを示していると言えよう．

6）また，Ｃを中間的な形態とすれば，ＡとＢには同じ既存種目参加者でもより明確なのめり込み意識の差異がみられることになり，中高年のスポーツ参加者の同一種目参加者を比較しても，そのかかわり方は多様になってきていることがうかがえる．

7）とりわけ，ニュースポーツ参加者の多様化をその意識調査によってのみ明らかにすることには限界があり，またその組織化の方向性を探るためには，今後，集団の組織的特性をその背後にある歴史的，通時的な視点でとらえるとともに，事例研究をベースとしたフィールド・ワークの必要性が指摘される．

注および文献

1）多々納，松尾ら[2]の「のめり込み」に関する定義は，本来ボランティア指導者の指導に対する過度の没頭が彼らの日常生活にまで及び，何らかの生活支障を引き起こしているとの考え方から導き出された概念である．しかし，本研究では，中高年スポーツ参加者のスポーツに対する没頭の程度といった意味合いで用いられており，生活支障との関連はあまり意識されていない．

2）多々納秀雄･松尾哲矢，『社会体育領域におけるボランティア指導者の実態と生活支障に関する調査（その１）』，福岡市教育委員会，1988.

3）西島尚彦,「我が国のスポーツクラブの現状と課題」,『スポーツと健康』，27-6:13-16，1995.

4）財）日本体育協会，「No.Ⅶ中年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究」,『平成３年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告－第１報－』，1992.

6．QOL・余暇観・余暇活動の状況

報告者　菊　幸一[1)]

本節では，中高年の各形態別参加者（A，B，C）における生活の充実度（Quality of Life, QOL），余暇観，余暇活動の状況を見ていく．また，これらの状況と先の第5節で考察した「のめり込み」意識との関係から，各形態別に何らかの特徴が見出せるかどうかも併せて検討してみたい．

1．QOL（Quality of Life）［図6－1～図6－9］

本研究の調査では，主にQOLを測定する項目として生活者自身の質を問題とし，その中でも生活者の意識に焦点を当ててQOLの程度をみようとした[1)]．生活者の意識には，大きく分けてその対象が個人的ニーズにかかわる満足感，幸福感を示す「個人的意識」と社会的ニーズにかかわる満足感，安定感を示す「社会的意識」が考えられるが，本研究では両者の意識を表わす質問項目を設定して中高年スポーツ参加者におけるQOLの全体像を得ようとした[2)]．

図6－1～図6－9までが，QOLの尺度項目について，各形態別に得られた結果である．

「非常にそう思う」「まあそう思う」を合わせて全体的にその割合をみてみると図6－2の「現在の自分は，他人に対して誇りがもてると思う」（他人に対する誇り）のBとC，および図6－9の「私は，生涯の中で『これだけはやりとげたい』と思うものがある」（人生目標達成への意欲）のすべての形態を除いてほぼ8～9割に達し，非常に高いQOLの程度を示していることがわかる．

さて，参加レベル別にみてみると，「非常にそう思う」だけを比較した場合，全般的には既存種目の大衆化型スポーツ参加者Bの割合が他のA，Cに比べて低い傾向が見受けられる．先の「のめり込み」意識との関係で考えると，全体的にはその意識の高さと正の相関関係があるように思われる．スポーツ参加の形態では，多少なりとも高度化志向の傾向がQOLと結びついていることから，スポーツに対する価値意識それ自体は一元化されている傾向が強いと考えられよう．だからこそ，多様なスポーツに対するかかわり方それ自体がすべてQOLの高さに直接反映されず，その結果として，とくにAとBのQOLの差になって現れていると考えることもできる．また，この点については，図6－9の「人生目標達成への意欲」にも高度化志向との関連で端的に示されているが，Cの割合の低さは参加者の年代や職業との関連でさらに考察する必要があるだろう．

しかし，ニュースポーツ参加者であるCのQOLが比較的高い傾向を示すのは，のめり込み意識の多様化を反映したものと考えると，それぞれのかかわり方を十分に保障することこそがQOLの高さに関連していく可能性をもつものとも考えられる．

このようなことから，QOLの水準をすべての参加形態において平等に保障していくためには，スポーツ活動のプレイにおけるフローを保障していくための多様化への価値意識とその承認，あるいはそれらを多様なままに生かしながら組織化していく柔らかいスポーツ意識を醸成していくことが今後ますます必要になってくるように思われる．

2．余暇観［図表なし］

「仕事をするために余暇をとる」という仕事重視型は，B－18.9%，A－11.9%，C－7.8%の順であり，既存種目の大衆化型スポーツ参加者に比較的多い傾向がみられた．これに対して「余暇を楽しむために仕事をする」という余暇重視型は，A－30.1%，C－29.5%，B－24.0%の順となっており，逆にA，Cの参加形態に比較的多い傾向がある．全参加形態を通じて5割程度の参加者が

1）奈良女子大学

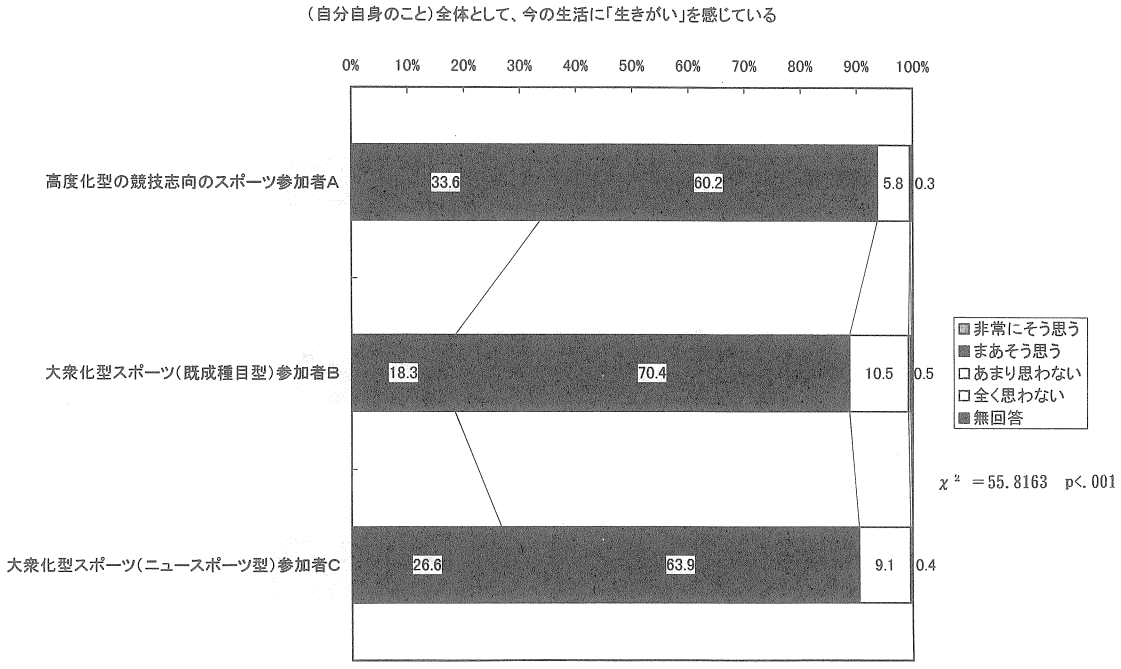


図６－１　QOL－生きがい

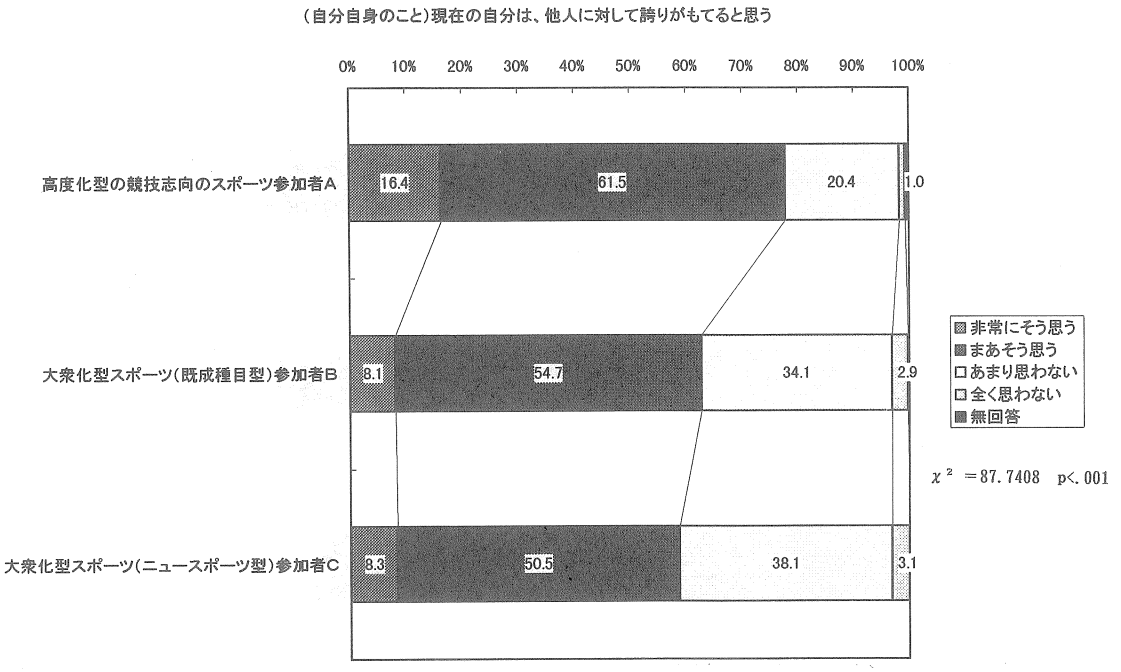


図６－２　QOL－他人に対する誇り

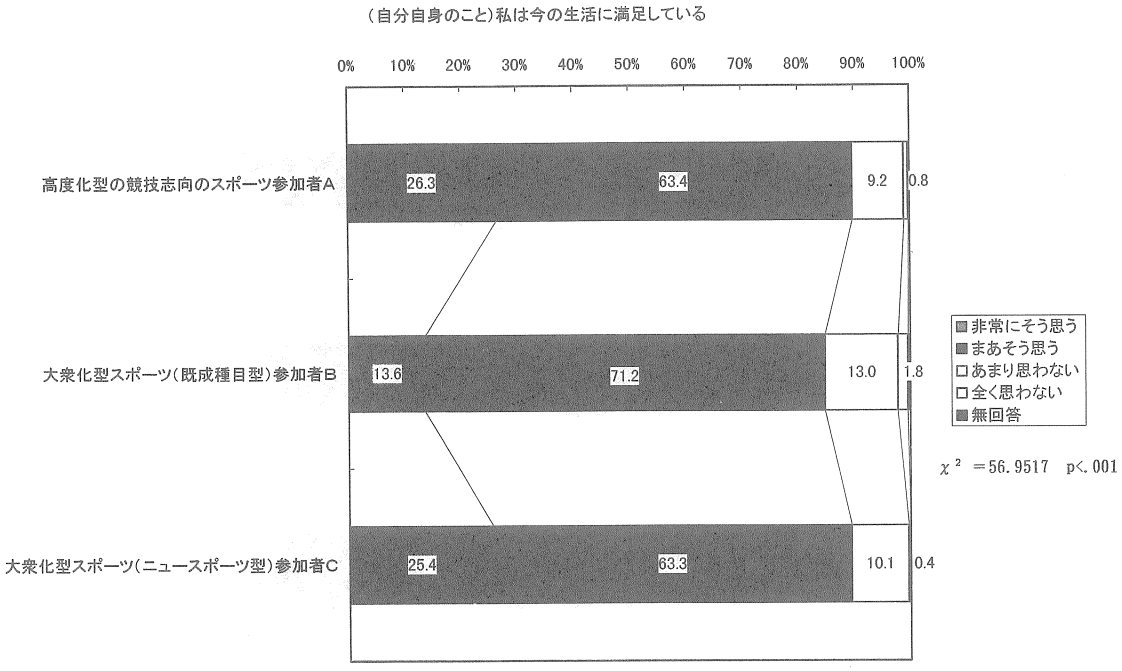


図 6 － 3　QOL－生活満足度

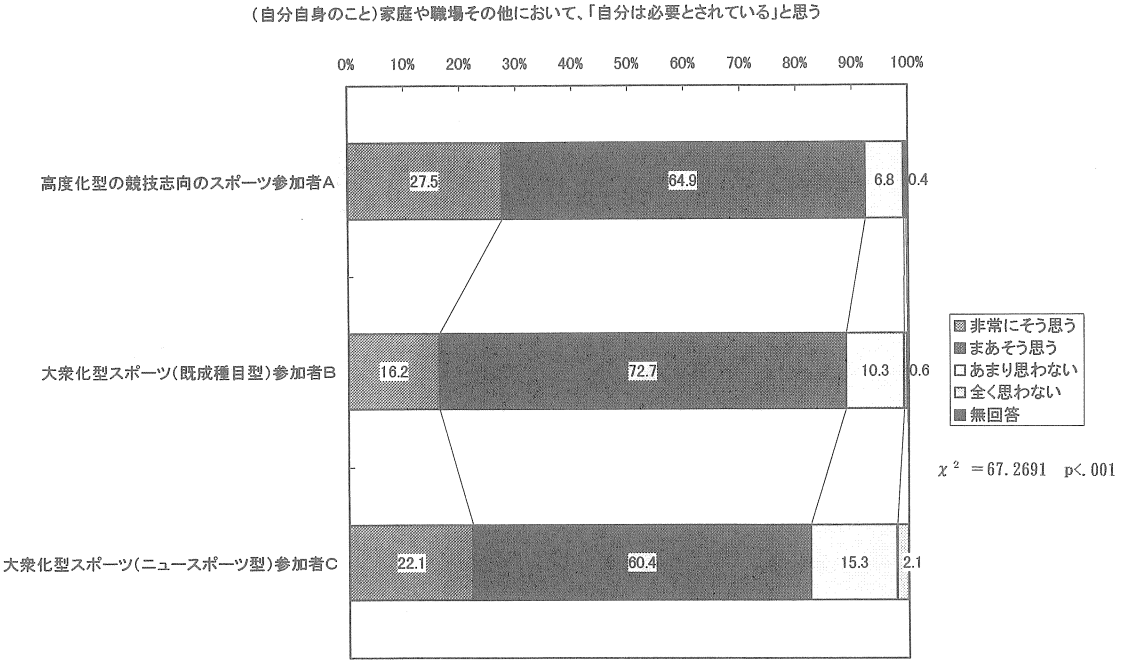


図 6 － 4　QOL－他者からの必要感

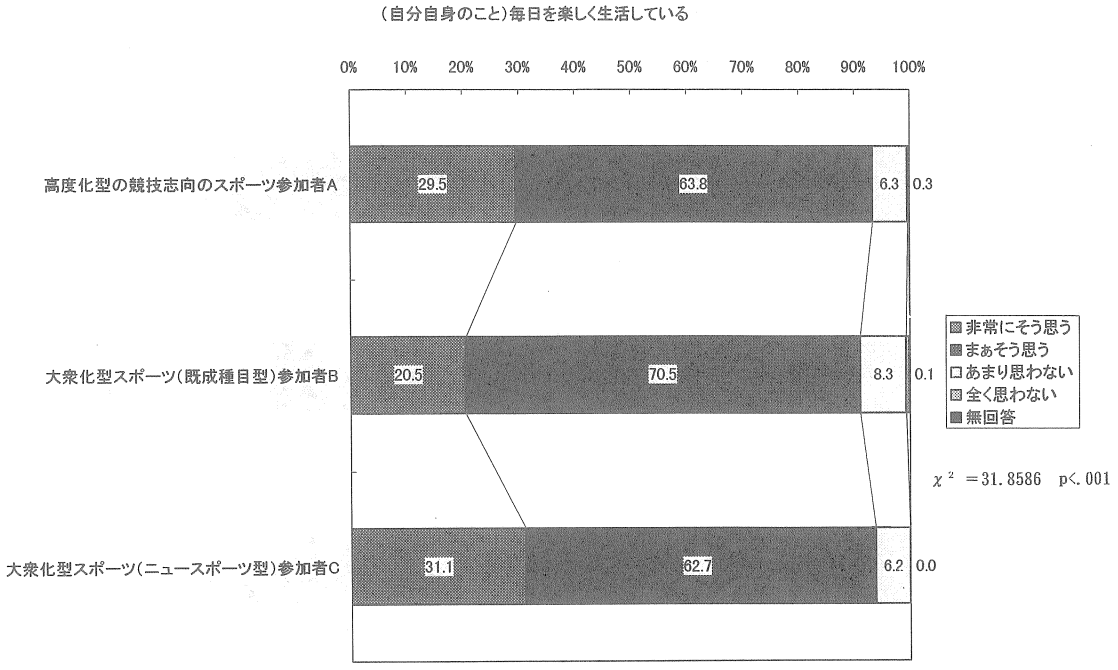


図６－５　QOL－生活の楽しさ

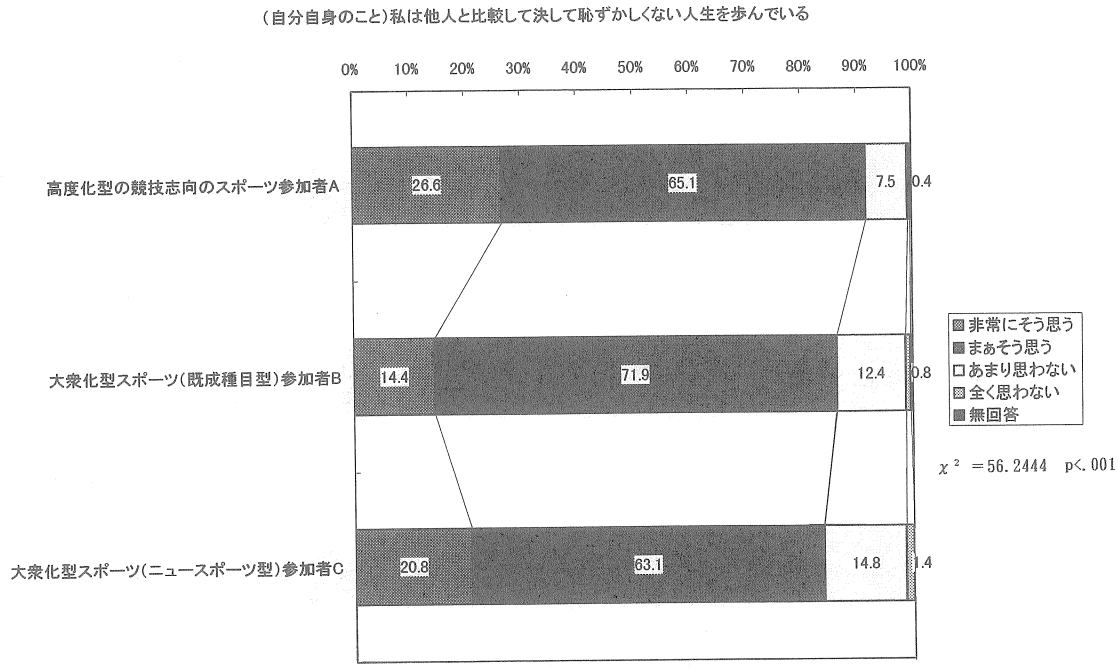


図６－６　QOL－人生に対する誇り

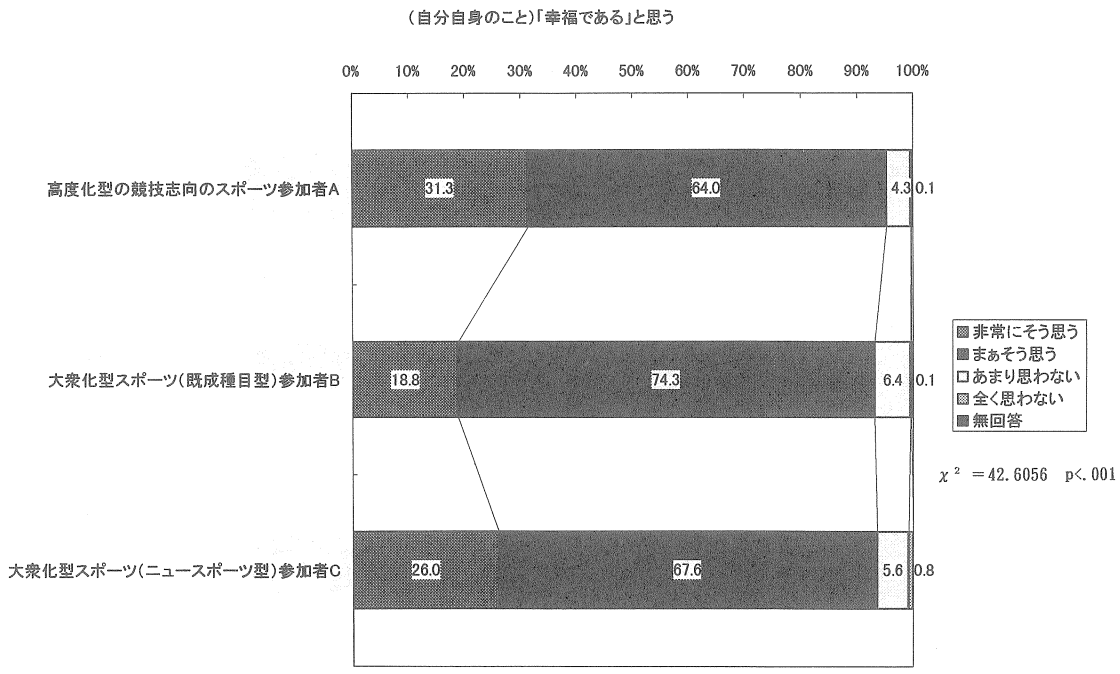


図６－７　QOL－幸福感

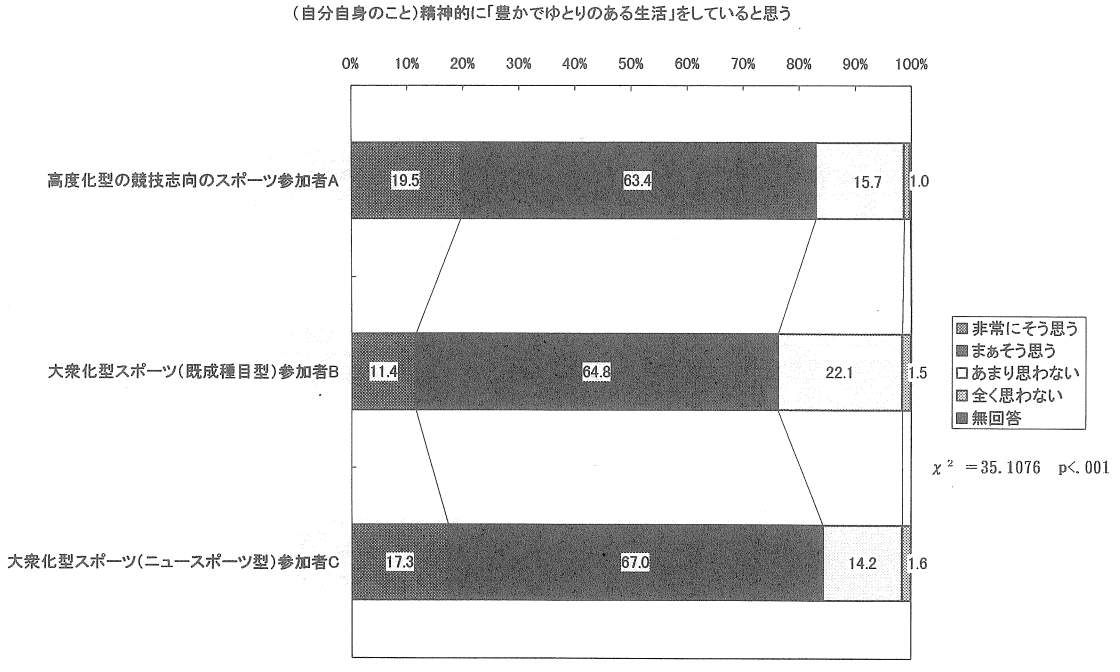


図６－８　QOL－生活における精神的豊かさ

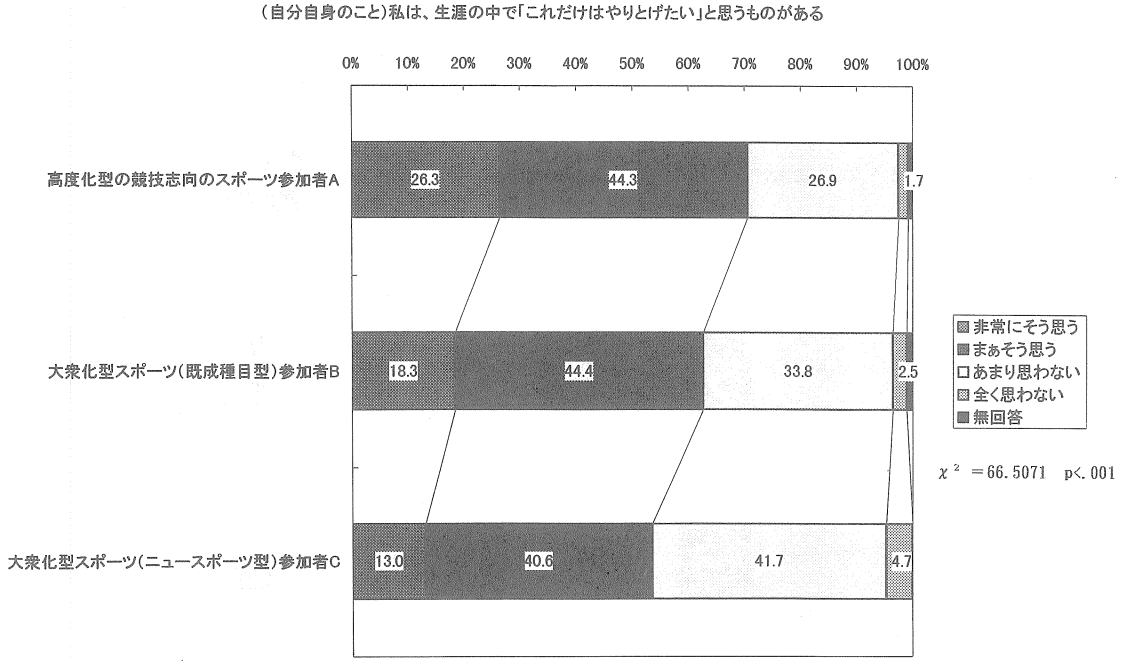


図６－９　QOL－人生目標達成への意欲

「仕事も余暇も同等に考えている」という中間型である（A－51.8%，B－47.2%，C－49.5%）．

中間型を含めて全体的には余暇重視型が多いが，先の「のめり込み」意識との関連で言えば，その意識の高さと余暇重視型とが比較的関係していることが示唆される．

３．余暇活動に使える自由時間の程度

３．１　平日［図６－10］

図６－10より，余暇活動に使える平日の自由時間の程度は，全参加形態を通じて１～４時間程度である．

形態別にみると，ニュースポーツ参加者Cは「２～４時間」と回答している者が44.5%と，他のA－29.2%，B－24.5%に比べて明らかに自由時間の程度が高く，それに続くのがAである（１～２時間未満を含めると計64.3%）．これに対して，既存種目の大衆化型参加者であるBは「ほとんどない」が27.6%を占め，他のA－10.7%，C－7.6%と比較して２～４倍の割合になっている．これは１時間未満に範囲を拡大しても，B－40.1%，A－21.6%，C－13.0%となっており，その自由時間の程度というスポーツ活動条件の差異は歴然としている．

このように同じ既存種目においても，高度化型志向と大衆化型志向における平日の自由時間の程度は前者の方が明らかに恵まれているのであり，さらに同じ大衆化型志向でもニュースポーツ参加者と既存種目参加者とではより一層異なった時間的条件の下でスポーツ活動が行われていることになる．

多様化の観点から考えると，これら平日の自由時間の違いは，活動レベルやその意識をさらに複雑に多様化させていくであろうし，一面ではその一証左としてスポーツクラブ規模の縮小化と量的増加が現れているとも考えられ，それら多様な条件や意識を組織化していく要点を検討していく必要があるだろう．また，先に検討したCの参加者の多様な参加意識の基礎的条件として，このような平日の自由時間量の多さがあげられることは確かであろう．

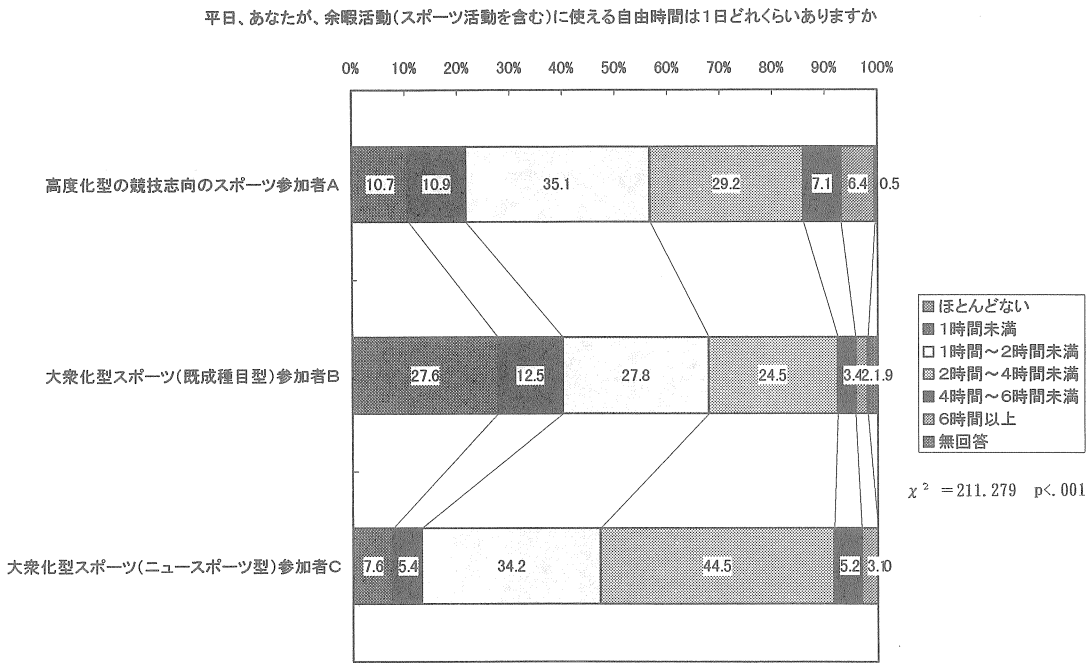


図6－10　余暇活動に使える自由時間の程度－平日

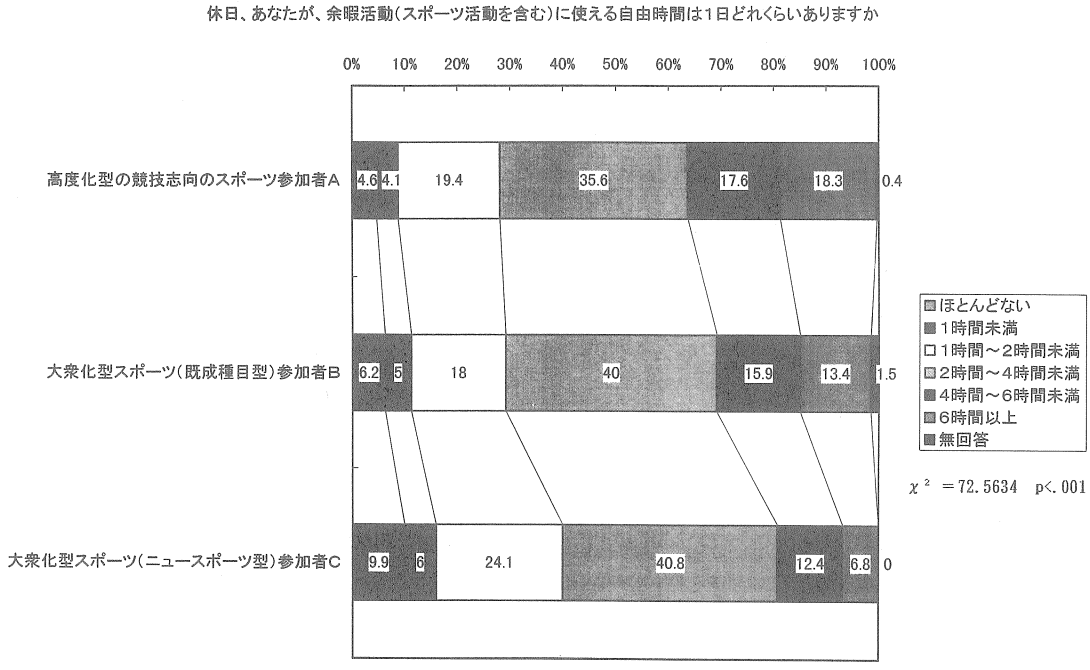


図6－11　余暇活動に使える自由時間の程度－休日

3．2　休日［図6－11］

図6－11より，余暇活動に使える休日の自由時間の程度は，全形態を通じて平日の自由時間を上回っており，「6時間以上」がA－18.3%を筆頭に，B－13.4%，C－6.8%の順になっている．

先の平日の自由時間に比べると，全体的には明らかに各参加形態の差異はなくなる傾向にある．しかし，4時間未満の範囲でみると，A－63.7%，B－69.2%，C－80.8%とCが比較的多い割合を占めているのに対して，「6時間以上」は先にみたようにA，B，Cの順になっている．これは休日の自由時間の程度でみる限り，既存種目の高度化型競技志向の参加者Aも，同じく大衆化型参加者Bも，いずれも休日に比較的時間を割く傾向があり，とくに後者Bにおいてはその傾向が比較的強いということであろう．前者Aは，平日も休日も比較的自由時間の程度が多いということになる．これに対して，CはAと同様の傾向がみられるものの，Aに比べればとくに休日の自由時間の集中的な確保は比較的少ない傾向にある．

このように，全般的に休日の自由時間は平日のそれより多く，休日にまとまったスポーツ活動を行なう傾向が見受けられるが，とくにBにその傾向が強くみられる．第5節で示されたBの「のめり込み」意識の相対的な低さや先のQOLの程度の相対的な低さを考えると，平日に自由時間がとれない分，休日に多くとれる余暇時間に練習が集中して行なわれ，あまり他の活動や休息にそれが振り向けられていない状況が推察される．それに対して，A，Cは平日・休日両活動タイプで自由時間が比較的多く，ゆとりのある活動をしている状況がうかがえる．

したがって，ニュースポーツ型の参加者Cは，自由時間の確保といった観点からみると，比較的高度化型参加者Aの同様の条件を有していることになり，そのような時間的条件からも高度化志向へシフトしていく基礎的条件を備えていると考えられることができる．

4．ま　と　め

1）本研究の対象となった中高年スポーツ参加者は，その参加形態を問わず，全般的には高いQOLの程度を示している．

2）しかし，参加形態別に見てみると，「非常にそう思う」のみの比較では，全般的に既存種目の大衆化型参加者Bが，他のA，Cに比べ低い傾向がみられる．先の「のめり込み」意識との関係では，その高さがQOLと正の相関をなしているとも考えられ，このことは中高年のスポーツに対する価値意識の一元的な見方を反映していると考えることができる．

3）他方，ニュースポーツ参加者のQOLの比較的高い傾向は，上記のような相関とは別に多様なかかわり方を保障することによってスポーツ参加にかかわるQOLを高める可能性を示唆している．

4）余暇観は，全般的に「仕事も，余暇も」といった中間型を含めて余暇重視型が多いが，仕事重視型はBの参加者に比較的多く，余暇重視型はA，Cの参加者に比較的多く見受けられる．

5）余暇活動に使える平日の自由時間は全形態を通じて1～4時間程度だが，Cの参加者が比較的自由時間の程度が高い．また逆に，Bの参加者は平日の自由時間の程度が比較的少ない．平日の自由時間の格差は，各参加形態間の多様化をますます進行させていくであろうが，今後はそのような多様な条件や意識をうまく組織化していくことによってスポーツ参加の満足度を高めていく必要がある．

6）余暇活動に使える休日の自由時間は全形態を通じて平日のそれを上回っているが，「6時間以上」ではA，B，Cの順で差がみられる．平日の自由時間が比較的少ない傾向にあるBでは，他のA，Cに比べより休日型のスポーツ活動になっていることが推察される．これに対して，A，Cでは平日も休日も比較的自由時間が確保される傾向にある．Cにみられる高度化型参加へのシフトへの基礎的条件として，このようなAと同じ自由時間の確保のされ方が考えられよう．

注および文献

1）金子らによれば，QOL はその対象として生活者自身の質と生活者周辺の環境の質に大きく分けてとらえることができると言う．また，前者はさらに生活者の意識と生活者の状態に分けてとらえることができるが，本研究では生活者の意識を対象として QOL の尺度項目を考えた．（金子勇・松本洸編著，『クオリティ・オブ・ライフー現代社会を知る』，福村出版，1986.）

2）多々納秀雄・橋本公雄・菊幸一・徳永幹雄・金崎良三，『健康度指標としての Quality of Life に関する研究』，昭和63年度文部省科学研究費補助金（一般研究A）研究成果報告書，九州大学健康科学センター，1989.

7．スポーツ実施上の問題や悩み

報　告　者　　加藤　爽子[1)]

本節では，前回実施された高度化型競技志向スポーツ参加者への調査結果の分析と同様に，中高年のスポーツ参加を阻むような問題や悩みについて，自由記述されたものを11項目に分類した（表7－1）．項目は，①健康･体力，②指導者，③施設，④練習方法･練習内容，⑤両立(仕事，家庭)，⑥経済的な負担，⑦練習時間の確保，⑧仲間，⑨行政，⑩マナー，⑪その他（大会に参加することなど）の11項目である．

前回の調査結果から，高度化型競技志向スポーツ参加者Aについてはその43%がスポーツをする上で，問題や悩みを抱えていながら週3日以上の練習を行い，大会に参加していた．その悩みや問題点として第一にあげられていたのはAでは男女とも健康・体力（32.3%）であり，ついで施設の問題があげられており，それ以外では練習時間の確保，経済的な負担，両立，仲間，指導者に関することなどは，男女の立場の違いによって順位が異なっていた．今回の調査では，問題や悩みを抱えていたのは，大衆化型既成スポーツ種目参加者Bの男性で20.2%，女性で13.0%，大衆化型ニュースポーツ参加者Cでは男性5.2%，女性5.9%であり，Aグループの方が問題や悩みを多く抱えていた（$P<0.01$）．（表7－1）．B・Cの間には有意差はみられなかった．

BやCグループで問題や悩みの第一位は，問題や悩みを抱えている男性の56.4%，女性の54.3%が「施設」と回答していた．施設の問題としては，公的施設の増設，安全なロード，利用時間－開放時間の延長，学校開放を望む声もあった．これには，商業スポーツ施設が経営的な問題から年々減少してきており，公的機関が乗り出さざるをえず，施設の充実が必要となってきている．中高年のQOLをはかり，中高年のスポーツ参加を増やすためには，スポーツの実施がもっと日常的に，容易できるような廉価で利用しやすい施設，設備が必要であり，早急に解決せざるをえない問題であろう．

次いで「健康・体力」に関すること（男性21.8%，女性37.1%）があげられており，加齢にともなう体力の衰え，ケガを含む故障の心配を訴えていたのはAの結果と同様であるが，Aの女性では健康・体力の問題が第一位にあげられていたのとは異なっていた．B・Cでは，まず施設の問題が先決であると考えられる．Aの女性の場合には，スポーツ参加が重要な位置をしめていること，トップレベルにある選手にとって故障やケガは大会参加を阻む要因となり，スポーツ継続に支障をきたすことなどから切実な問題となるが，B・Cについては，参加しているスポーツの量と質，目的の違いにより施設が健康・体力より優先していると思われる．

男女別にみると，男性では「練習時間の確保が難しい（10.9%）」としているのは仕事との両立にも関係するが，「練習時間がとれない」，「出張が多く長期に休まざるをえないので復帰するのに時間がかかる」などの悩みがあった．女性では「練習内容，方法について（12.9%）」が次いでみられ，至適運動量の問題，指導者との関わりもあった．中には「わかっていても身体が動かないために技術向上がない」，「同じミスを繰り返す」，「技能レベルの差についていけない」など運動技能の上達（頭でわかっていても身体が動かない，なかなか上達しない）についての悩みがみられた．また，女性でも練習時間時間の確保が難しい（10%）ことの中に，両立（家庭）とも関係するが，「試合のために家をあけることでの子供の精神面の不安」や，「子供が小さいために家を留守にしにくい」，「病気の親を抱えているために留守ができない」

1）東京学芸大学教育学部附属高校大泉校舎

表７－１　スポーツを継続していく上での問題点や悩み

		健康・体力	指導者	施設	練習内容	両立	経済的負担	練習時間	仲間	情報	行政	大会	マナー	目的
男性	高度化型	28.4	5.9	28.4	1.2	10.0	8.3	8.9	5.9	0.3	1.2	3.6	1.8	
	大衆化型	21.8	2.0	56.4	6.9	4.0	6.0	10.9	0.0	4.0	0.0	0.0	0.0	2.0
女性	高度化型	37.9	5.6	15.5	7.5	18.6	9.9	11.8	0.6	6.8	8.7	1.2	0.0	
	大衆化型	37.1	4.3	54.3	12.9	8.6	7.1	8.6	10.0	5.9	0.0	0.0	0.0	5.7

健康・体力　；加齢に伴う健康不安、スポーツ障害、故障、スポーツクリニック
指導者　；中高年に応じた指導力、指導者の勤務状況
施設　；利用しやすい施設、平日の利用時間の延長、公的施設の拡充、学校施設の開放、
練習内容ほか；至適運動量、運動強度、技能向上、ルールがわからない、中高年に応じた内容、カウンセリング
両立　；家庭ーこどもが小さい、病人がいる、家庭の理解
　　仕事ー通勤時間、出張
経済的な理由；施設使用料、大会参加費、
練習時間　；
仲間　；練習相手、チームの老齢化、メンバー不足、人間関係、派閥
行政のﾊﾞｯｸｱｯﾌﾟ施設建設、大会開催への後援
大会；中高年向きの大会の開催や種目の設定、審判レベルの向上、ルール
マナー　；
目的；楽しくやりたい、

などの悩みが男性とは異なり述べられていた。

Ｂ・Ｃグループの中でもう一つ注目すべきことは，スポーツをする目的の違いを問題や悩みとしていたことである．男性では「中高年の団体競技の場合，何を目的にするのか」「勝敗重視の人とスポーツを楽しみにする人とのギャップを悩む」という目的の違いや，女性のＢグループでは，「楽しむためにやっているはずのスポーツが技能や精神面でストレス」になっていたり，「もっと楽なスポーツがしたい」，「もっとみんなで楽しめて，かつ勝てたらよいのに」という声があった．このような参加目的の違いがＡの回答にはみられなかったことである．Ａの場合には，上位の大会参加を目指すなど自己のレベルアップに繋がることに関わる問題や悩みに比べ，Ｂ・Ｃでは，気楽に，多岐にわたる各自の目的のために運動・スポーツにたいして容易に関われないジレンマが現れているようである．（表７－１）

ま　と　め

1）中高年者が運動やスポーツに関わる時に生ずる問題や悩みなどは，高度化型競技志向スポーツ参加者Ａ，大衆化型既成スポーツ種目参加者Ｂ，大衆化型ニュースポーツ種目参加者Ｃにおいても，「施設」，「健康･体力」などはその問題や悩みの中心であり，同様な傾向を示した．

2）ＡのグループはＢ・Ｃよりも問題や悩みを訴える率が高く，それだけにあるレベルでのスポーツ参加になるとそれに付随して問題や悩みも増加する傾向がある．

3）Ａでは，「行政のバックアップ」「中高年向きの大会の開催の増加」「仲間では練習相手やよい人間関係」を求めていたのが特徴的であった．これに対して，Ａとは異なりＢ・Ｃでは「スポーツをする目的の違いー勝利志向か楽しみ追求か」が上っていたが，この問題については，参加者のグループ内のきしみを生じさせ，それがひいてはスポーツの参加や継続を阻む要因ともなることを考慮するする必要がある．

4）中高年のスポーツ参加を促し，QOL をはかるためにも，個人はもとより現在の社会情勢を考えると公的施設の充実，公的施設の運営方法の再検討がなされる必要がある．

第3章　まとめと提言

高度化競技志向型スポーツ参加者A，大衆化型既成スポーツ種目参加者B，大衆化型ニュースポーツ種目参加者Cの3つの調査に基づき，それぞれの対象者の男女別，年齢階層別の特徴から中高年のスポーツ参加の多様化・組織化を促すと思われる要因について次のような提言をする．

(1)　この調査では，高度化型競技志向スポーツ参加者Aは概ね中高年の各年代にわたっていたが，大衆化型既成スポーツ種目参加者Bでは中年層が80％をしめていた．大衆化型ニュースポーツ種目参加者Cでは，高年層の参加率が高い．大衆化型ニュースポーツ種目への高年層の参加は，過去のスポーツ経験の影響をあまり受けない点，あるいは体力的にソフトな面，運動強度がコントロールしやすいなどを考慮すると既成スポーツ種目より参加しやすいといえる．年齢階層に応じた既成概念にとらわれない，多様なスポーツ種目を用意することは，スポーツ参加を促すには効果的である．

(2)　スポーツに参加し，スポーツを継続させていくには，時間的なゆとりと経済的な面が必要条件でもある．

特に，中高年のスポーツ参加の副次的要因として，各学校期のスポーツ・体育経験の質的・内容的条件と有職であることが関与する．それは，学校時代からの本人のもつスポーツキャリアや体育等でのスポーツとの関わり方から，スポーツが身近な生活の要素となり，後年スポーツに関わりやすくなること，また，スポーツを実施するにはどうしても必要経費がかかることから，有職であることはスポーツ参加やスポーツの継続に影響する因子である．高年齢層になれば，ほとんどの人は現役からリタイアする．そのために，年金に頼らざるを得ない高年齢層にとっては経費の問題は大きい．場合によっては活動が狭められることになる．目前に迫っている超高齢社会を考慮して，廉価で利用しやすい施設等の提供を公的機関は検討する必要がある．

(3)　中高年のスポーツ活動は，志向と種目によって日常のスポーツ活動が大きく変化する．「競技志向」か「楽しみ志向」か，「健康・体力志向」か「社交志向」か，あるいは「個人種目」か「集団種目」か，また，「既成スポーツ」か「ニュースポーツ」などかで異なる．

逆に言えば，この組み合わせを検討することで中高年のスポーツの「多様化」，「組織化」に対応できることになり，その振興を図れることになる．単に実施しているスポーツ種目だけでなく，日常のスポーツ活動を視野に入れるとき，このことは，何にもまして重要な事柄となるであろう．昨年度はとりわけ「個人種目による対応」が望まれていることを提言したが，今年度の調査からは，上記の「組み合わせ」の重要性が指摘できる．

(4)　中高年のスポーツ参加や継続のきっかけになると思われる各スポーツ大会への参加は，Aを除いて，Cは市町村レベルの大会や，クラブ・地区大会への参加が圧倒的に多く，Bにおいては，市町村大会への参加がその主なものであった．また，Bでは各大会参加について無回答の率がA・Cに比べて多いことを考えると，競技的な大会は種目，技能レベルに左右されるため，スポーツ参加や継続のきっかけとはかえってなりにくい．大会が中高年のスポーツ参加を促し，中高年のスポーツの多様化，組織化に寄与するには，従来のような勝敗を重視したような大会開催のあり方から，ニュースポーツ種目やシニア大会にみられるようなプレイを楽しみ，参加者同士が交流できるような時間と場所を提供するような大会運営を考慮することが主催者にとっては必要になるであろう．

(5)　スポーツ大会に参加する意義や目的をみると，Aでは「ベストをつくす」ことであったが，B・

Cでは「プレイを楽しむ」ことをあげていた．特に，Cのニュースポーツ参加者では「交流」することがあげられていた．加齢にともない，大会参加の意識が「勝利志向」や「ベストをつくしてがんばる」ことより，「交流」するといった肩肘を張らないでスポーツへ参加するような姿勢へと変化していく．スポーツのもつ狭義の競争（闘争的）部分がスポーツの特質ではなく，年齢，体力，技能レベル，目的に応じたスポーツへの参加がその継続を促すことになる．スポーツをする当事者だけでなく，側面的に支援する指導者がスポーツに対する考え方を再検討し，スポーツプログラムについても大いに工夫することが求められる．

(6) スポーツを楽しく，継続させていくには，無理のない練習日数や練習時間を組むこと，生活にメリハリをつけることが必要であり，それが豊かなレジャーをおくることへと繋がる．中高年のスポーツ参加者には，若い頃とは異なり疲労の回復には時間がかかるだけでなく，故障が尾を引き治癒するまでに時間がかかることから，故障を引き起こさないようなスポーツ活動の仕方や，故障などへの対処方法などといったスポーツに関する様々な，有用な情報を提供することが必要であろう．

(7) 中高年の男性スポーツ愛好者では，40歳頃が転機になり，活動的になっている．これは，体力の衰えや身体的老化を感じはじめたことにより，スポーツ活動を積極的に実施するようになったものと思われる．それゆえ，40歳頃の中年者をターゲットにしたスポーツ振興のキャンペーンが40代以降のスポーツ参加の契機として効果的であると考えられる．

(8) 中年層の女性のスポーツ愛好者では，子育ての負担が少なくなった30歳代後半から40歳代にかけて，スポーツ活動を積極的に実施している．それゆえ，託児施設のあるスポーツ施設が増えれば，女性スポーツ愛好者はさらに増加するものと考えられる．

(9) 中年のスポーツ愛好者には，活動頻度の性差が顕著である．すなわち，女性愛好者は「週3日型」が中心であるが，男性では週末の「週1日型」がほとんどである．それゆえ，平日においても，スポーツ活動が実施できるワークスタイルの工夫，改善が求められる．

(10) ペタンクやグラウンド・ゴルフのニュースポーツ種目の愛好者は，高齢者が定年退職後，ニュースポーツへと再社会化された典型的な例である．また，過去のスポーツ経験をもつ者は少ない．それゆえ，これらのニュースポーツは，スポーツとは縁のなかった層が誰でも手軽に参加できる活動として，参加者が伸びたことがわかる．スポーツの潜在層や非実施者に対して，ニュースポーツはこれまでのスポーツ種目にない特徴をもち，新たな活動機会を提供する可能性を持っているといえる．

(11) ニュースポーツ愛好者には，施設利用の不便さを訴える声が強い．既存の競技施設は，特定種目の専用使用をしており，グラウンド・ゴルフやペタンクの大会には使用させないところがある．それゆえ，ニュースポーツの大会開催などにおいて，公共施設の使用規則を緩和し，広くスポーツ愛好者に門戸をあけるべきである．

(12) A，B，Cのどのグループの参加者においても，共通にスポーツ活動に対する強い生きがいを感じている．しかし，Cのニュースポーツ参加者は最もスポーツへの「のめり込み」意識が高いと予測されたAを上回る練習優先や練習継続への意識を持っている．このことは，ニュースポーツ参加者を単に大衆化型参加者ととらえることができない意識状況を示すものといえる．また，同じ既存種目の参加においても，高度化型と大衆化型との意識のずれは大きくなっており，この面においても多様なかかわり方の諸相が示された．したがって，中高年の地域スポーツ活動はその意識レベルにおいてますます多様化しているとの認識が必要であり，それは単なる種目の内容（既存種目か，ニュースポーツ種

目か）によって区分されるものではないとの観点がますます必要になってきている．

(13) 特に，ニュースポーツ参加者については，高度化型参加者の意識に近い「準競技者」的な「のめり込み」意識を持つ傾向にあり，その諸相をさらに既存種目参加者との関連や集団の組織的特性，参加者のキャリアといった点から事例的に調査研究（フィールド・ワーク）する必要がある．

(14) ＱＯＬ（クオリティ オブ ライフ）との関連では，参加形態を問わず全般的に高い相関を示しているが，Ａ→Ｃ→Ｂの順で「のめり込み」意識と正の相関関係にあることから，スポーツに対する価値意識が一元化している傾向がある．しかし，ＣにおけるＱＯＬの高さは，さまざまなスポーツに対するかかわり方を保障していくことの重要性を示唆しているものとも考えられ，多様なかかわり方それ自体をＱＯＬと関連させていくようなスポーツに対する多様な価値意識を醸成していくことが重要である．

(15) 各参加型とも平日，休日の自由時間には格差があり，それぞれの自由時間の使い方も異なる．したがって，中高年のスポーツ参加者の自由時間の確保の諸相を一律にとらえるのではなく，それぞれのレベル，種目やその関わり方によって基礎的条件が異なることを前提としながら，きめ細かい施設使用時間の設定やプログラムサービス等の施策を行う必要がある．

(16) 中高年のスポーツ参加者のスポーツに対する意識や態度，余暇観，余暇活動時間の状況を総合すると，われわれがタイプ分けする以上にそのかかわり方は多様化しており，特にニュースポーツ参加者にはそのような傾向が顕著にみられる．その結果，日本の地域スポーツのクラブ的状況はこのまま放置しておけば，ますます私事化，細分化して，逆に横の結び付きを重視する公共的な地域活動の意味合いを問われるようなことにもなりかねない．今後の超高齢社会における中高年の地域スポーツ活動の意味を問い直す意味で，多様化したスポーツニーズを柔軟に受けとめつつ，そのニーズの多様化の変容をも許容していく組織化の方向性とそのための施策がより一層重要になってきていると思われる．

(17) スポーツ実施上の問題点や悩みは，技能レベルの高い大会への参加者であるＡはＢやＣにくらべて問題や悩みを抱えている率が高い．その所在は，健康･体力という個人に帰するものと，施設や他者，公的機関に帰するものが多くみられた．特に，近年の経済的状況は思わしくなく，加えて，高年者の一線からのリタイアはスポーツ活動の継続にも影響することから，商業スポーツ施設よりも廉価な公的施設の利用が望まれている．このような要求に対して，有機的な対応（利用時間帯の拡大，使用料，指導者，プログラムサービスなど）が求められていることを公的機関（地域，市町村，都道府県，国）は考慮し，超高齢社会に対応できるようにその計画の見直しを図ることが必要である．

(18) ＢやＣの中に，「勝利志向よりもスポーツを楽しく行いたい」という要求がある．地域社会やスポーツクラブ等へのスポーツ参加の場合，特に既成スポーツ集団へ入ることは参加者にとって勇気がいるものである．中高年者のスポーツ参加を促し，生活を豊かにしていくためにスポーツは寄与することができるが，ややもするとスポーツの目的や意義が狭義に捉えられがちになるために，多様なスポーツニーズやスポーツ観に立ったスポーツ集団が日本では育ちにくい．

また，中高年者にとって加齢による老化，体力の低下は避けて通れないものである．故障やケガのリハビリテーションなどに対応できるようなカウンセリングシステムなどを準備することや，健康や体力とスポーツに関する情報の提供，指導者の育成，多様なプログラムサービスなどについて関係諸機関の工夫，開発に向けた検討が必要である．

（嘉戸　脩，宮内　孝知，加藤　爽子，
山口　泰雄，菊　幸一）

〔資料〕中高年のスポーツ参加に関するアンケート調査用紙

整理番号□□□

中高年のスポーツ参加に関する調査

調査ご協力のお願い

本調査は、比較的熱心にスポーツを行っておられる中高年の方々を対象に、その活動の現状を明らかにし、より豊かな生涯スポーツ活動の基礎資料を得るために行われるものです。お答えいただいた内容は、統計的に処理をしますので、あなたご自身や団体にご迷惑をおかけすることは絶対にございません。どうかありのままをお答えいただき、調査にご協力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

平成９年１０月

（財）日本体育協会スポーツ科学専門委員会　委員長　真野　高一

同委員会プロジェクト代表　東京学芸大学教授　嘉戸　脩

問１．あなたは、過去１年間に以下のレベルの大会にどの程度参加しましたか？
それぞれの「大会レベル」の「参加回数」に○をつけてください。

「大会レベル」	「参加回数」			
１）国際レベルの大会	１回	２回	３回以上	なし
２）全国レベルの大会	１回	２回	３回以上	なし
３）ブロックレベル（関東、近畿など）の大会	１回	２回	３回以上	なし
４）都道府県レベルの大会	１回	２回	３回以上	なし
５）市町村レベルの大会	１回	２回	３回以上	なし
６）クラブ・地区内等の大会	１回	２回	３回以上	なし

問２．あなたは、スポーツ大会で、過去３年間に何回優勝したことがありますか？
また、その優勝回数を含めて上位入賞（８位以内）は何回ありますか

１）過去３年間の優勝回数　（　　）回
２）過去３年間の上位入賞（８位以内）回数　（　　）回

問３．あなたが、スポーツ大会に出場する意義や目的は何ですか？
以下の４つの項目の中で、もっとも重視していると思う順にその項目の番号を入れてください。

１．試合に勝つこと　　２．ベストを尽くすこと　　３．プレイを楽しむこと
４．交流し、ふれあうこと

（重視している順位）
・１位（　）　・２位（　）　・３位（　）　・４位（　）

問４．あなたは、中高年（おおむね40歳以降）になって出場した大会の種目以外に何かスポーツを行っていますか？
また、行っているとしたら、その種目名は何ですか？

１．出場した種目しか行っていない
２．出場した種目以外に１種目を行っている
（種目名　　）
３．出場した種目以外に２種目以上を行っている（＊主な２種目のみを以下に書いてください）
（種目名　　）（種目名　　）

問５．あなたは、ふだん運動やスポーツをどの程度行っていますか？
１．ほぼ毎日
２．週に３日以上（年１５１日以上）
３．週に１～２日（年５１～１５０日）
４．月に１～３日（年１２～５０日）
５．年に１～３日
６．わからない

問６．あなたが出場したスポーツ大会の種目（専門種目）について、平均して１週間のうち何日程度、また１回につき何時間程度、練習を行っていますか？
１）１週間のうちの練習日数　　平均（　　）日
２）１回の練習時間　　平均（　　）時間

問７．運動やスポーツを行うための年間の費用は、おおよそいくらぐらいですか？
交通費、大会参加費、宿泊費、用具費、クラブ会費など、かかると思われる費用をすべて含めて答えてください。
約（　　）万円

問８．あなたは、運動やスポーツを行うために、クラブや同好会に所属していますか？
１．正式に所属している
２．正式に所属はしていないが、仲間はいる
３．所属していない

＜以下、１．か２．と回答した人のみ問８－１、２、３に答えてください＞

問８－１．そのクラブ（仲間）の人数は、およそどれくらいですか？
（　　）人

問８－２．男女一緒に活動するクラブ（仲間）ですか？
１．はい　　２．いいえ　　３．どちらともいえない

問８－３．活動する目的や能力が、ほぼ一致しているクラブ（仲間）ですか？

１．はい　　２．いいえ　　３．どちらともいえない

問９．あなたが、運動やスポーツを行う場所や施設はどのようなところですか？
あてはまるものすべてを選んでください。

１．近所の空き地や広場
２．校区の学校施設
３．市町村立あるいは県立の公共スポーツ施設（体育館・運動場など）
４．商業スポーツ施設
５．企業が所有するスポーツ施設
６．その他（　　）

問10．あなたは、スポーツ活動に関する以下の項目をどのように思いますか？
それぞれの項目について、あてはまる数字のところに○印をつけてください。

	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全く思わない
１）スポーツ活動は最高の生きがいである	1	2	3	4
２）スポーツ活動に対する多少の出費はやむをえない	1	2	3	4
３）仕事や家のことと練習が重なったとき、練習を優先する	1	2	3	4
４）周囲は自分が勝つことを期待している	1	2	3	4
５）試合が近づくと試合のことで頭がいっぱいになる	1	2	3	4
６）決められた練習は絶対に休むべきでない	1	2	3	4
７）技能レベルの違う人とは練習したくない	1	2	3	4
８）クラブや他のスポーツ仲間を身内だと感じる時がある	1	2	3	4

問11. あなたが、余暇活動（スポーツ活動を含む）に使える自由時間は１日どれくらいありますか？
平日と、休日の両方について答えてください。

[平日]	[休日]
１．ほとんどない	１．ほとんどない
２．１時間未満	２．１時間未満
３．１時間～２時間未満	３．１時間～２時間未満
４．２時間～４時間未満	４．２時間～４時間未満
５．４時間～６時間未満	５．４時間～６時間未満
６．６時間以上	６．６時間以上

問12. あなたは、余暇や仕事に関する次のような考え方についてどのように思いますか？もっともあてはまる内容を１つだけ選んでください。
１．仕事をするために余暇をとる
２．余暇を楽しむために仕事をする
３．仕事も余暇も同等に考えている
４．わからない

問13. あなたは、次のような項目についてどのように思いますか。それぞれもっともあてはまる番号に○をつけてください。

	非常にそう思う		まあそう思う		あまり思わない		全く思わない
１）全体として、今の生活に「生きがい」を感じている。	1	--------	2	--------	3	--------	4
２）現在の自分は、他人に対して誇りがもてると思う	1	--------	2	--------	3	--------	4
３）私は今の生活に満足している	1	--------	2	--------	3	--------	4
４）家庭や職場その他において、「自分は必要とされている」と思う	1	--------	2	--------	3	--------	4
５）毎日を楽しく生活している	1	--------	2	--------	3	--------	4
６）私は他人と比較して決して恥ずかしくない人生を歩んでいる	1	--------	2	--------	3	--------	4

	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全く思わない
7）「幸福である」と思う	1	2	3	4
8）精神的に「豊かでゆとりのある生活」をしていると思う	1	2	3	4
9）私は、生涯の中で「これだけはやりとげたい」と思うものがある	1	2	3	4

問14. あなたは、以下の年齢の頃、どの程度運動やスポーツ（学校での体育や体操等の授業以外で）実施していましたか？　あてはまる番号に○をつけてください。

	よくした（週3日以上）	時々した（週1日程度）	あまりしなかった（月1・2回程度）	ほとんどなし（それ以下）	該当しない
２０歳頃	1	2	3	4	9
３０歳頃	1	2	3	4	9
４０歳頃	1	2	3	4	9
５０歳頃	1	2	3	4	9
６０歳頃	1	2	3	4	9

問15. あなたは、学校在学中に部活動やその他の定期的なスポーツ活動を行っていましたか？

小・中・高・大学別に下記の１．～３．の番号を、表の「定期的なスポーツ活動の有無」の欄に、記入してください。

また、「１．行っていた」と答えた方は、その主な種目を１つだけ「種目」の欄に書いてください。

１．行っていた　　２．行っていない　　３．不明・該当しない

	定期的なスポーツ活動の有無（＊上の1.~3.の番号を記入）	行っていた主な種目名
１．小学校		
２．中学校		
３．高校		
４．大学		

＜最後に、あなたご自身のことについて、おたずねします。＞

問16. 性別は？

1．男　　2．女

問17. 満年齢は？

（満　　歳）

問18. 最終学歴は？

1．小学校卒
2．高等小学校卒
3．中学校卒
4．旧制中学校卒
5．高校・高専卒
6．旧制高校卒
7．大学・大学院卒
8．その他（　　）

問19. ご職業は？

まず、以下のａ．自営業主、ｂ．家族従業者、ｃ．被雇用者、ｄ．無職の４つの大項目から１つを選び、次にその項目の中からまた番号を１つ選んでください。

ａ．自営業主
　1．農林漁業　　2．商工サービス業　　3．自由業
ｂ．家族従業者
　4．農林漁業　　5．商工サービス業
ｃ．被雇用者
　6．管理職　　7．専門技術職　　8．事務職　　9．労務職
　10．パート雇用
ｄ．無職
　11．専業主婦　　12．その他の無職　　13．わからない・不明

問20. あなたがスポーツを継続して実施する上で、問題点や悩みがあれば、ご自由にお書きください。

※以上で質問を終わります。

長時間にわたり調査にご協力をいただき、ありがとうございました。